

平成12年度 四絡幼稚園改築事業に伴う

# 小山遺跡第3地点発掘調査報告書

(第4次発掘調査)

2002. 3

出雲市教育委員会

平成12年度 四絡幼稚園改築事業に伴う

# 小山遺跡第3地点発掘調査報告書

## (第4次発掘調査)

2002. 3

出雲市教育委員会



調査区全景(右が北)

巻頭図版2



調査区東側と第3次調査区南側(右が北)



SD03遺物出土状況

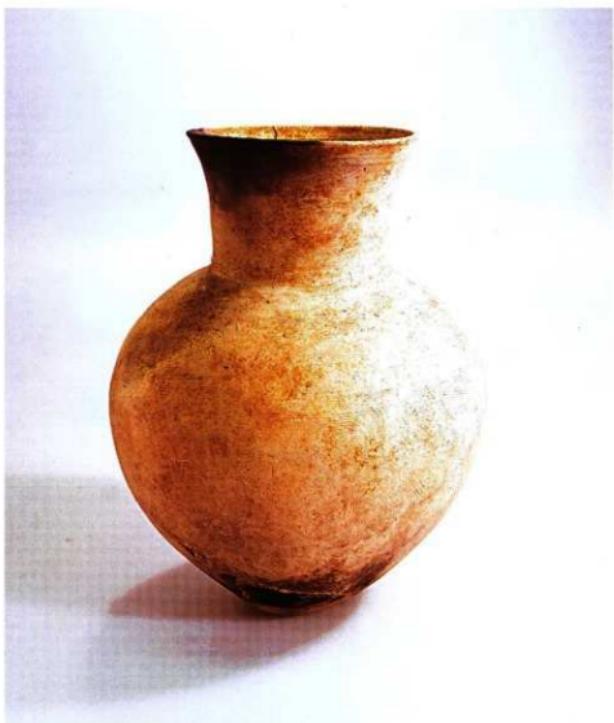


SD03出土遺物



SK10出土遺物

卷頭図版4



SD05出土壺



SD03出土土製品

## 序

小山遺跡が所在する出雲市四絡地区は、矢野遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発に伴って、発掘調査も増え、しだいに古代四絡地区の様相が明らかになりつつあります。

このたび、出雲市立四絡幼稚園改築事業に伴い、小山遺跡第3地点を発掘調査いたしました。その結果、弥生時代から古墳時代初頭にかけてと奈良・平安時代及び中世の遺構・遺物を検出しました。特に、古墳時代初頭に埋まつた溝状遺構は、天神遺跡や古志本郷遺跡・下古志遺跡などでも確認された「環濠」と類似しており、貴重な発見と言えます。また、墨書き土器が検出され、平成6年度（第1次）調査において確認された墨書き土師器・ヘラ描き須恵器などと合わせ、古代の人々の暮らしを伺い知るうえでの重要な資料となりました。

これらの成果が、今後の研究資料として広く活用され、歴史の解明と郷土の発展に寄与することを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご指導ご協力賜りました関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。

平成14年（2002）3月

出雲市教育委員会  
教育長 多久 博

## 例　　言

1. 本書は、出雲市（建築課）より依頼を受け、出雲市教育委員会が、平成12年度に実施した、出雲市立四絡幼稚園改築事業に伴う、小山遺跡第3地点第4次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は次のとおりである。

小山遺跡第3地点（出雲市遺跡地図遺跡番号G04、地図番号10.11）  
出雲市小山町652番地
3. 発掘調査は、平成12（2000）年11月6日に着手し、平成13（2001）年3月30日に終了した。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会  
事務局　大田　茂（出雲市教育委員会 文化振興課課長）  
調査指導　田中義昭（島根県文化財保護審議委員）  
池淵俊一（島根県教育庁 文化財課 主事）  
調査担当者　園山　薰（出雲市教育委員会 文化振興課 嘴託員）  
調査補助員　糸賀伸文、勝部真紀、石橋弥生、宮崎　綾、伊藤めぐみ、（以上臨時職員）
5. 発掘調査、遺物整理、報告書作成においては、以下の方々の協力を得た  

発掘調査　吾郷　栄、吾郷要子、板垣将信、大森長一郎、奥屋孝之、小玉周平、小室和子、高根常代、土肥源市、富田　勉、畠　守隆、福田益之、星野勝義、三原節夫、吉川幸男、吉田　栄、米原信夫、渡部正義  
遺物整理　飯國陽子、吹野初子、河井栄子、岩崎晶美
6. 出土遺物の実測は、上記調査員・調査補助員のほか、伊藤晶子、鬼村奈津子、片倉愛美、佐藤三鈴、瀧尻幸平が行った。
7. 本書に掲載した遺物写真的撮影は、園山が行った。また、X線写真撮影では、島根県埋蔵文化財調査センターの協力を得た。
8. 発掘調査、ならびに報告書作成に当たっては、以下の方々から有益な御指導・助言を頂いた。  
記して謝意を表したい。（敬称略）

松井　章（奈良国立文化財研究所）、平石　充（島根県立博物館）、錦田剛志（同）、松本岩雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、西尾克己（同）、内田律雄（同）、中川　翠（同）、松尾充晶（同）、松山智弘（同）、飛田恵美子（島根大学生）
9. 石器の石材鑑定は羽木伸幸氏（社会福祉法人千鳥福祉会　嘱託員）にお願いした。
10. 挿図中の北は、磁北を指す。従って測量法による第III座標系のX軸より、7°55' 西の方向を指す。レベル高は海拔高を示す。
11. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

S B：掘立柱建物、S A：柱列、S E：井戸、S K：土坑、S D：溝、S X：不明遺構
12. 本書の執筆・編集は園山が行った。
13. 出土遺物及び実測図、写真等の記録は出雲市教育委員会において保管している。

## 本文目次

巻頭図版

序

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の経緯 .....	3
第3章 調査の結果 .....	8
第1節 調査の概要 .....	8
第2節 遺構と遺物 .....	10
第4章 まとめ .....	81
出土遺物観察表 .....	86
図 版 .....	1～51

## 挿 図 目 次

第1図 小山遺跡第3地点周辺の遺跡分布図	2	第19図 SE02実測図 .....	20
第2図 小山遺跡第3地点調査配置図 .....	3	第20図 SE02出土遺物実測図 .....	21
第3図 遺構配置図 .....	4・5	第21図 SE03実測図 .....	21
第4図 上層図 .....	6・7	第22図 SE04実測図 .....	22
第5図 土層図 .....	8	第23図 SE04出土遺物実測図 .....	23
第6図 SI01実測図 .....	9	第24図 SE05実測図 .....	24
第7図 SI01出土遺物実測図 .....	10	第25図 SE06実測図 .....	25
第8図 SA01実測図 .....	11	第26図 SX01実測図 .....	26
第9図 SA02実測図 .....	11	第27図 SX01出土遺物実測図 .....	26
第10図 SB01実測図 .....	12	第28図 SK01実測図 .....	27
第11図 SB02実測図 .....	13	第29図 SK02実測図 .....	27
第12図 SB03実測図 .....	14	第30図 SK03実測図 .....	28
第13図 SB03-P2出土遺物実測図 .....	14	第31図 SK03出土遺物実測図 .....	29
第14図 SB04実測図 .....	15	第32図 SK04実測図 .....	30
第15図 主要ピット実測図 .....	16	第33図 SK05・06実測図 .....	31
第16図 P0422出土遺物実測図 .....	17	第34図 SK07実測図 .....	32
第17図 主要ピット実測図 .....	18	第35図 SK07出土遺物実測図 .....	32
第18図 SE01実測図 .....	19	第36図 SK08実測図 .....	33

第37図	SK09実測図	34	第59図	SD03出土遺物実測図6	58
第38図	SK09出土遺物実測図	33	第60図	SD03出土遺物実測図7	59
第39図	SK10実測図	35	第61図	SD04実測図	62・63
第40図	SK10出土遺物実測図1	37	第62図	SD04土層図	64
第41図	SK10山上遺物実測図2	38	第63図	SD04山上遺物実測図1	65
第42図	C11Gr土器溜り実測図	39	第64図	SD04出土遺物実測図2	66
第43図	C11Gr土器溜り出土遺物実測図1	41	第65図	SD05・06実測図	67
第44図	C11Gr土器溜り出土遺物実測図2	42	第66図	SD05山上遺物実測図2	68
第45図	C11Gr土器溜り出土遺物実測図3	43	第67図	SD07実測図	69
第46図	C11Gr土器溜り出土遺物実測図4	44	第68図	SD08・09実測図	70
第47図	A・B11Gr土器溜り実測図	45	第69図	SD10実測図	71
第48図	A・B11Gr土器溜り出土遺物実測図	46	第70図	SD11・12実測図	72
第49図	SD01・02実測図	47	第71図	SD08・10・12出土遺物実測図	73
第50図	SD01実測出土遺物図	48	第72図	SD13実測図	74
第51図	SD02実測山上遺物図	48	第73図	SD13出土遺物実測図	75
第52図	SD03実測図	50・51	第74図	SD14実測図	76
第53図	SD03土層図	52	第75図	SD16実測図	77
第54図	SD03出土遺物実測図1	53	第76図	遺構外出土遺物実測図1	78
第55図	SD03出土遺物実測図2	54	第77図	遺構外山上遺物実測図2	79
第56図	SD03山上遺物実測図3	55	第78図	遺構外出土遺物実測図3	80
第57図	SD03出土遺物実測図4	56	第79図	小山遺跡遺構変遷図	82
第58図	SD03出土遺物実測図5	57	第80図	小山第3地点遺跡遺構配置図	83

# 図版

巻頭図版1 調査区全景

巻頭図版2 調査区東側と第3次調査区南側  
(右が北)

S D 0 3 遺物出土状況

巻頭図版3 S D 0 3 出土遺物

S K 1 0 出土遺物

巻頭図版4 S D 0 5 出土壺

S D 0 3 出土土製品

図版1 調査前状況(東側)南から  
調査状況

(第3次調査区から第4次調査区を望む)

図版2 S I O 1 調査状況(東から)

S I O 1 (北から)

S B O 1 (南から)

図版3 S B O 2 検出状況(南から)

S B O 2 ピット土層断面

S B O 2 (南から)

図版4 P O 5 1 5 遺物出土状況

S E O 1 遺物出土状況

S E O 2

図版5 S E O 3

S E O 4 土層断面

S E O 4 (南から)

図版6 S E O 5 (北から)

S E O 5 中央ピット内遺物出土状況

S E O 6 (南から)

図版7 S X O 1 遺物出土状況

S X O 1 遺物出土状況(接写)

S X O 1 (東から)

図版8 S K O 3 遺物出土状況(北から)

S K O 3 遺物出土状況(接写)

S K O 3 (北から)

図版9 S K O 5 · 0 6 (南から)

S K O 7 (南から)

S K O 8 (南から)

図版10 S K 1 0 遺物出土状況 (東から)

S K 1 0 (東から)

図版II C 11 G r 土器溜り遺物出土状況

A · B 11 G r 土器溜り遺物出土状況

(東から)

図版12 S D 0 2 · 0 1 (南から)

S D 0 3 検出状況(南から)

図版13 S D 0 3 遺物出土状況(南から)

S D 0 3 遺物出土状況(北から)

図版14 S D 0 3 遺物出土状況(接写)

S D 0 3 遺物出土状況(接写)

図版15 S D 0 3 調査状況(南から)

S D 0 3 下層遺物出土状況(南から)

S D 0 3 土層断面(南から)

図版16 S D 0 3 A - A' 土層断面(中央部)

S D 0 3 (南から)

図版17 S D 0 3 · A. B 11 G r 土器溜り

調査状況(東から)

調査区から北を望む

図版18 S D 0 4 検出状況(南から)

S D 0 4 遺物出土状況(北から)

図版19 S D 0 4 上層断面(南から)

S D 0 4 (北から)

図版20 S D 0 5 検出状況(北から)

S D 0 5 遺物出土状況

図版21 S D 0 5 (北から)

S D 0 9 · 0 8 (南から)

S D 1 0 遺物出土状況

図版22 S D 1 1 · 1 2 (北から)

S D 1 3 遺物出土状況

図版23 S I O 1 出土遺物

図版23 P O 4 2 2 出土遺物

図版24 主要ピット出土遺物

S E O 1 · 0 2 · 0 4 出土遺物

図版25 S X O 1 出土遺物

S K O 3 · 0 9 出土遺物

S K O 3 出土遺物

S K 0 7 出土遺物	図版38 S D O 3 出土遺物
図版26 S K 0 7 出土遺物	図版39 S D O 3 出土遺物
S K 1 0 出土遺物	図版40 S D O 3 出土遺物
図版27 S K 1 0 出土遺物	図版41 S D O 3 出土遺物
図版28 S K 1 0 出土遺物	図版42 S D O 3 出土遺物
図版29 C I I G r 土器溜り出土遺物	図版43 S D O 4 出土遺物
図版30 C I I G r 土器溜り出土遺物	図版44 S D O 4 出土遺物
図版31 C I I G r 土器溜り出土遺物	図版45 S D O 4 出土遺物
図版32 C I I G r 土器溜り出土遺物	S D I 0 出土遺物
A · B I I G r 土器溜り出土遺物	図版46 S D I 3 出土遺物
図版33 A · B I I G r 土器溜り出土遺物	S D O 5 出土遺物
S D O 3 出土遺物	図版46 S X O 1 出土古錢
S D O 3 出土遺物	図版47 遺構外出土遺物
図版34 S D O 3 出土遺物	図版48 遺構外出土遺物
図版35 S D O 3 出土遺物	図版49 遺構外出土遺物
図版36 S D O 3 出土遺物	図版50 遺構外出土遺物
図版37 S D O 3 出土遺物	図版51 S D O 1 · 0 2 出土遺物
S B O 3 - P 2 出土遺物	鉄製品X写真

## 第1章 位置と環境

小山遺跡は、出雲市中心部の北側に隣接する四経地区に所在する。同地区は、近年ますます都市化が進み、発掘調査も急増してきている。小山遺跡は、弥生時代の拠点集落として知られる矢野遺跡や、大塚遺跡、姫原西遺跡、藏少路西遺跡などとともに、「四経遺跡群」を形成する遺跡のひとつである。

「四経遺跡群」の中核となる矢野遺跡は、縄文時代後・晚期から始まる集落遺跡で、矢野第3地点では弥生時代後期に吉備地方から搬入された特殊土器などが発見されている。小山遺跡は矢野遺跡に付随して弥生時代中期中葉から造営されてきた。

本調査地は、出雲考古学研究会の調査により地点分けされた小山遺跡第3地点にあたる<sup>④</sup>。旧神戸川の下流域に形成された自然堤防上に立置しており、小山遺跡の北東部分にあたる。旧河道の右岸に形成された微高地上に発展した遺跡である。東は大塚遺跡に接し、旧河道の左岸に小山遺跡第1・第2地点を見る。本遺跡ではこれまでの調査で、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡であることが分かっている。

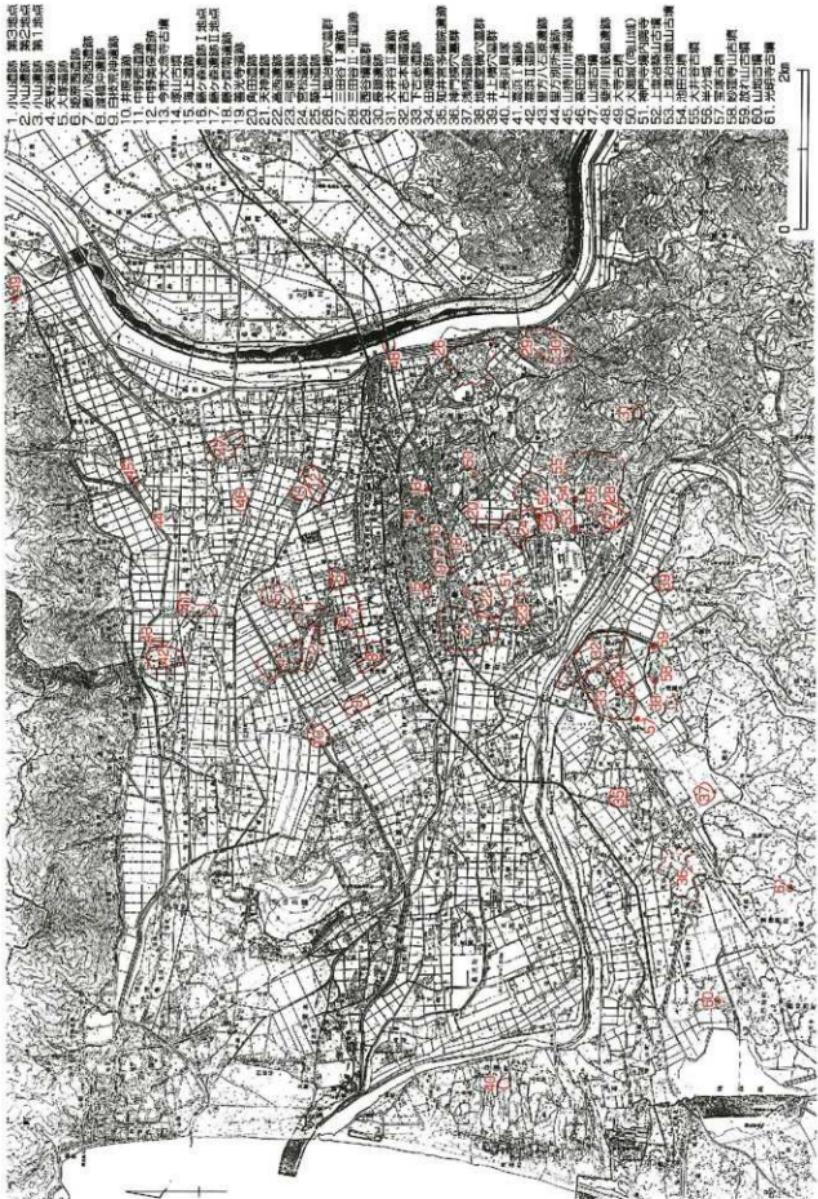
縄文時代、「神門の水海」と呼ばれた潟湖の縁辺部に集落が出現し始め、後・晚期になって、矢野遺跡や藏少路西遺跡・善行寺遺跡など、平野の中心部でも本格的に発展してくる。縄文時代後・晚期の遺跡からは、弥生時代前期の遺物が出土しており、連続して遺跡が存続していたことが窺える。

弥生時代中期以降、矢野遺跡をはじめ平野部の集落は急増し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの拠点集落の出現を見る。小山遺跡第3地点では、平成9年度の調査（第2次）で、弥生時代中期後葉から後期前葉の「環濠」と思われる溝状構造が確認されている<sup>⑤</sup>。後期後半に至って、出雲平野を見下ろす西谷丘陵に四隅突出型墳丘墓が築かれるなどの発展を見るが、終末期から古墳時代初頭にかけて、ほとんどの遺跡は終息してしまう。その原因是未だ解明されていない。古墳時代前期の平野中心部は空白期であり、山持川川岸遺跡・浅柄遺跡など縁辺部でわずかに遺跡が確認されるのみである。古墳も北山山麓に大寺古墳・神西湖東岸に山地古墳などが築かれる程度に過ぎない。これは、畿内中央政府との関係が影響しているものと考えられる。

古墳時代中・後期になると、平野部の集落も徐々に再興ていき、出雲地方最大の前方後円墳である今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳などの大型古墳が築かれるようになり、終末期には上塩治横穴墓に代表される横穴墓が多数分布するようになる。

律令時代、平野の各地で遺跡が確認されている。古志本郷遺跡では近年の調査で、「神門の郡家」に比定される建物跡が発見されている。平野の西には、当時西流していた斐伊川と神戸川による「神門水海」が広がっており、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、本遺跡付近は「神門郡八野郷」に比定されている。平成6年度の調査（第1次）で、墨書き土器やヘラ書き土器が確認され、同書記載の「矢野郷」との関連も指摘されている<sup>⑥</sup>。

中世に至って、藏少路西遺跡からは12~15世紀の朝山氏の居館跡と考えられる遺構が確認され<sup>⑦</sup>、また、矢野遺跡では14~15世紀の屋敷跡が確認されており、四経地区は中世以降も繁栄してたようである。



第1図 小山測量第3地点周辺の遺跡分布図

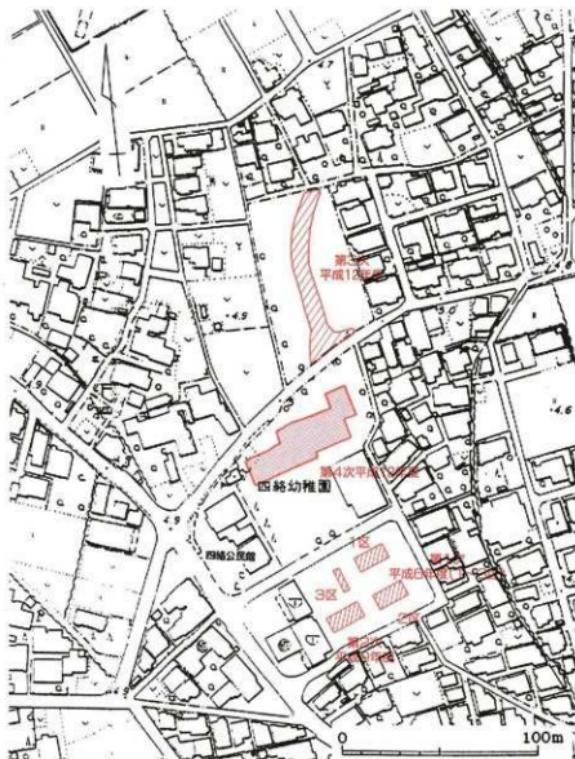
## 第2章 調査の経緯

平成12年（2000）3月17日付で、出雲市長（建築課）より、出雲市立四絆幼稚園改築事業による新園舎建設予定地内の埋蔵文化財試掘調査の依頼があった。事業予定地は周知の遺跡である小山遺跡第3地点の範囲内であり、平成6年度、平成9年度の発掘調査において、当予定地周辺が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されている。調査対象となる新園舎建設予定地は1,200m<sup>2</sup>である。ただし、新園舎は既存の園舎跡地での建て替えであるため、建築課と協議し、園舎南の園庭に仮園舎を建設し、その後既存園舎を解体するため、調査は10月以降に実施することになった。平成12年（2000）11月6日より、出雲市教育委員会が調査を実施し、平成13年3月30日に終了した。

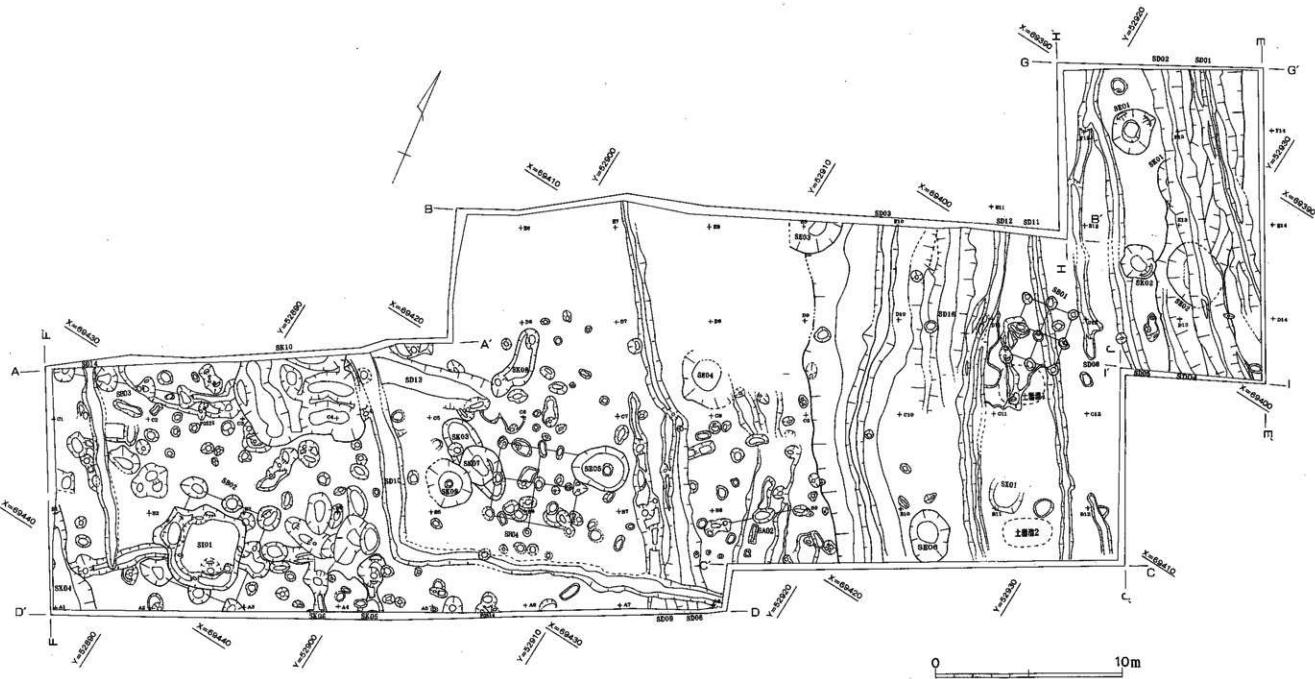
なお、本調査地の北20mでは、市道四絆30号外1線道路改良工事に伴う発掘調査が年度始めより実施されており、平成12年末より平成13年始めにかけて並行して調査が行われた。これにより、本工事

予定地内の発掘調査は終了し、島根県教育委員会と協議の上で、工事着手の運びとなった。

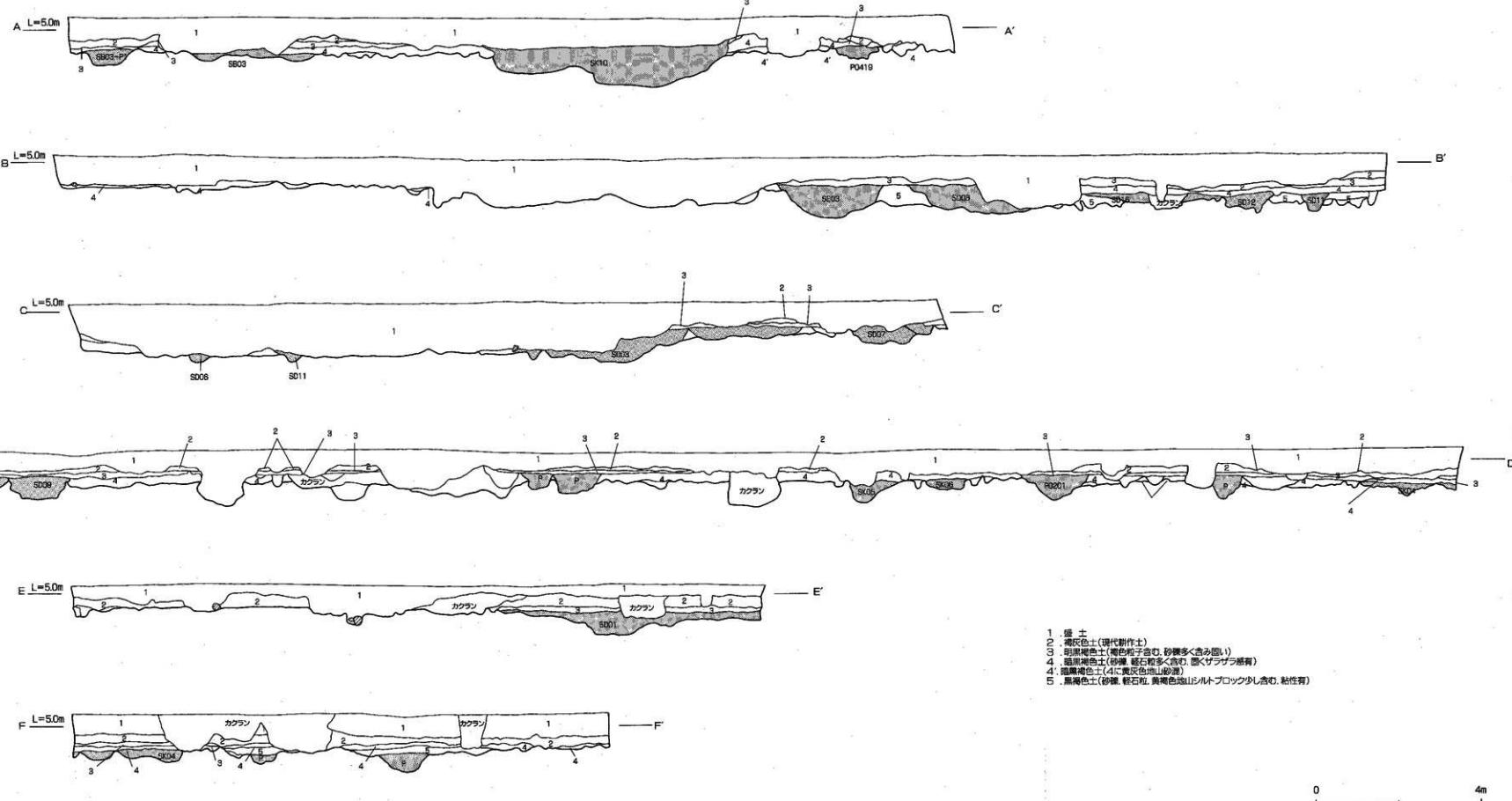
なお、平成13年度も出土遺物の整理作業を継続し、平成14年（2002）3月に本書を発刊するに至っている。



第2図 小山遺跡第3地点調査配置図(S=1:2,500)



第3図 遺構配置図(S=1:200)



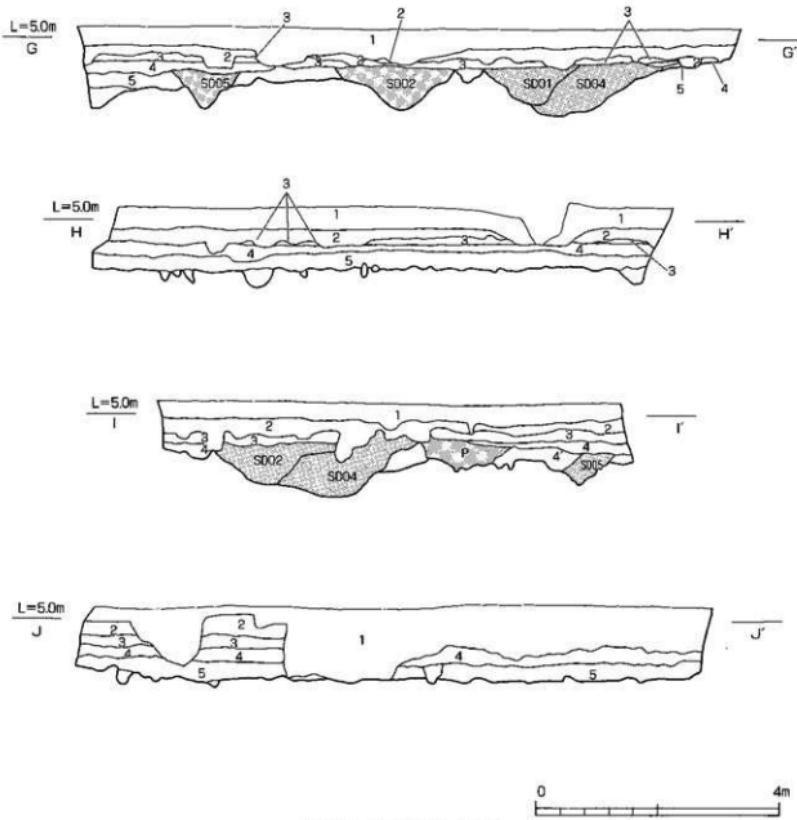
第4図 土層図(S=1:80)

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査の概要（第3～5図）

本調査区は四絃幼稚園新園舎の建設予定地で、調査面積は約1200m<sup>2</sup>である。建物の形に添った長方形の調査範囲で、東西の長さ65m、南北幅は14m～27mに亘る。表土を重機により約80cm掘り下げた後、遺物包含層を徐々により下げながら遺構検出に努めた。

本調査地は四絃幼稚園の園舎が建っていた場所であるため、建物の基礎やこれまでの建て替え、建て増し工事により、遺構面が搅乱により破壊されている箇所が多数確認された。そのため、遺構の形状やつながりが正確につかめないと言う弊害が出ている。にもかかわらず、多数の溝状遺構・井戸・土坑・掘立柱建物跡・ピット等を検出した。

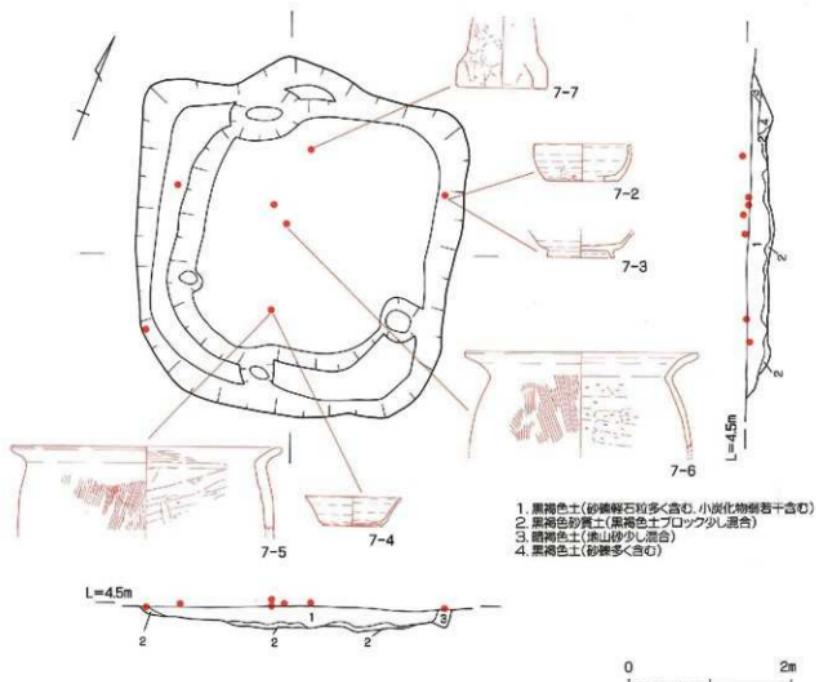


第5図 土層図(S=1:80)

2. 3層は中世以降の旧耕作土と考えられる。4層は奈良・平安時代の遺物を出土する包含層である。4'層、5層が地山上に堆積している。5層からは弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が出土している。この5層は、調査区の東側、10. 11グリッドで深く堆積している。この範囲で土器溜まりを検出しており、SD03とSD04の間で、地山も落ち込んでいる。

調査区の西側では5層の堆積は見られなくなり、弥生時代から古墳時代の遺構も無くなる。古墳時代前期前葉の浅い溝状遺構（SD13）と土坑（SK03）を検出したのみである。そして、SK10などの奈良・平安時代の遺構が多数検出されるようになる。これは、標高が関係しているものと考えられる。標高の高い部分は、4層下面で一様に削平されていることが土層の観察から窺える。古い時代の遺構は削り取られてしまった可能性がある。

標高4.5～4.2mで地山に至る。地山は中央より東側が黄褐色シルトで、西側が黄灰色砂である。第1次調査区でも、西側は砂層になっており、第1次調査区の西南に位置する第2次調査区においては全面砂層であったことを考えると、南西方向から北東方向に地山は堆積していったものと考えられ、これは南東から北西方向に流れる旧河道の流路に関係するものと考えられる。地山のレベルは、東側と中央部がもっとも高く（標高約4.5m）、西側に向かってやや下っている。



第6図 SII01実測図(S=1:60)

東側では遺物包含層から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物が多く出土しており、古墳時代前期前葉に埋まつた「環濠」と思われる2条の溝状遺構（SD03. 04）を検出した。

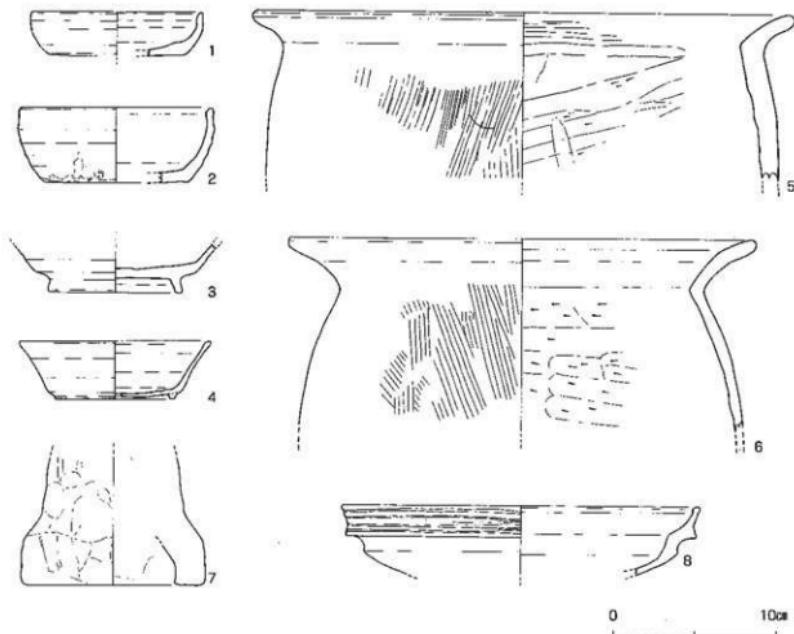
## 第2節 遺構と遺物

### 1. 穫穴建物跡（第6図）

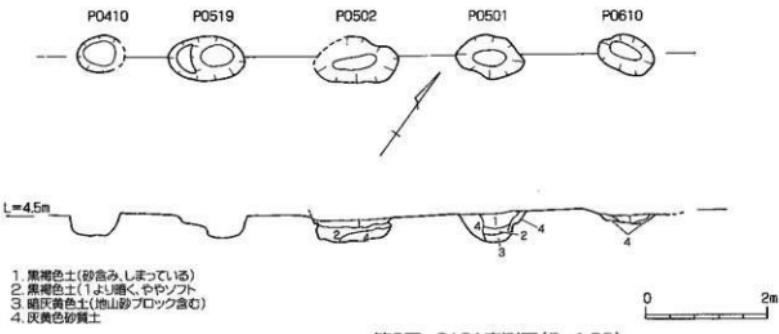
S I O 1 (第6図)

S B 0 2 のピットを切る形で検出した遺構である。1辺が3.9~4.3mの隅丸方形プランを呈す。深さは25cmと浅く、竪穴住居跡と考えられるが、断定はし難い。明確に柱穴と分かるピットは見られない。南北を軸とした場合、N-14°-Wを指向する。後述するS B 0 1. 0 2とは10°西に軸がずれており、時期的には一致しないものと思われる。S B 0 2 のピットの一部を切ることから、S B 0 2 より新しいと考えられる。

覆土からは須恵器と土師器の破片がわずかに出土するのみである。固化できた出土遺物はいずれも上面・上層からの出土であり、遺構の時期を決定する資料には成り得ない。しかし、S D 1 0 の東側



第7図 SI O 1 出土遺物実測図(S=1:3)



第8図 SAO1実測図(S=1:80)

にあるSB04と軸が合致することから、2つの建物は同時期と考えられる。

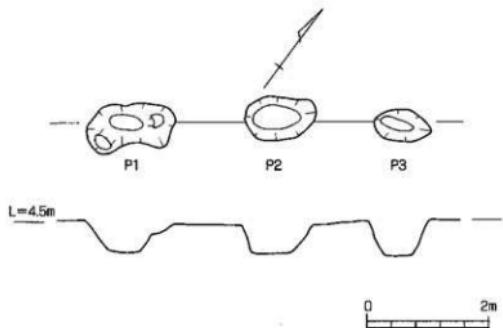
**出土遺物（第7図）** 1. 2は須恵器の壺である。体部は内湾して立ち上がり、口縁を丸く取める。1は器高2.7cmとやや低い。いずれも底部は回転糸切りで、2はハケによるナデが残る。8世紀後半に比定される。3は須恵器の壺または蓋の底部で、高台を持つ。4は貼付け高台の土師器壺である。全体に薄作りで内外面とも赤色塗彩が施される。5. 6は土師器の壺である。5は口径33.2cmを測る大型品で、器壁が厚く体部は張らずに下りる。外面に荒い刷毛目、口縁内面にヨコ刷毛目調整される。6は逆「ハ」の字状に口縁が外反し、体部はやや張る。ともに奈良・平安時代の所産と考えられる。7は土製支脚の脚部である。下部はヘラ削り、上部はナデにより調整される。8は弥生時代後期前葉の高壺口縁部で、混入遺物と考えられる。口縁には4条の沈線が施され、体部外面の調整はミガキである。不鮮明ながら一部赤色塗彩の痕が認められる。

## 2. 柱列（第8・9図）

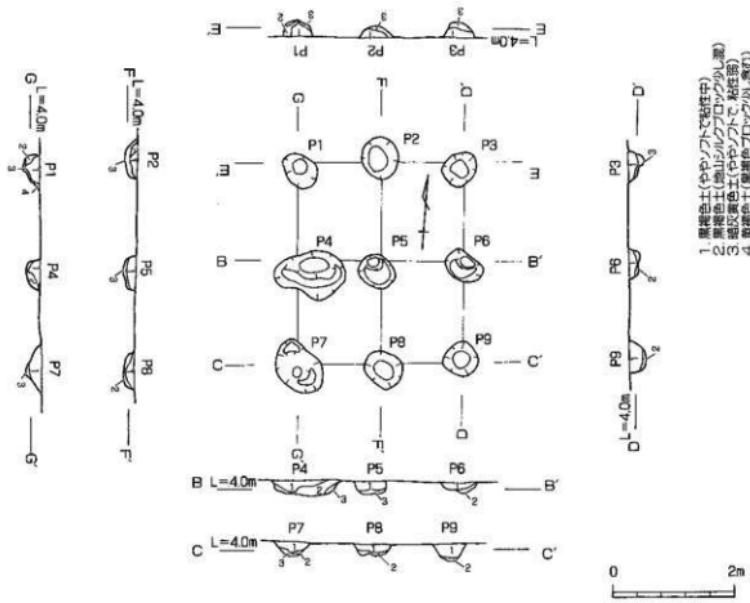
### S A O 1 (第8図)

C 4. 5 G r で検出した5穴のピット列である。柱穴は長径0.8~1.4m、短径0.6~0.8mの橿円形を呈し、深さ20~50cmを測る。約2.2m間隔で9mの長さに亘るが、対応するピットが北・南になく、単独の柱列とした。方向としては、SD08. 09に直行する形になり、N-55°-Eを指向する。

遺物は図化し得なかったが、弥生土器・土師器・須恵器の破片が



第9図 SAO2実測図(S=1:80)



第10図 SB01実測図(S=1:80)

わずかに出土している。

### S A 0 2 (第9図)

A 8 G r で検出した3穴からなる柱穴列で、SD 0 3とSD 0 8. 0 9の間に位置する。N-55°-Eを指向し、SA 0 1と軸を同じくする。軸上で8.7m SA 0 1より南に位置する。SD 0 8. 0 9に直行する形になる。P 2はSD 0 7を掘り込んでいることから、SD 0 7より新しいと思われる。ピットはSA 0 1と同様な椭円形プランを呈し、長径0.9~1.5m、短径0.5~0.7m、深さ約50cmを測る。柱間はSA 0 1と同じ2.2mで、対応するピットは見られないため、柱列とした。

並列して走るSD 0 8. 0 9を区画溝とすると、SA 0 1. 0 2はそれに併せて計画性を持って作られた堀、または、柵と考えられる。ただし、同様の軸になる掘立柱建物等は検出されなかった。

### 3. 掘立柱建物（第10~12図）

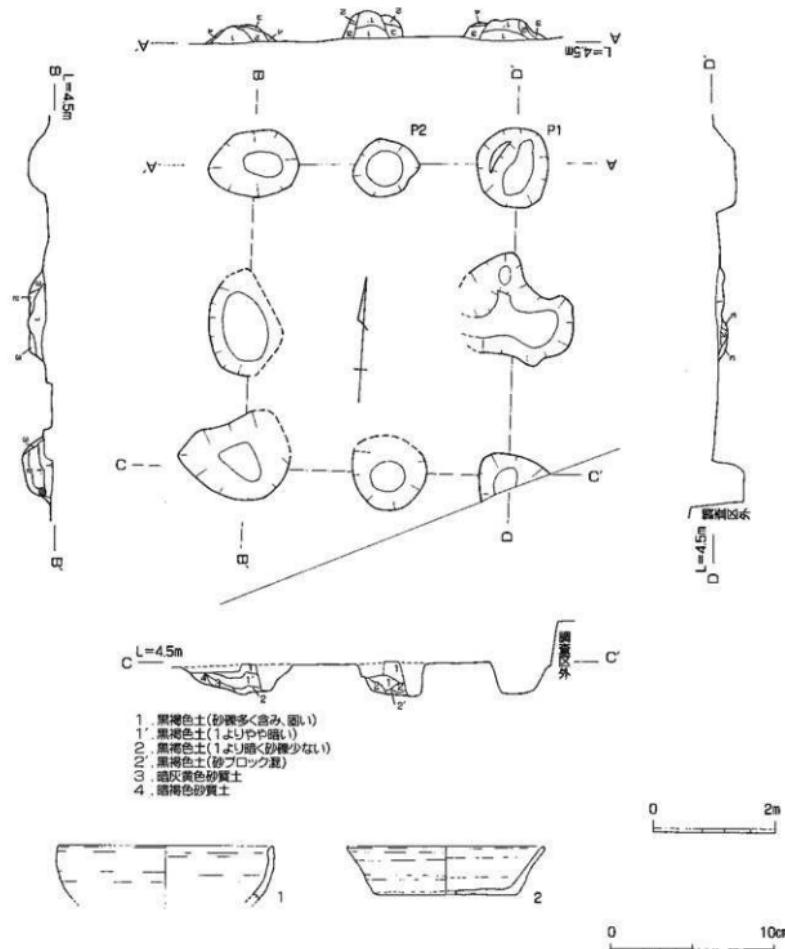
#### S B 0 1 (第10図)

C 1 グリッドで検出した、2間×2間の総柱の掘立柱建物である。径50~70cmの不整円形のピットで、土器埋りを検出した包含層を掘り込んでいる。南北方向が1.65m・東西方向が1.3mの柱間を測り、平面の規模は約8.6m<sup>2</sup>になる。南北を棟軸とした場合、N-4°-Wを指向する。

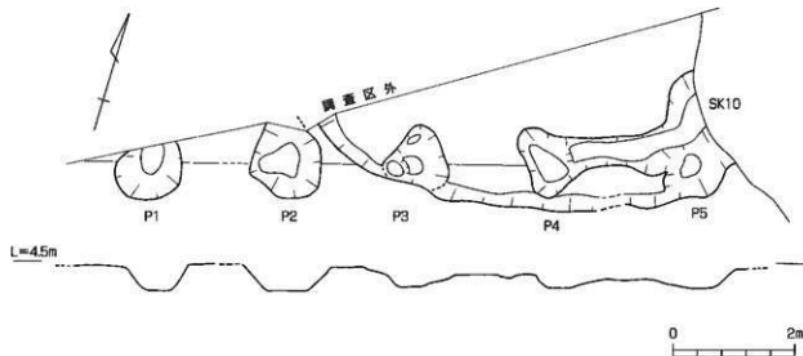
遺物がほとんどなく時期は決定しがたいが、後述する掘立柱建物SB02と同軸に建っていることからほぼ同時代の建物と考えられる。

### SB02 (第11図)

調査区の西側で検出した掘立柱建物である。径0.9~1.4mのやや大きなピットで、深さは30~50cmを測る。柱間は南北方向が2.5m、東西方向が2.2mで、2間×2間の規模（約22m<sup>2</sup>）になるが、南の



第11図 SB02実測図(遺構 S=1:80 遺物 S=1:3)



第12図 SB03実測図(S=1:80)

調査区外へ広がる可能性も考えられる。S101にピットの一部を切られている。軸はSB01と同じほぼ南北方向を向いており、N-4°-Wを指向する。

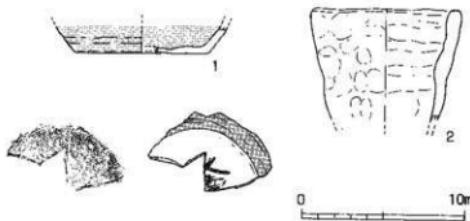
埋土からは須恵器と土師器の破片がわずかに出土するのみで時期は特定しがたい。11-1はP2から出土した須恵器壺である。やや内湾して立ち上がる体部で、8世紀後半のものと思われる。11-2はP1から出土した土師器の壺で、内外面に赤色塗彩される。

これらの遺物からSB02は9世紀初めには埋没したものと考えられる。

### SB03 (第12図)

SB02の北、C1. 2Grで検出した掘立柱建物である。径60~80cmのピットが、東西方向に柱間約2.2m間隔で5穴が列状に並ぶ。西側と北側は調査区外になり、また、東端のP5はSK10に切られているため、4間(約9m)以上の規模になる可能性もある。北の調査区外へ展開するものと思われる。検出した東西を軸とした場合、N-79°-Eを指向し、SB01. 02より約7°北側にふつて建てられている。東側半分はやや浅い落ち込み状に黒褐色土が堆積している部分がある。

遺物はP2から墨書き土師器の壺破片(13-1)が出土している。外面を赤色塗彩し、糸切り後ナデ調整された底面に墨書きが見られる。荒い筆で書かれ、破片のため判読し難いが、2文字とすれば、「人口」と読めなくもない。13-



第13図 SB03-P2出土遺物実測図(S=1:3)

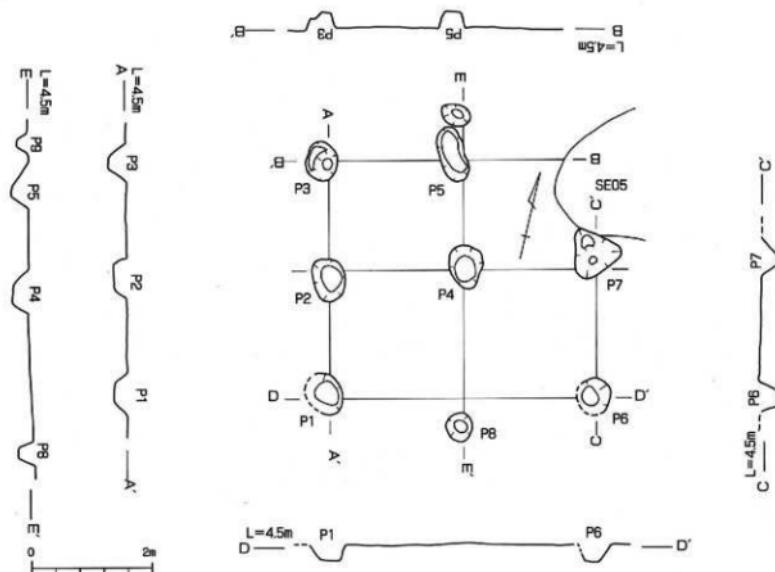
2は製塩土器の口縁部である。口縁上端部に平坦面を持ち、内外面とも強い指ナデ痕が残り、外面にはひび割れが少し見られる。

S B 0 3 からは他に、土師器の破片がわずかに見られるだけで時期は特定しがたいが、概ね9世紀代の建物跡と考えられる。

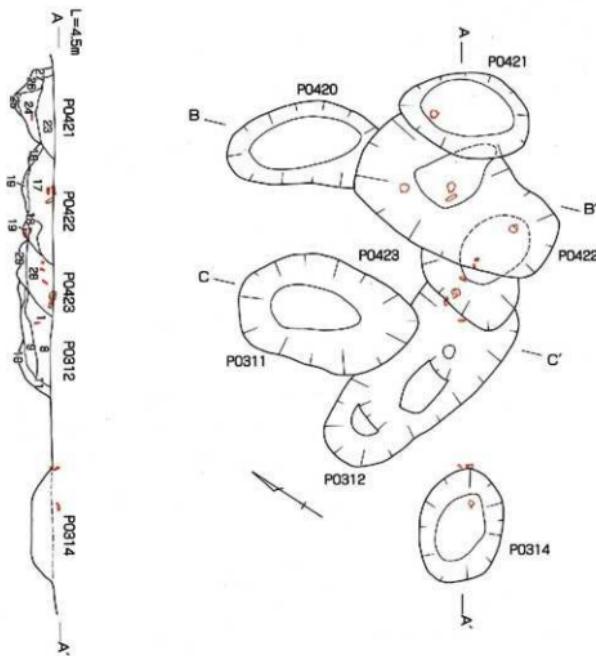
#### S B 0 4 (第14図)

B 5 ~ 6 G r にかけて検出した。径50~70cm、深さ20~35cmを測る、やや大型の不整円形の柱穴9穴からなる総柱の掘立柱建物である。柱間1.9m弱の2間×2間(約14m<sup>2</sup>)の規模になる。南の棟柱と北東隅の2穴を欠く。南北に小さな棟持ち柱を持つ。南北を軸とすると、N-15°-Wを指向し、これはS I O 1 とほぼ同軸である。

また、屈曲して走るSD 1 0 の東西方向の溝の方向にS B 0 4 の東西軸は合致している。SD 1 0 とは2m強離れて内側に位置している。SD 1 0 と同時期の建物と考えられるが、遺物がほとんど出土しておらず、推定の域を出ない。



第14図 S B 0 4 実測図(S=1:80)



1. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)

2. 黒褐色土(より柔らかい)

3. 黑褐色砂質土

4. 黑褐色土(砂礫多く含み固い)

5. 黑褐色土(砂礫多く含み固い)

6. 黑褐色土(砂礫多く含み固い)

7. 黑褐色土(地山がブロック混)

8. 黑褐色土(黄褐色地山シルト小ブロック若干含む)

9. 黑褐色土(より地山ブロック多く含む)

10. 黑褐色砂質土

11. 暗灰黃褐色土

12. 黑褐色土(露褐色地山シルトハブロック若干含む)

13. 黑褐色土(12より露褐色地山ブロック少なし)

14. 黑褐色土(13より堅くややソフト)

15. 黑褐色土(黒褐色土と地山がブロック状に混合)

16. 黑褐色土

17. 黑褐色土(固い)

18. 黑褐色土(17より柔らかい)

19. 黑褐色土(18と同じだが地山がブロック含む)

20. 黑褐色砂質土

21. 暗灰黃褐色土(ややソフト)



22. 暗灰黃褐色土  
23. 黑褐色土(砂礫多く含み固い)  
24. 黑褐色土(23より柔らかい)  
25. 黑褐色砂質土
26. 暗黑褐色砂質土(黒褐色土ブロック混)  
27. 暗灰黃褐色土(黒褐色土ブロック混)  
28. 黑褐色土(砂礫多く含み固い)  
29. 黑褐色土(26より暗く砂礫少ない)

0 2m

第15図 主要ピット実測図 P0311-P0312-P0314-P0420-P0421-P0422-P0423(S=1:60)

#### 4. 主要ピット (第15~17図)

P 0311, 0312, 0314, 0420,

0421, 0422, 0423 (第15図)

A 3, 4グリッドで検出したピット群である。当初、広範囲の黒褐色土の不整形プランとして検出した。精査する段階で、いくつかの橢円形ピットに分離する可能性が出てきたが、不鮮明なため、断面の観察により新旧関係を判断した。その結果、大小7個のピットを検出するに至った。調査時は柱穴として扱ったが、周りに対応する柱穴ではなく、土坑の性格が強いものと思われる。

また、南で検出した S D 05, 06 とは検出段階の違いから、やや時期がずれるものと考えられる。むしろ、西側で検出した S I 01、あるいは北に位置する SK 10との関係を考慮すべきかも知れない。

遺物は、須恵器・土師器の破片が出土しているが、それらは概ね8世紀後半から9世紀初めにかけてのものである。しかし、図化し得たのは P 0422 から出土した2点である。

出土遺物 (第16図) 1は丹塗りの土師器皿の底部で

ある。外面は細かなミガキが施される。見込みに螺旋状の渦巻き暗文が描かれている。胎土は在地のもので、7世紀後半から8世紀初めにかけてのものと考えられる。2は上製支脚の脚部である。底面中央がくぼむ。

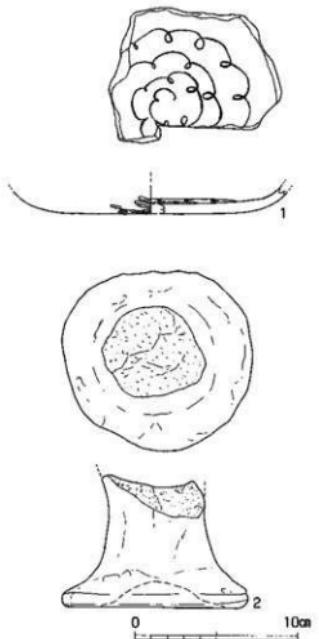
#### P 0202 (第17図)

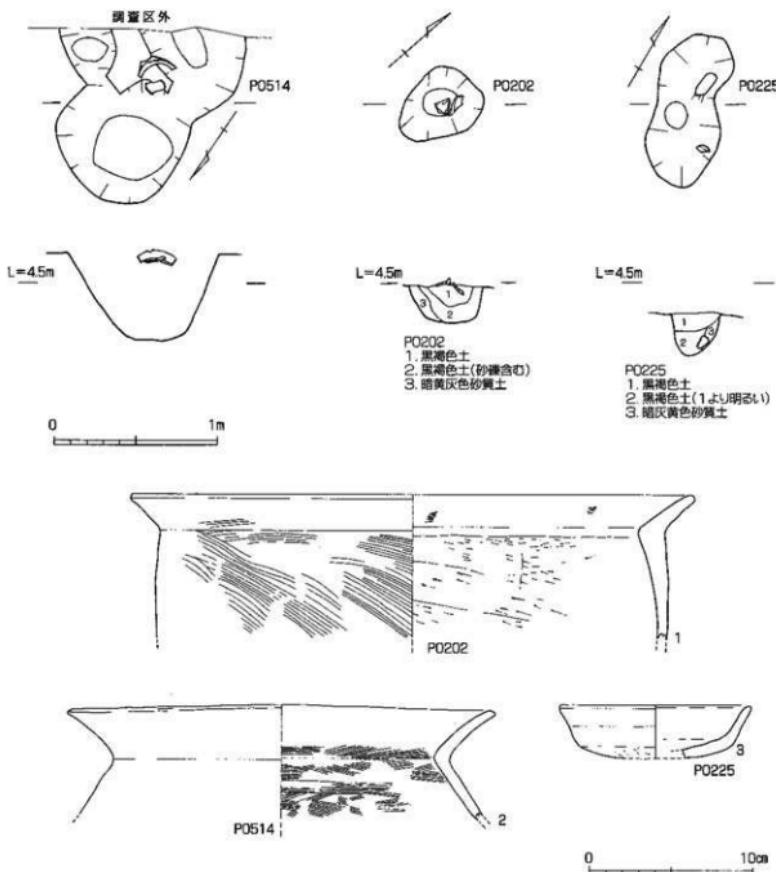
S B 02 と S B 03 の中間部分で検出した小ピットである。長径0.9m、短径0.3m、深さ27cmを測り、不整円形のプランを呈す。建物を成す柱穴の可能性があるが、対応するピットを確認出来なかった。

中心部上層から土師器の壊破片 (17-1) が出土している。35cmの口径を測る大甕で、体部は張らない。外面には荒い斜め方向の刷毛目が施され、内面は荒いヨコ削り調整である。奈良・平安時代の所産と考えられる。

#### P 0225 (第17図)

C 2グリッドの S B 03 を切る形で検出したピットで、不整橢円形のプランを呈す。深さは33cmを測り、土師器の壊破片 (17-3) が1点出土している。口径11.8cm、器高3.2cmを測り、底部を欠くがやや膨らむものと思われる。ヘラ等で削った痕が見える。全体に赤色塗彩される。





第17図 主要ピット実測図(遺構 S=1:30 遺物 1:3)

P 0 5 1 4 (第17図)

A 5グリッドの南壁に接して検出したピットである。約1m分の検出になるが、底面は3つに分かれる。南の調査区外へ広がる。

上層から甕の口縁部(17-2)が出土している。「く」の字状に口縁が開き、内面に刷毛目調整が見られる。外面の調整は風化のため不鮮明である。奈良・平安時代の所産と考えられる。対応する柱穴は確認できなかった。

## 5. 井戸 (第18~25図)

### S E 0 1 (第18図)

調査区の東側で検出した井戸で、円形プランを呈し、径2.5m、深さ約1.3mを測り、底レベルは標高3.0mに至る。基盤の荒砂層まで掘り込まれ、湧水する。

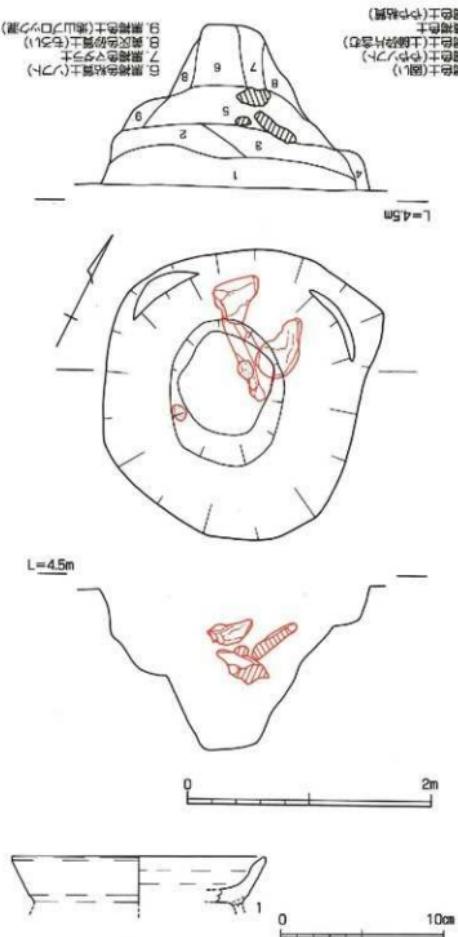
井戸側等の施設は検出しなかったが、中層（5層）内に人頭大の礫が数点出土している。井戸が廃棄された後埋められたものか、石組みの石が壊された後に残ったものと考えることもできる。断面は漏斗状を呈し、5層以下（下層）には粘質土が堆積する。5層下面で一度掘り返された可能性がある。S E 0 1 が位置する調査区東側では、同時期の井戸と思われる遺構を數か所検出している。

埋土からは須恵器片、土師器の破片とともに青磁の破片が出土しており、中世末の井戸と考えられる。図化できたのは高台の欠損した土師器の皿1点（18-1）のみである。

### S E 0 2 (第19図)

S E 0 1 の南で、S D 0 2 に遺構の東部分を切られる形で検出した遺構である。さらに S E 0 2 は古い遺構である S D 0 4 を掘りこんでいる。長径2.6m、短径2.0mの梢円形

プランを呈し、深さ1m弱を測る。



第18図 S E 0 1 実測図(遺構 S=1:40 遺物 S=1:3)

井戸枠等は検出されなかったが、径6cm・長さ90cmの竹筒が1本砂疊層に刺さった状態で出土している。底のレベルは3.30mに至り、荒砂層の底から激しく湧水する。

埋め土に土師質土器片を多く含むことから、中世から近世初頭にかけての井戸と考えられる。

**出土遺物 (第20図)** 1は鈍い稜を持つ複合口縁の甕で、口縁端部に面を作る。肩部のヨコ刷毛目の間に刺突文が施される。小谷2期に相当する<sup>29</sup>。2. 3は布留式系の土師器甕で、外反する口縁端部に

面を作る<sup>7</sup>。

これらの甕は古墳時代前期前  
甕の範に入るるものであり、S  
E 02 が掘り込まれている SD  
04 からの流れ込みと考えられ  
る。

#### SE 03 (第21図) 第19図

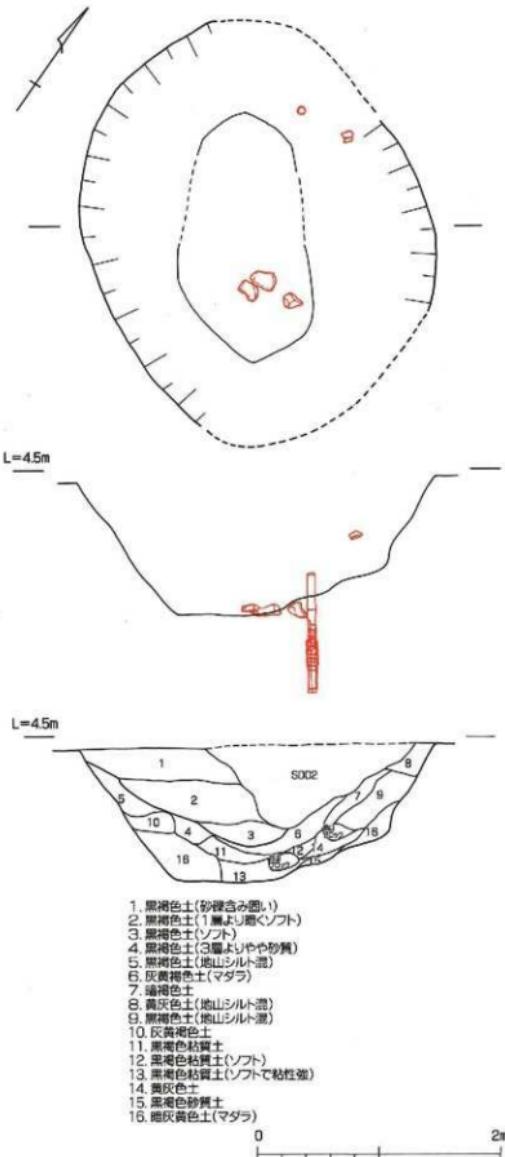
D 9 グリッドの北壁近くで検  
出した遺構である。北側は調査  
区外になり、約半分の調査にと  
どましたが、径3.0m程の円形の  
プランになると考えられる。西  
側の上面は擾乱により削平され  
ている。深さ1.0mの堀方で、断  
面は逆台形をなす。底レベルは  
標高3.76mに至り、砂礫層から  
湧水する。

拳大から人頭大の礫が多く出  
土する下層の壁側に礫が積み重  
なっている。石組みの井戸と考  
えられるが、はっきりとした組  
み方ではなく、一部崩れたよう  
になっており、廃棄後上層の礫  
が埋められたと考えられる。

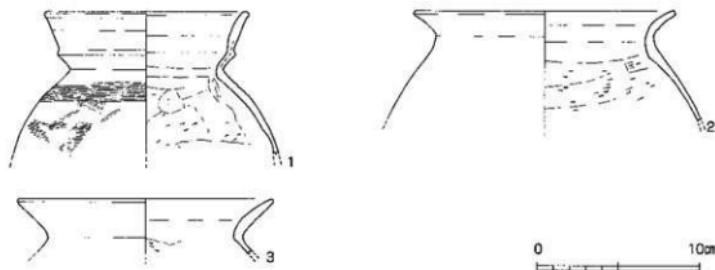
遺物は図化できるもののがな  
かつたが、須恵器と土師器、赤  
色塗彩された土師器の破片が出  
土している。奈良・平安時代の  
井戸と考えられる。

#### SE 04 (第22図)

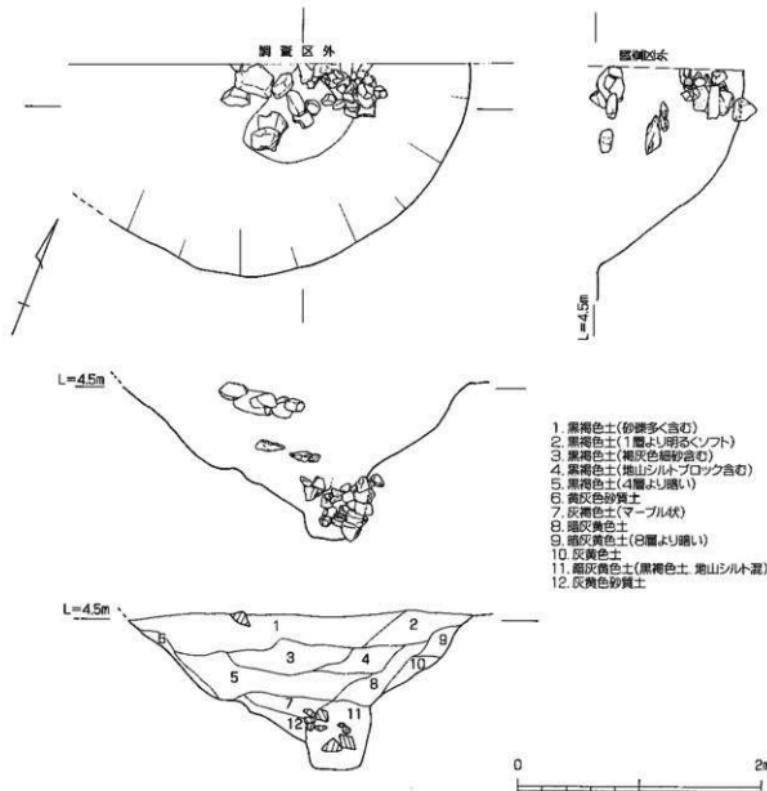
調査区のほぼ中央で検出した  
遺構で、半円形のプランをなす。  
北側の上半分を擾乱で失ってい  
るため、推定で径3.4mの規模に



第19図 SE 02 実測図(S=1:40)



第20図 SE02出土遺物実測図(S=1:3)



第21図 SE03実測図(S=1:40)

なるものと考えられる。深さは約1mで、底面のレベルは標高3.40mに至り、砂礫層の底から激しく湧水する。

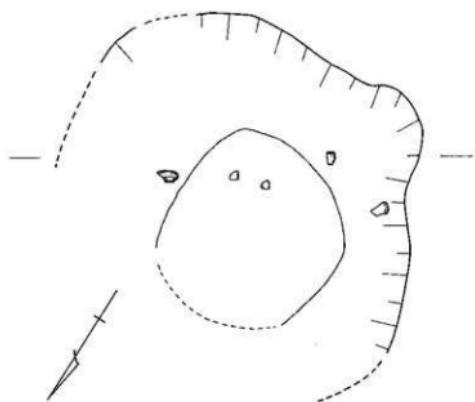
井戸枠等は検出されなかったが、断面の観察から築造時の裏込土と思われる混潤した土層が見られ、基盤の砂層がもろく崩れやすいことから、何らかの施設があったものと考えられる。

覆土からは高台付須恵壺・上師器壺の他、竈の底部分などが出土している。奈良時代の井戸と考えられる。

**出土遺物（第23図）** 1は輪状つまみの付く須恵器蓋である。天井部は回転削り、口縁にかけては回転ナデ調整を施す。8世紀前半に相当する。2は土師器の甕である。口縁は逆「ハ」の字状に外反し、口径22.6cmを測る。3は移動式竈の底部分である。外面には成形時の指ナデの痕が強く残る。8cmの底長で、胴部との接合部から剥離している。

#### S E 05 (第24図)

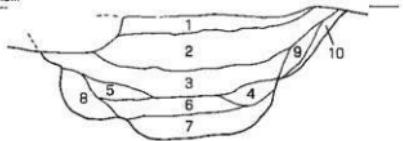
S E 04 の西で検出した遺構で、長径3.0m・短径2.4mの梢円形プランを呈す。深さは50cmを測る。中央部が径50cm・深さ65cmのピット状に落ち込んでおり、ピットの形に合わせて、水溜め施設と考えられる曲げ物が埋設されていた。腐食が著しく、



L=4.5m



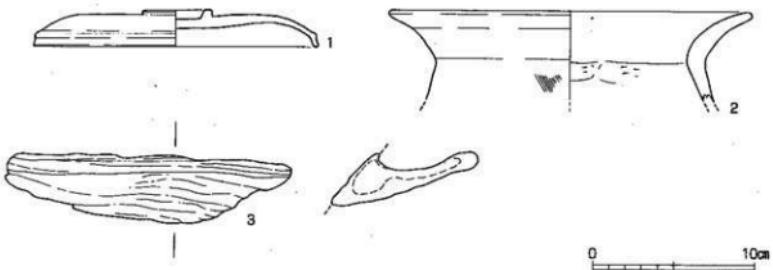
L=4.5m



1. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
2. 黒褐色土(1層よりややソフト)
3. 黑褐色土(小炭化物若干含む)
4. 黑褐色土(3層と同じ、ただややソフト)
5. 細粒黄色砂質土(黒褐色土ブロック混)
6. 細粒黄色砂質土(5層より砂和多い)
7. 黄灰色砂質土(ザラザラで柔らかい)
8. 黄灰色砂質土
9. 黄灰色砂質土(ややソフト)
10. 黄灰色砂質土(黄灰色地山砂と黒褐色の混合)

0 2m

第22図 S E 04 実測図(S=1:40)



第23図 SE04出土遺物実測図(S=1:3)

埋土とともに崩れてしまった。この曲げ物の中には角礫が埋没しており、廃棄時に埋まったものと思われる。遺構の最深部の底レベルは標高3.36mに至る。荒砂層まで掘られ、湧水する。

遺物は赤色塗彩の土師器壺や須恵器の破片、また、製塩土器の破片などが少量出土している。これらから概ね奈良時代の遺構と考えられるが、断定はできない。

#### S E 0 6 (第25図)

A 10グリッドで検出した井戸で、SD 03の東肩を切って掘られている。径2.0~2.4mの楕円形プランを呈し、U字型の堀方である。深さ1.0mを測るが、上面を擾乱により削平されている為、実際にはもっと深かったと思われる。砂礫層の底から湧水が認められる。

遺物は須恵器と土師器の破片がわずかに出土しているが、図化できたのは2点のみである。いずれも奈良時代の所産である。1は口径16.6cmを測る須恵器の蓋である。2は口径15.2cmを測る土師器の皿である。体部はやや膨らんで立ち上がり、口縁は緩く外反する。内外面に赤色塗彩される。

## 6. 不明遺構

#### S X 0 1 (第26図)

A 11グリッドで検出した、径1.8m・深さ15cmを測る遺構である。半円形の土坑になるが、北側半分を擾乱により失っており、また、上層も擾乱により削られているため、実際の規模と形状は不明である。南に「A・B 11 G r 土器溜り」が接する。底面近くの黒褐色土（1層）から、土師器の小皿が4枚と古銭が出土している。土坑墓の可能性が考えられる。

出土遺物（第27図）1は口径10.9cmを測り、出土した4枚の皿の中では一番大きいものである。体部は直線的に開き、輪轂成形によるナデ痕が残る。2~4は口径7.5~7.8cm、底径4.2~4.4cm、器高1.9~2.1cmを測る小皿である。輪轂成形によるナデ痕がよく残り、4の底部はナデによる段を成す。いずれも精製された胎土で、底部は回転糸切り離しである。これらの土師器皿は16世紀前後のものと考えられる。5は古銭である。12枚くつつけたままの形で出土している。紐でつないで埋めたものか。かなり腐食が進んでおり、切り離す段階でもろく破損する危険があるため、2枚ずつの6分割するに

止まった。文字等は判別し得なかった。

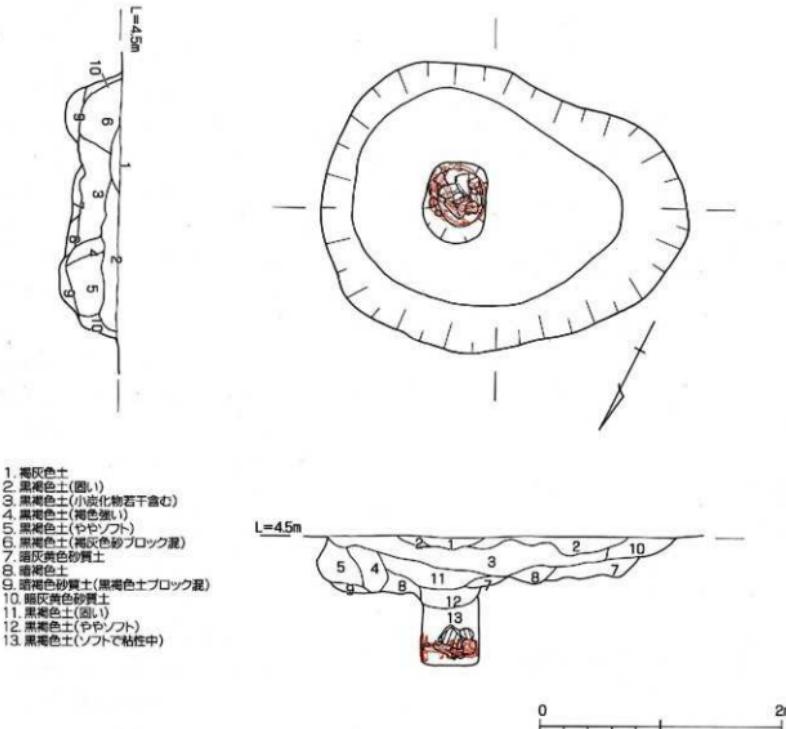
出土した土師器皿から、時期は中世末と考えられる。

## 7. 土坑（第28～39図）

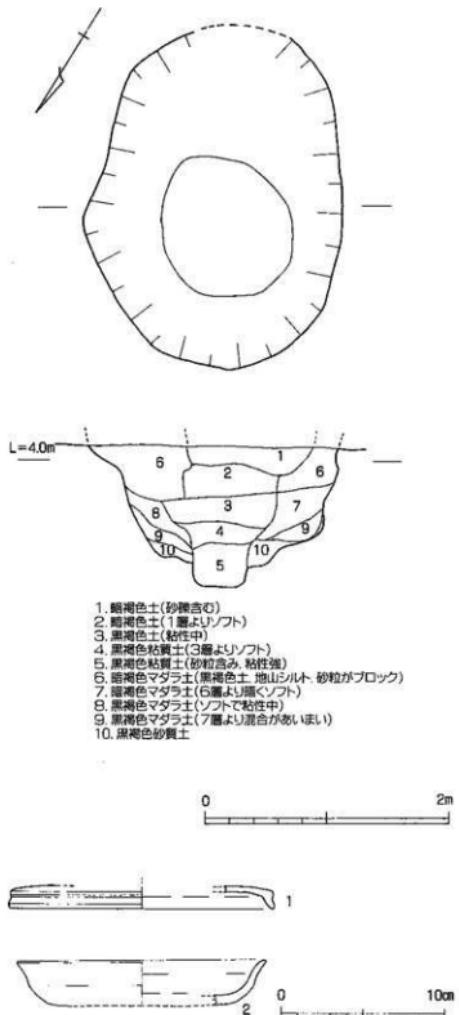
### SKO1（第28図）

SE01・02の間で検出した遺構で、径2.0m・深さ70cmを測る。SKO1はSD02に遺構の東側ほとんどが切られるため、全体の規模・形態は不明であるが、円形を呈するものと考えられる。断面は逆台形で、深さ80cmを測る。底レベルは標高3.68mで荒砂層まで掘り込まれるが、底面から湧水は認められない。

埋土からは土師器の破片がわずかに見られるのみで、時期は決定できない。素堀の井戸とも考えられる。



第24図 SE05実測図(S=1:40)



第25図 SE06実測図(遺構S=1:40 遺物S=1:3)

### S K O 2 (第29図)

E 12グリッドのSE02の西で検出した円形の土坑で、径約2.0m、深さ80cmを測る。断面は逆台形をなし、底レベルは標高3.62mまで掘られ、現底面から湧水する。井戸枠等は検出しなかった。

下層には粘質土が堆積し、埋土からは須恵器と土師器の破片がわずかに見られるのみで、時期は決定できない。古墳時代前期前葉の溝と考えられるSD05の一部を切っている。素堀の井戸か?

### S K O 3 (第30図)

B 5グリッドで検出した土坑である。長径5m弱、短径1.8mの梢円形プランを呈し、深さは20cm前後と浅い。中央部分を後世の遺構SK07に切られているため、本来の形状を掌握できない。2つの土坑が重複している可能性も考えられる。

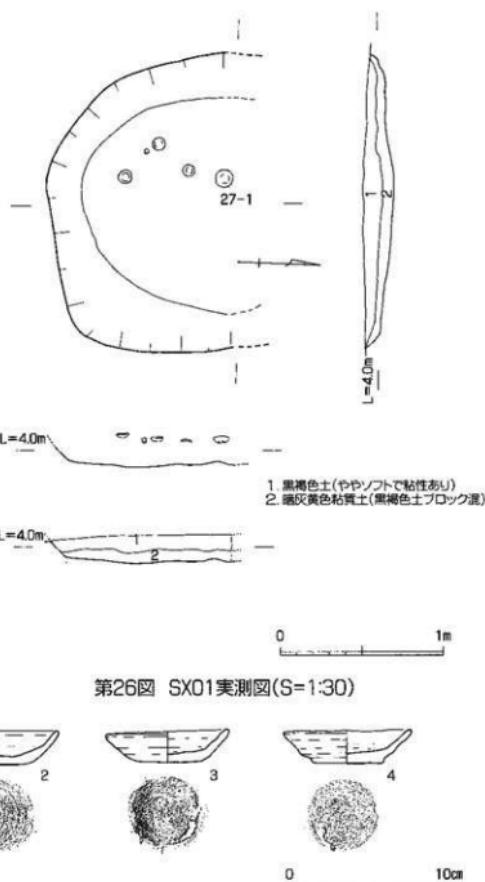
北側の上層から、弥生時代後期前葉の小型鉢(31-1)が完形で出土している。土坑墓の可能性が考えられる。北にあるSK08と規模・形がよく似ているが、SK08からは遺物がほとんど出土しておらず、関係づけることは出来ない。

弥生時代後期前葉の遺構と考えられたが、覆土から、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての土器片が多く出土しており、古墳時代前期前葉にかけて埋まった

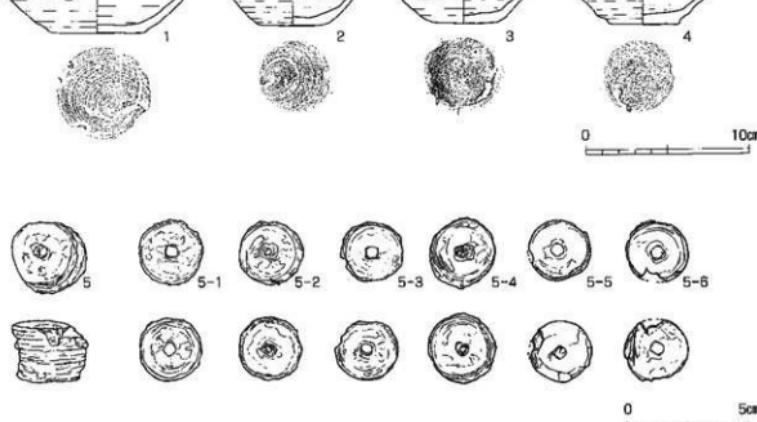
遺構と考えられる。すぐ北にあるS D 1 3と同時期と考えられる。

**出土遺物（第31図）** 1は弥生時代後期前葉（松本V-1様式<sup>3)</sup>の小型鉢である。口径9.6cm、器高9.5cmを測り、全体に黒色を呈している。口縁には2条の凹線が施され、頸部には径2.5mmの穴が2ヶ所対になって穿たれる。やや上に最大胴部径が来ており、2条の凹線に区画された幅6mmの中に半月状の刺突文が帯状に巡る。外面の調整はヨコ方向のヘラミガキ、内面は頸部以下胴上半部までヨコ方向の削り、下半部は削りの後ヨコミガキによって削りが消されている。2は弥生時代後期前葉の甕底部、3は古墳時代前期前葉の甕である。立ち気味の口縁端部に平坦面を作る。4は単純口縁の甕である。

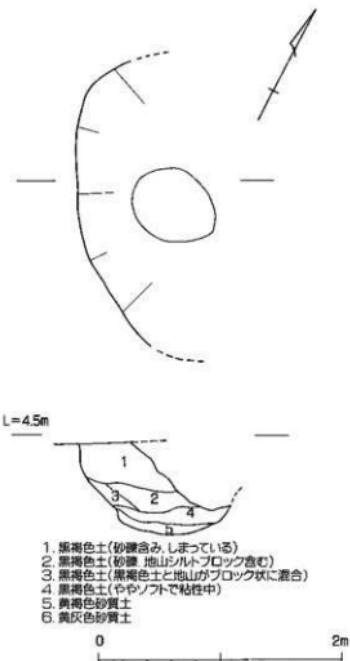
S K 0 3の遺物として採り上げたが、出土位置からSK 0 7に入る可



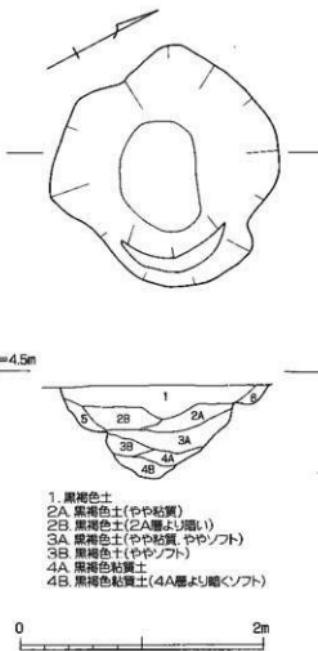
第26図 SX01実測図(S=1:30)



第27図 SX01出土遺物実測図(S=1:3 古銭は1:2)



第28図 SK01実測図(S=1:40)



第29図 SK02実測図(S=1:40)

能性がある。

#### S K 0 4 (第32図)

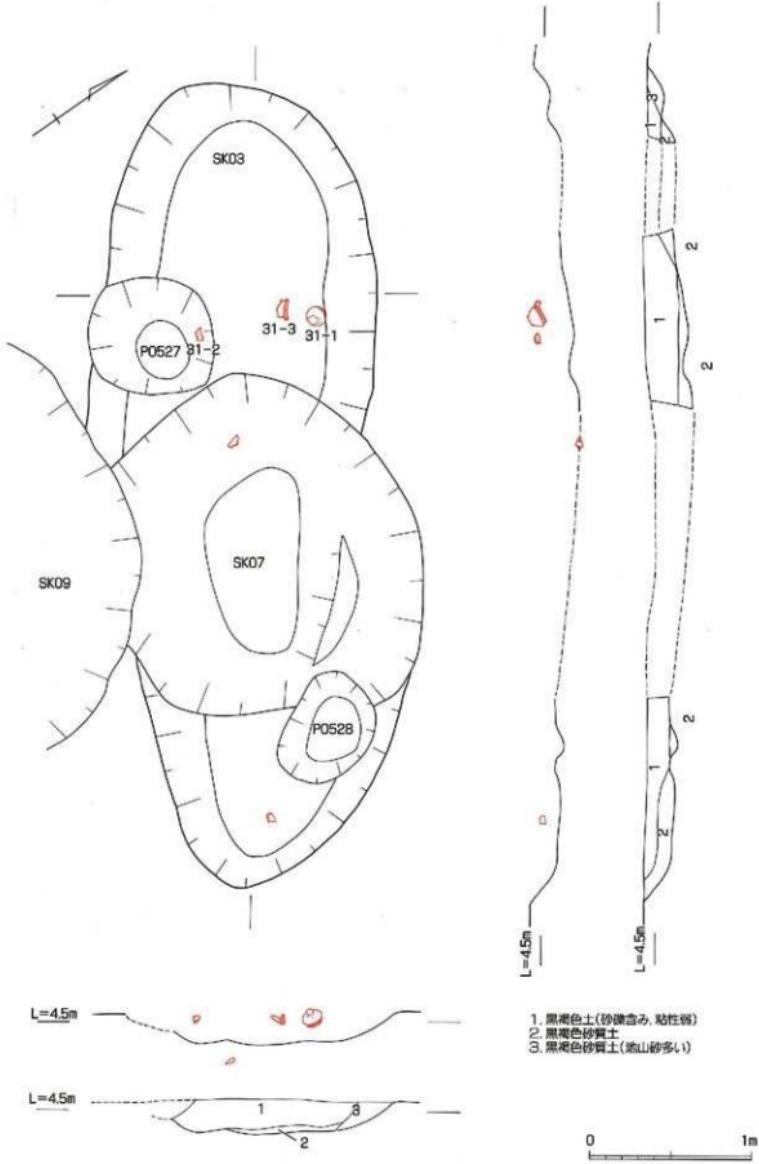
調査区の南西隅で検出したため、一部のみの調査に留まった。全体の遺構の形状は溝になるのか土坑になるのかはっきりせず、部分の検出であるため土坑とした。地山は黄灰色の砂層で崩れやすい。巾は検出時で最大2.0mを測るが、深さは25cmと浅く、断面は皿状を呈す。西の調査区外で深くなる可能性も考えられる。

遺物は須恵器と土師器の小片がわずかに見られる程度で、時期は決定できない。

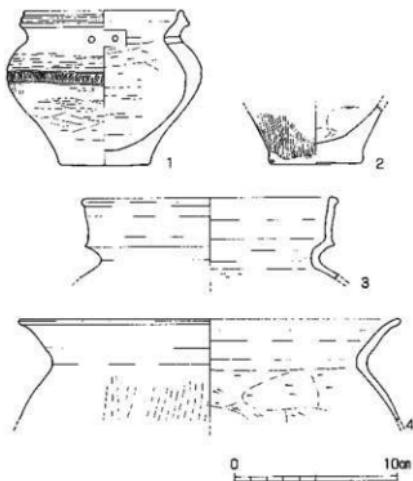
#### S K 0 5・0 6 (第33図)

南北方向に並列して検出した。布堀状の土坑である南側は調査区外に展開する。

S K 0 5・0 6とも検出長3m強、巾45cmでステップ状の平坦部からピット状に落ち込む。ピット部分は径1.3m、深さ74cmを測る。2つの遺構のピットは対応する位置関係にあり、それらのピット間は3.0mを測る。一見、布堀状建物跡のように見え、ピット中心を通るラインを長軸とすると、南北方向でN-24°-Wを指向する。ピット状の部分が柱穴とすれば、ステップ部分は壁体の跡になる可能性



第30図 SK03実測図(S=1:30)



第31図 SK03出土遺物実測図(S=1:3)

ているための混入遺物と考えられる。

**出土遺物（第35図）** 1～4は弥生時代後期前葉の甕である。3～4条の凹線が施される口縁は、上方に拡張し、4は下方にも拡がる。いずれもスヌの付着が見られる。5、6は土師器皿の底部である。底面にはナデの指圧痕が見られ、内外面に赤色塗彩される。奈良時代の所産と考えられる。7は銀杏の葉型をした石器で、片面を磨いて刃を付けていることから、磨製片刃石斧と考えられる。8は砥石の割れたもので、4面を使用している。

#### S K O 8 (第36図)

S K O 3 の北で検出した遺構で、長径約4.0m・短径1.3mを測る。深さは20cmで不整楕円形のプランを呈すが、北側と南側がやや膨らんで落ち込む。S D 1 3 の東部分を切り込んでいる。形態的にはS K O 3 に似ている土坑であるが、出土遺物はほとんどなく時期も性格も判別しがたい。

#### S K O 9 (第37図)

S K O 7 に隣接して検出した土坑で、S K O 7 の一部を切っている。円形のプランを呈し、壠方は鉢状になる。径2.5m・深さ60cmを測る。下層の12層に黒褐色土の11層がS E 0 5 と同様径40cm・深さ12cmのピット状に落ち込んでいる。深さはS E 0 5ほど深くなく、曲げ物などの施設もないため、井戸とは断定できないが、その可能性は捨てきれない。

遺物は土師器の破片がわずかに見られる。弥生土器片も若干見られるが、おそらくS K O 3 からの流れ込みと思われる。

**出土遺物（第38図）** 1は須恵器の蓋で、高広III-B期に相当する<sup>5</sup>。2は須恵器壺の底部で、切り離

が考えられる。

遺物は弥生土器・須恵器・赤色塗彩された土師器などが若干出土しているが、いずれも小破片で固化できるものはなかった。

#### S K O 7 (第34図)

弥生時代前期前葉の遺構である、S K O 3 の中央部分を切って掘り込まれている。径2.0mの円形プランを呈す。深さは50cm程度で、底面からの湧水などではなく、廃棄土坑と考えられる。西側の肩部をS K O 9 に切られる。

埋土から高台付須恵壺や土師器壺の破片が出土しており、奈良時代後半の遺構と考えられる。弥生時代後期前葉の土器片数点と石器が出土しているが、S K O 3 を切っ

しは回転糸切りである。高広IV-B期に相当する。  
3の鉄製品は、鍵または平釘の折れ曲がったもの  
と思われる。

これらの遺物からSK09は、8世紀末から9  
世紀始めにかけて埋没したものと考えられる。

#### SK10 (第39図)

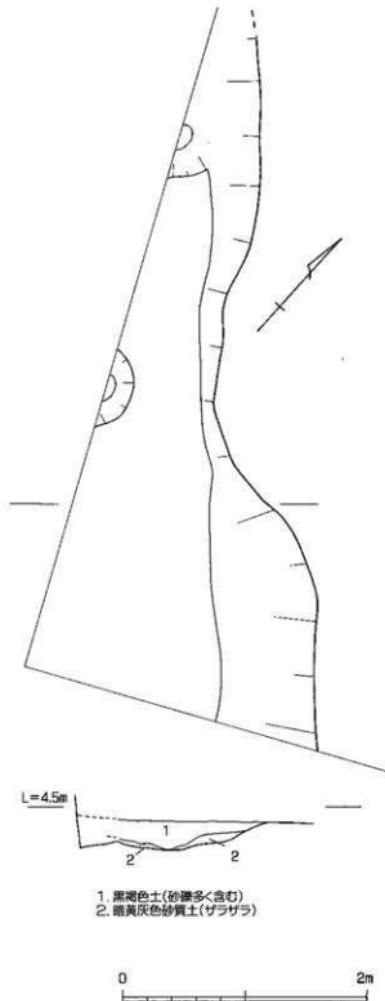
西側の北壁近くで検出した遺構である。6.0m×4.6mの規模になる土坑で、北の調査区外へ広がるものと思われる。全体のプランは隅丸方形であるが、1層の暗灰黄色土を掘り取り、暗褐色土を掘り下げる段階で、長さ2.5~2.8m、幅1~1.5m、深さ70cm前後の5つの梢円形の落ち込みに分かれる。何度か掘り直された跡が土層の観察から窺え、掘り直しによって広がったと考えられる。「落ち込み4」から「5~3」と順次掘り直され、「落ち込み1」を最後に廃棄され、埋められたものと考えられる。西側の「落ち込み2」は土層の観察から北側と南側で2つに分けられる。東側にある「落ち込み」より以前に掘られたものと思われる。

遺物の多くは、遺構の東側で出土しており、特に「落ち込み1・3」の上・中層からの出土量が多い。「落ち込み1」からは高台付須恵壺や皿、赤色塗彩された土師壺などがほぼ完形に近い状態で出土している。接合出来なかった破片もビニール袋 [26cm×38cm] 2袋分になる。

遺構の性格は不明であるが、おおよそ平安時代の廃棄土坑と考えられる。

#### SK10出土遺物 (第40・41図)

第40図1~7は須恵器で、おもに遺構の東側上層から出土している。1・2は蓋で、1は輪状、2は宝珠状の摘みが付くものと思われる。3は高台付の壺で、回転糸切りの底面中央に「x」印の線刻が施される。高広IV-B期に相当する。4~6は高台を持つ皿である。底面はいずれもナデ調整で、4の口縁は薄く外反し、見込み内はやや磨滅しており使用されていたことが窺える。7は短く外反する口縁の壺である。8は壺または壺の底部で、平行タキの後、弱いカキメを施す。



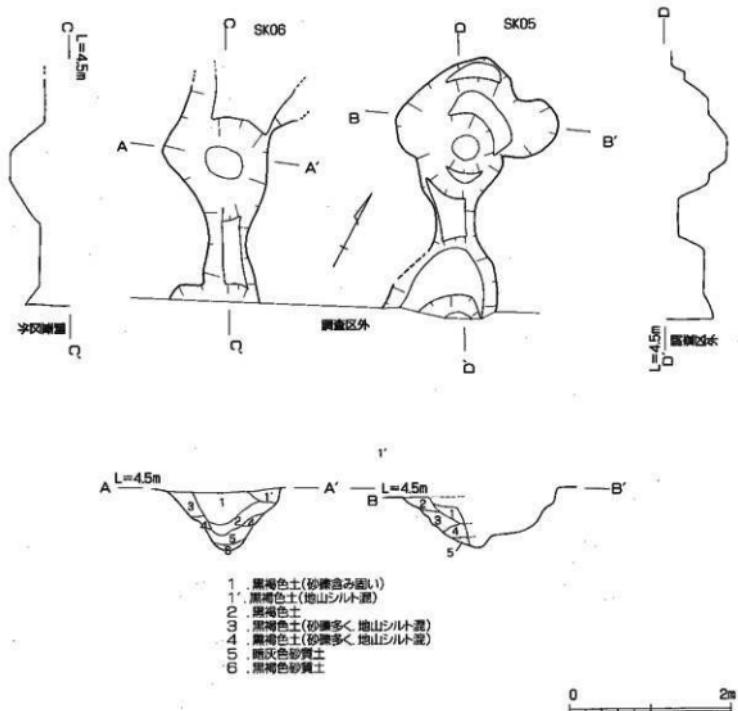
第32図 SK04実測図(S=1:40)

第40図9～20は赤色塗彩された土師器の壺で、底面を除いて全体に塗彩されている。20は高台を持つ。精製された胎土で焼成も良好である。口径11.6～12.8cm、底径7.0～9.0cm、器高3.3～3.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。輪轔成形のナデ痕がよく残る。底部はほぼ平坦であるが、9、10はややふくらむ。13、17の底部は回転糸切り後ナデ調整が施される。他の壺も切り離し後のナデ痕がよく残り、14、16、19のように凹凸をなすものもある。10、12、16、の底部には板状工具によるナデ調整が見られる。11の口径は13.9cmとやや広く開き、12は10.7cmとやや小型で口縁端部が弱く外反する。

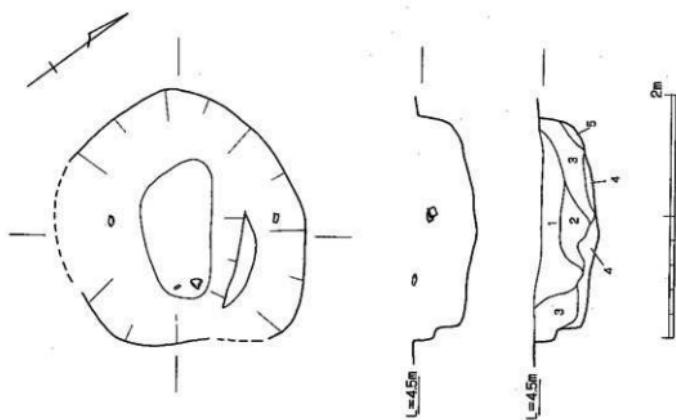
第40図21～25は赤色塗彩された土師器の皿で、口径13.1～13.6cm、底径9.6～10.3cm、器高2.0～2.4cmを測る。25は高台が付き、口径17.8cmを測る。

これらの土師器は概ね9世紀前半代のものと考えられる。

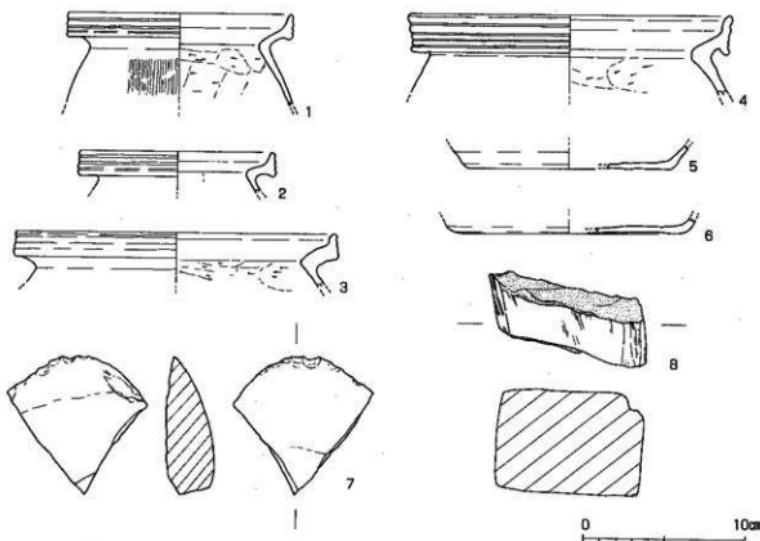
第41図1、2は土師器の甕である。「く」の字状に口縁が開くもので、1は口径33cmを測る大型品である。



第33図 SK05-06実測図(S=1:60)



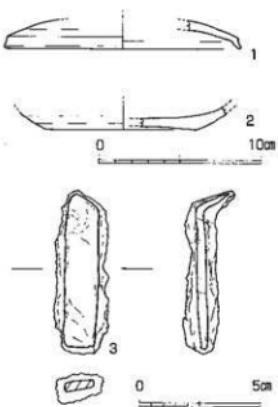
第34図 SK07実測図(S=1:40)



第35図 SK07出土遺物実測図(S=1:3)



第36図 SK08実測図(S=1:40)



第38図 SK09出土遺物実測図  
(S=1:3 鉄は1:2)

また、製塩土器が出土している。すべて破片であるが、かなりの数量（ビニール袋 [26×38cm] × 2袋分）になる。ほとんどの個体が2次焼成を受けている焼塩土器である。胴部過半を欠くものばかりであるが、底部は砲弾状を呈するものと考えられる。3は全体的に薄作りで口縁端部を尖らせるもので、内外面ともにナデつけ痕が顕著に見られる。内面は布目をナデ消した可能性もある。4～9は器壁が厚いもので、4、5、9は口縁端部を丸くおさめる。6、7、8は上面に平坦面を作るものである。いずれも成形時のなでつけ痕が残る。7と8は小豆色の粒子を含む胎土で、形状も類似していることから同一個体の可能性がある。10は径2.1cmを測る土鍤である。

これらの遺物のうち、40-16、19、21、22は「落ち込み1」から出土している。40-9と41-10は「落ち込み2」から、40-11、14が「落ち込み3」から、40-2、17が「落ち込み4」から出土している。

#### 8. 土器溜り（第42～47図）

##### C11Gr 土器溜り（第42図）

C11グリッドで第5層である包含層を掘り下げていく段階で検出した土器破片の集まりである。11グリッドは、黒褐色土が堆積している場所で、約3.0m×2.0mの範囲で土器が集中して出土した。

南側のB11グリッドは攪乱によりそのほとんどが削り取られた状況である。攪乱の南側の包含層からは、「C11

Gr 土器溜まり」と同様の土器が多く出土していることから、本来地山のレベルが低くなっている部分で土器が集まって堆積したものと考えられる。下層部分は10cmほど落ち込んでいる。

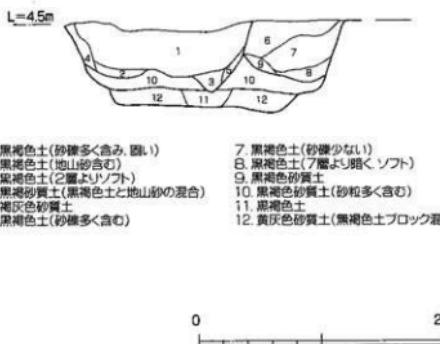
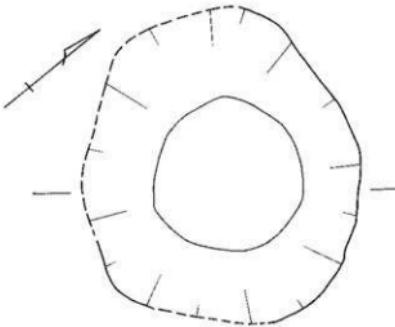
遺物は甕を中心に壺・高壺・低脚壺・器台などの古式土師器が出土している。ほとんどは小谷2期（草田7）のものである。小谷3期に入る遺物も若干見られる。また、畿内布留式甕系の単純口縁甕も何点か見られる。SD 03. 04の最終埋没時期と同時期と考えられる。

#### C 11 Gr 土器溜り出土遺物（第43～46図）

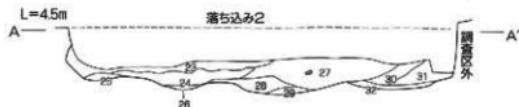
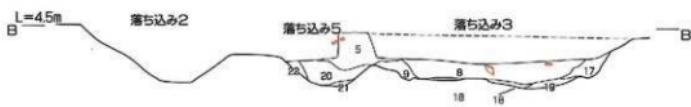
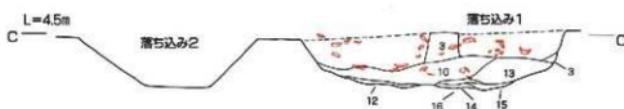
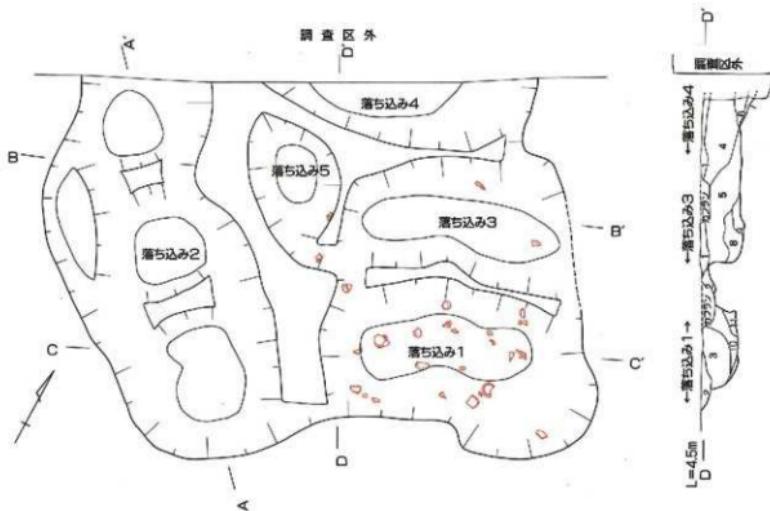
第43図 1～5は複合口縁細頸甕である。口径23～25cmを測る。口縁端部はいずれも外方に広がって平坦面を持つが、3は玉縁状に肥厚する。5を除いて頸部に羽状文が刺突された後、中央に沈線が巡る。3、4には羽状文の下段にも沈線が施される。さらに3の肩部には、ハケ原体による刺突文が施される。この刺突文は上段がやや長いが、4のように下段が長いものもある。外面の調整は、ヨコ方向の刷毛目で、1の胴部には荒く短い斜め方向の刷毛目が点在し、下半の調整は不鮮明であるが、所々スカスカが付着している。頸部内面に指ナデ痕が認められ、頸部以下ヨコ方向の削りが施される。

これらの甕は松山編年の小谷2期に相当するものと考えられる<sup>19</sup>

第44・45図 は複合口縁の甕である。器壁は一様に厚作りで、口縁幅はやや短くなる。45-1～4は口径17～18cmを測る甕で、45-5は口径23.2cmのやや大型品である。端部には平坦面を持つが、44-7～45-5は外向きに面を作り、外方にやや肥厚する。複合口縁の稜は鋭く突出するもの（44-3～7、45-2～4）もあるが、いずれも形骸化している。外面は胴上半部にヨコ方向の刷毛目調整であるが、弱いタテ刷毛目の残るもの（44-3、8、9、45-3、4）がある。内面はやや下がった位置からの削り調整であるが、45-4には指圧痕が見られる。44-3、4、5、10の肩部にはハケ原体



第37図 SK09実測図(S=1:40)



1. 暗灰黄色土(ややソフト、粘性弱)
2. 鎌褐色土(固)
3. 黒褐色土(2より黒褐色土多く含む)
4. 褐灰色土(ソフト、粘性中)
5. 棕灰色土(無褐色土含む)
6. 黑褐色土(粘性弱)
7. 棕灰色粘質土(ソフト、粘性中)
8. 褐灰色土(ソフト、粘性中)
9. 黑褐色土(粘性強、砂ブロック混)

SK10上層

10. 暗灰色土(ややソフト、粘性中)
11. 暗褐色土(9層に似る)
12. 暗灰色粘質土(ソフト、粘性強)
13. 暗灰色土(ソフト、粘性中)
14. 欠色砂
15. 暗灰色粘質土(ソフト、粘性強)
16. 暗色砂質土
17. 黑褐色土
18. 暗灰色土(ややソフト、粘性中)
19. 暗灰色土(ややソフト、粘性中)
20. 暗灰色土
21. 暗灰色粘質土

落ち込み1b

22. 暗灰色砂質土
23. 暗灰色土(ややソフト、粘性弱)
24. 暗灰色土(2よりソフト、粘性中)
25. 暗灰色砂質土
26. 暗色砂質土(粘土に近い)
27. 暗灰色土(粘性弱)
28. 暗灰色砂質土
29. 灰色砂質土
30. 黑褐色土(底、粘性強)
31. 暗灰色土(ソフト、粘性中)
32. 灰色砂質土(粘性強)

落ち込み2a

落ち込み2b

落ち込み2c



第39図 SK10実測図(S=1:60)

による刺突列点文が施され、3には列点文の下方に緩やかな波状文が巡る。45-7は口縁に沈線状の凹凸が見られるが、これはナデの痕である。肩部に米粒形刺突列点文が施されており、吉備系布留式壺の影響が窺える。小谷3期に相当すると考えられるが、全体に作りが甘く、外来者の手になる可能性も考えられる<sup>6</sup>。45-8は平底を呈する鉢の底部である。内面に指頭痕が見られ、底面は刷毛目調整である。

第46図 1~3は布留式壺系の単純口縁壺である。やや内湾気味であるが、「く」の字状に屈曲する。1の端部は上方に引き上げ、2、3は面を持つ。布留1期<sup>7</sup>に相当しよう。46-4は複合口縁直口壺で、口縁外面にタテミガキが施される。46-5~7は高坏で、刺突痕<sup>8</sup>aを持つ接合である。坏部はヘラミガキ調整を施す。46-8は高坏脚部で、裾部に円形透かしが穿たれる。46-9は口径19.4cmを測る低脚坏である。坏部は直線的に低く開く。46-10、11は鼓形器台である。10は器高13.1cmを測るが、筒部が接合せず、図面上で合成したものである。他の器台と異なり、赤い橙色を呈し、作りがやや粗雑な印象を受ける。外来者の手になるものか。11は受部径19.2cm、器高9.7cmを測る。筒部は狭く、草田7期<sup>9</sup>に相当しよう。46-12は砥石である。4面を使用し、鋭い擦痕が認められる。

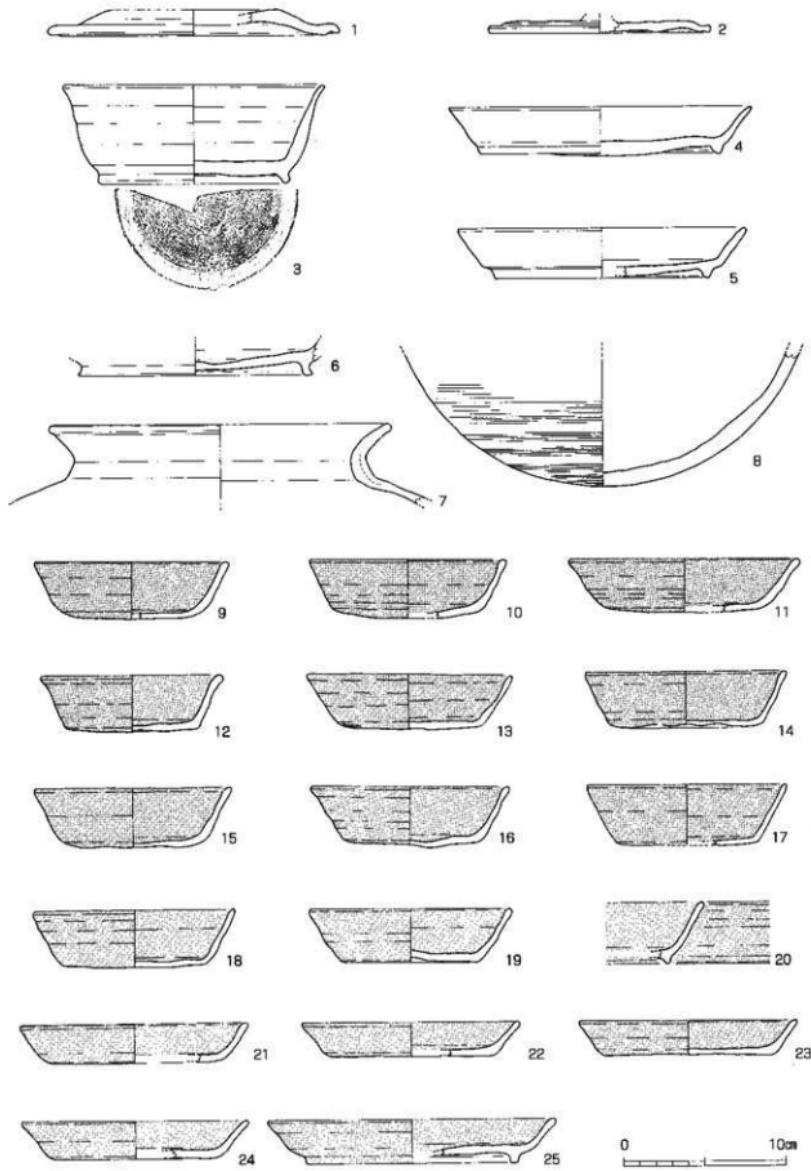
整理作業中、この砥石と中世末のSD01から出土した砥石（50-5）が接合し、同一個体であることがわかった。SD01の砥石がSD01が掘り込んでいたSD04からの混入とすると、この砥石は2つに割れた後、別の場所に破棄されたものと考えられる。2つの砥石の出土地点は15m近く離れている。研ぎ面が一致することから、割れた後使われることなく破棄されたと思われる<sup>10</sup>。

#### A・B11Gr 土器溜り（第47図）

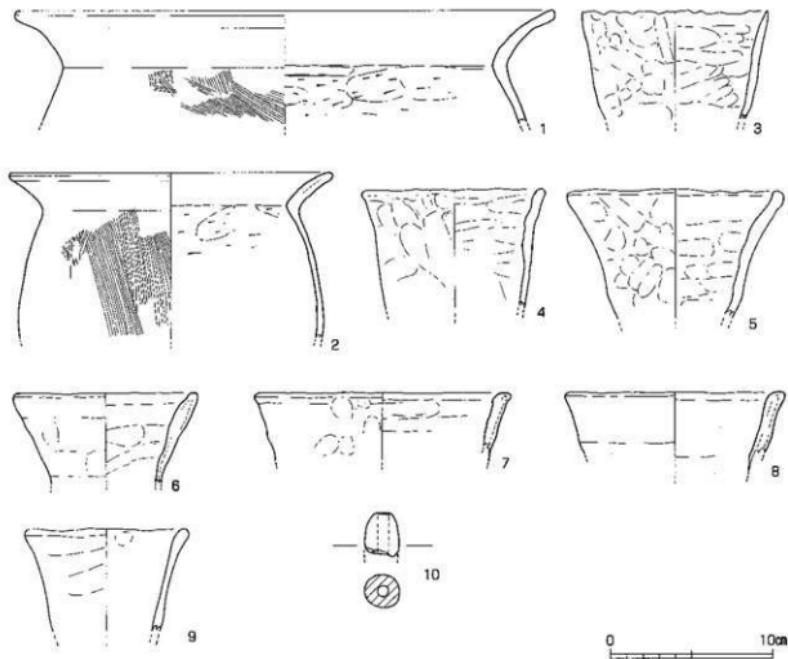
A・B11グリッドで同様に検出した、土器破片の集まりである。「C11グリッド土器溜り」との間は擾乱によって造構面ごと削られてしまっているが、本来はC11グリッドから連続して土器破片が堆積していたものと考えられ、擾乱内で同様の土器破片を多量に収集した。土器溜りは古墳時代前期前葉に埋まったと思われる、SD03と04のほぼ中間に位置している。地山がやや低くなっている5層の落ち込み状になった範囲で、土器が堆積したものと考えられる。

遺物のほとんどは小谷2期（草田7）のもので、小谷3期に入る遺物も若干見られる。SD03・04との時期差はほとんどなく、これらの溝が最終的に埋没する段階で、形成されたものと考えられる。

出土遺物（第48図） 1~7は複合口縁の壺である。ほとんどの口縁端部は平坦面を持つ松山編年による口縁II類<sup>11</sup>に相当するが、3はやや丸みを持ち、1は玉縁状に膨らむ。口縁の稜は6を除いて甘く突出する。頸部のやや下がった位置から始まる内面の削りは、肩部まではヨコ方向、以下は斜め方向になる。外面の調整は横方向の刷毛目が主で、6、7には荒い刷毛目が見られる。また、6の肩部にはハケ原体による刺突文が施される。2点づつ付けられたように見えるが、1回の刺突によって間が途切れたように施文されている。この刺突文は一巡しない。いずれの壺も器壁が厚く、胴部下半を欠いているが、おそらく丸底を呈するものと考えられ、小谷1~2期に相当するものと思われる。8は受部径17.8cm、脚部径16.8cmを測り、器高10cmに満たないやや小型の鼓形器台である。脚部内面にヘラ描きの線刻が2本並行して施されている。同様の線刻はSD03の鼓形器台（60-5）や高坏脚部



第40図 SK10出土遺物実測図1(S=1:3)



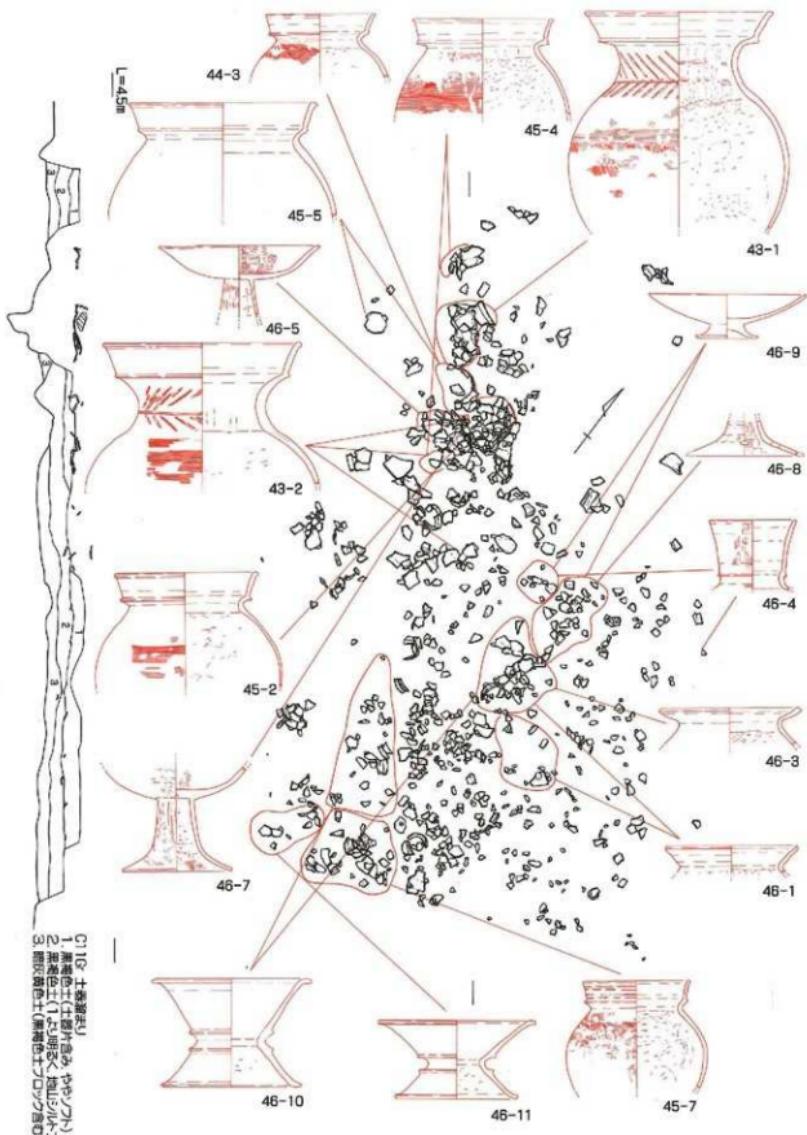
第41図 SK10出土遺物実測図2(S=1:3)

(59—18)にも見られる。制作者の何らかの記号であろうか。9は口径27.4cm、底径19.3cm、器高15.8cmを測る大型の高壺である。段を有する壺部は緩やかに口縁が外反し、脚部は低く大きく開く。ともに端部に平坦面を持つ。脚部の外面は刷毛目、内面は削り調整で、壺部は全体に丁寧なナデが施される。接合部に径4mm、深さ8mmの刺突痕が確認される。裾部欠損部に円形透かしの痕が確認される。10は土師器の小皿である。底部は回転糸切り離しで、輪轆成形時のナデ痕が顕著である。SX01から同種の小皿が出土しており、SX01が土器溜りを掘り込んでいることから、10はSX01からの混入と考えられる。

#### 9. 溝状遺構（第49図～72図）

##### SD01・02（第49図）

調査区の東端で検出した溝で、平行して南東方向から北西方向に向かって走っている。この2本の溝はSK01とSE02を切っており、さらに古い遺構であるSD04を切って掘られている。巾はSD01が1.0~1.6m、SD02が1.4~1.8mを測り、深さはともに60cm程で、逆台形の断面を呈す。縁土からは須恵器・土師器の破片とともに青白磁の破片がわずかに出土しており、中世の利水目的の溝



第42図 C11Gr土器灑り実測図(S=1:30)

と考えられる。

出土遺物の中には、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての土器破片が何点か見られたが、SD01・02が切っているSD04からの混入品と考えられる。SD01・02とも、底面のレベルは北側で標高3.9m前後、南側で4.0m前後と、南から北に向かってわずかに下る。

#### SD01・02出土遺物（第50、51図）

50-1は弥生時代後期前葉の甕で、口縁に4条の沈線が施される。SD01が切っているSD04からの混入と考えられる。50-2は貼付高台を持つ須恵器壺である。体部外面に2本の線刻が見られる。上部が欠損しており、文字としては読めない。何らかの記号であろうか。50-3は須恵器の灯明皿である。口径10cm、器高2.8cmを測り、口縁部は鋭く外反する。底面は回転糸切り離し後ナデ調整され、内面の一部には自然釉が付着している。「三田谷I遺跡SD06<sup>33</sup>」や「湯岬遺跡」において類似の灯明皿が出土しており、奈良時代後半に相当される。50-5は砥石である。細かな砂岩質で、4面を使用している。C11G<sub>r</sub>土器溜まり出土の砥石（46-12）と接合した。

51-1は複合口縁の甕である。ヨコ刷毛目調整された肩部に刺突列点文が施される。小谷1期に相当する。51-2～5は布留式系の単純口縁甕である。いずれも「く」の字状に開き、端部に面を作る。51-7は須恵器高壺の脚部である。51-6は高台付の土師器で、口縁部を欠くが皿になるものと思われる。

SD01からは李朝の施釉陶器である紺青沙器の皿が1点（50-4）出土している。釉薬は薄く、やや粗雑な印象を受ける。同様の紺青沙器は「大井谷II遺跡」においても報告例がある<sup>33</sup>。SD02からは同じく李朝と思われる白磁碗の底部（51-8）が出土している。この白磁碗の底部には、断面に4ヶ所、高台に1ヶ所鋭い刻み目が見られる。破損後砥石として転用したものであろうか。いずれも16世紀代の物と思われる。また、刀子状の鉄製品が1点（51-9）出土している。

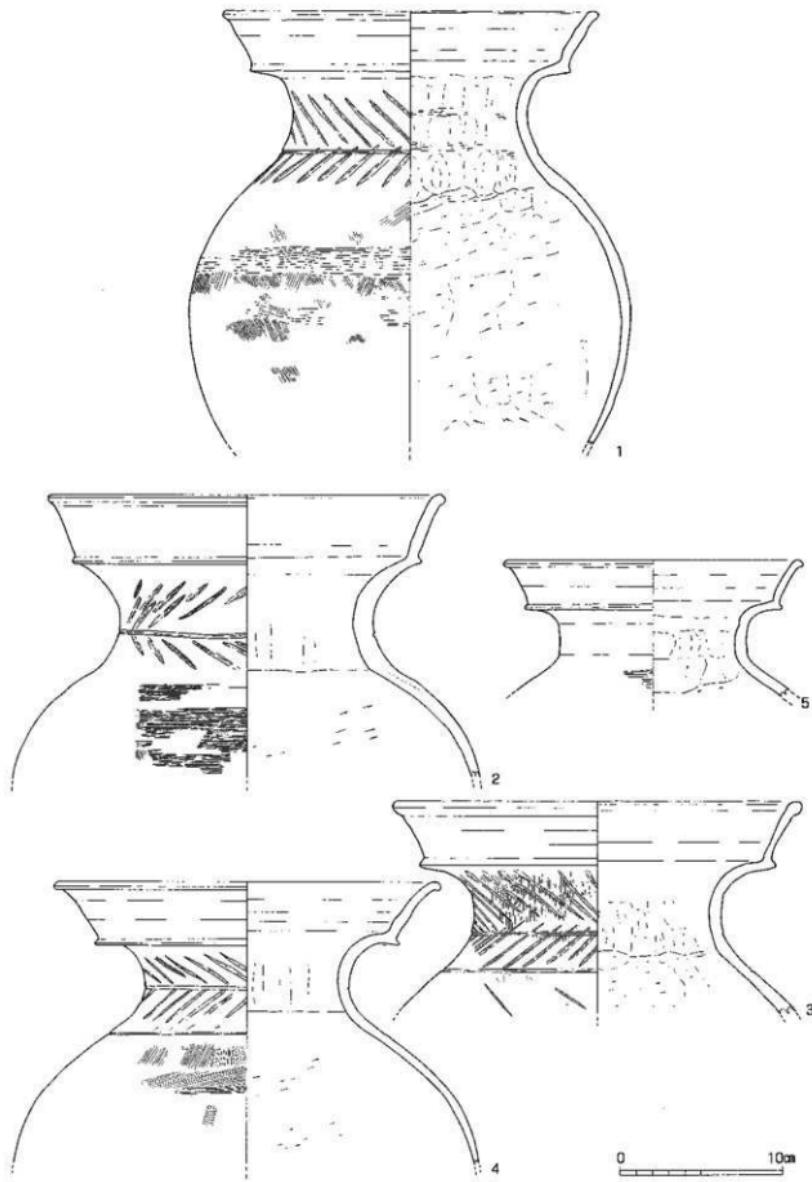
これらの遺物のうち、51-1～5はSD02が切っているSD04からの流れ込みと考えられる。50-3、51-6、7もSD02に伴うものではないと考えられる。遺構SD01・02の埋まつた時期は、ほぼ中世末（16世紀）と考えられる。

#### SD03（第52図）

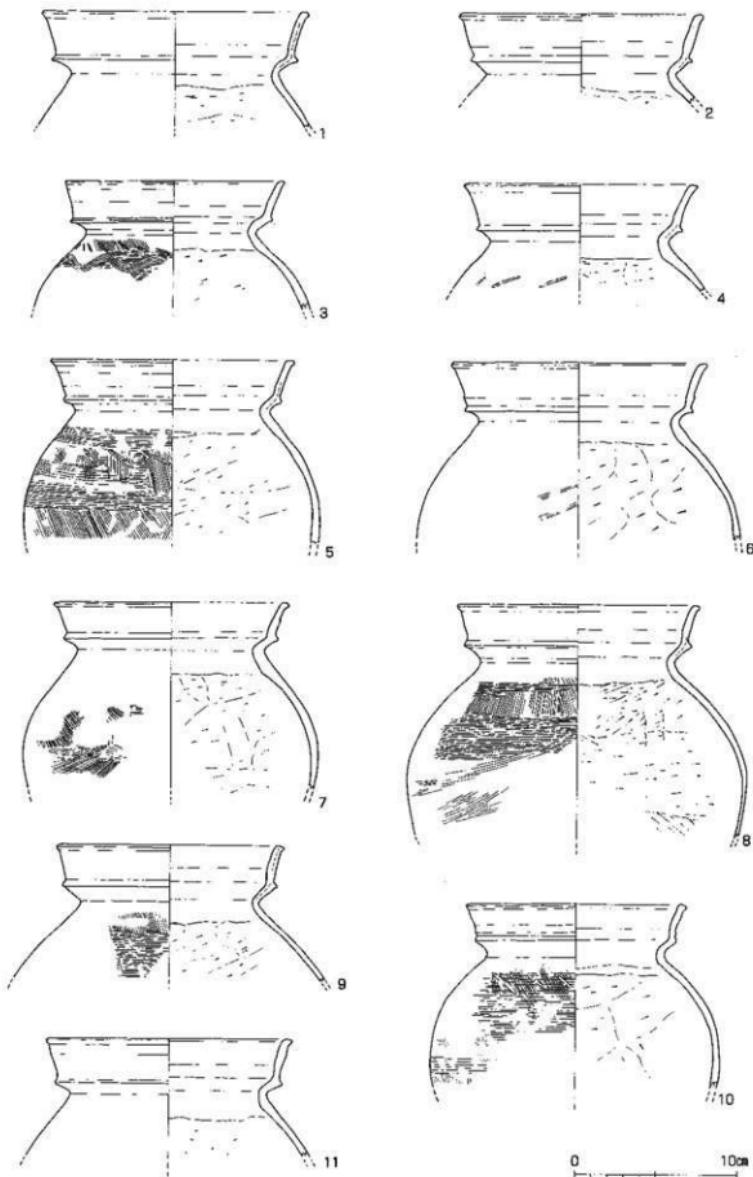
調査区の中央から東の部分で、南北に走る大溝である。次に記述するSD04と同様やや東に向かって湾曲している。巾は最大で6.0mを測るが、北側と南側の東肩は擾乱により大きく削られている。断面は皿状を呈し、深さ90cmを測る。何回かの堀直しが行われ、巾広の大溝となったと考えられる。

遺物の出土状況を見ると、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての遺物を多く出土する下層と、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての遺物を多く出土する上層に分けられる。中心より東寄りで黒褐色土が溝状に堆積しており、その中で古墳時代前期前葉の土器が列状に密集して出土している。ほとんどは破片であるが、復元可能な個体も多くあり、まとめて廃棄されたものと思われる。遺物の中には畿内系の布留式系土器も若干見られる。この土器の列状に出土している部分が、最終的に埋まつた溝と考えられる。

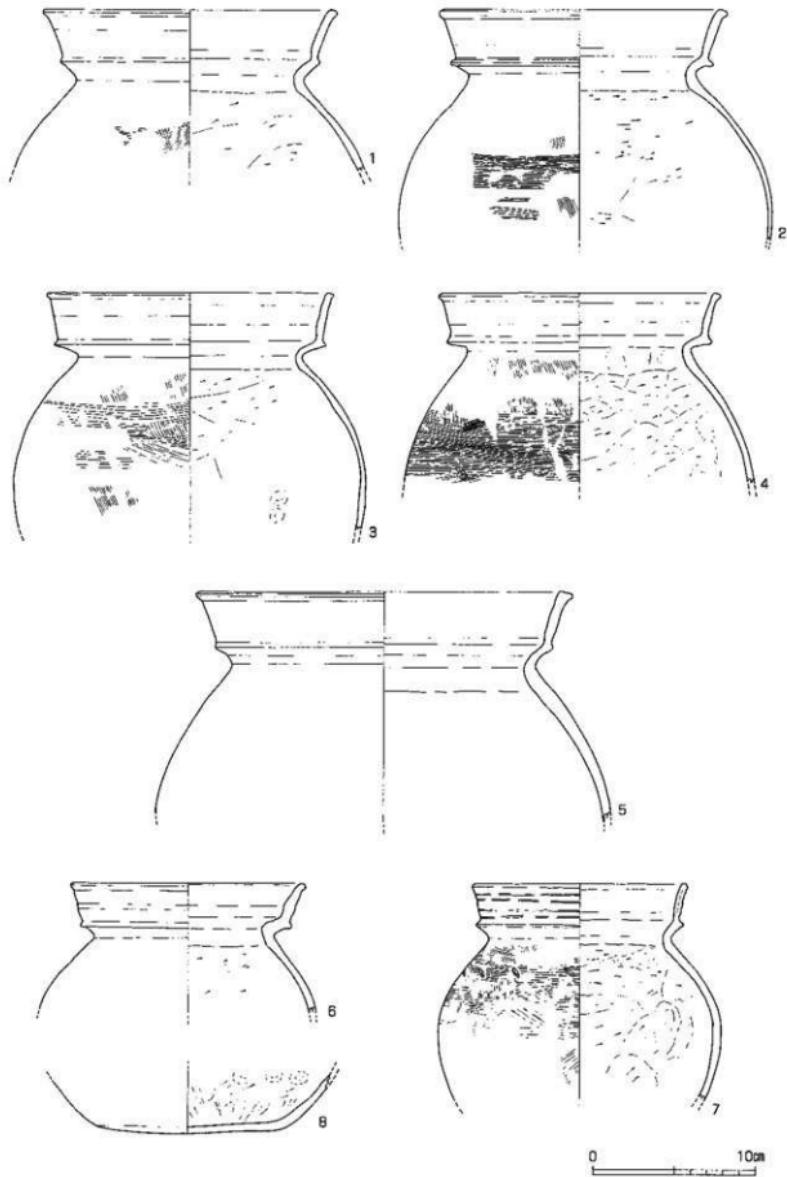
上層の観察から、大きく分けてI～Vの掘り直しが行われたものと考えられる。Iの1、2層に草



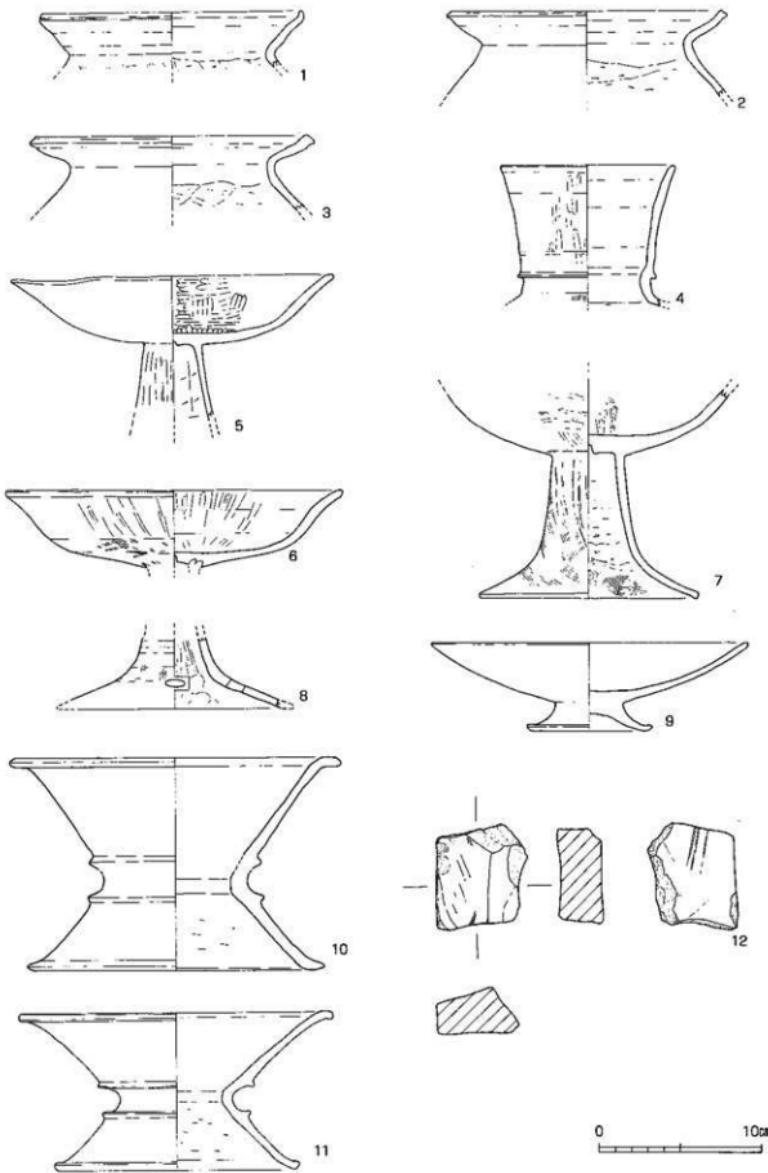
第43図 C11Gr土器溜り出土遺物実測図1(S=1:3)



第44図 C11Gr土器溜り出土遺物実測図2(S=1:3)

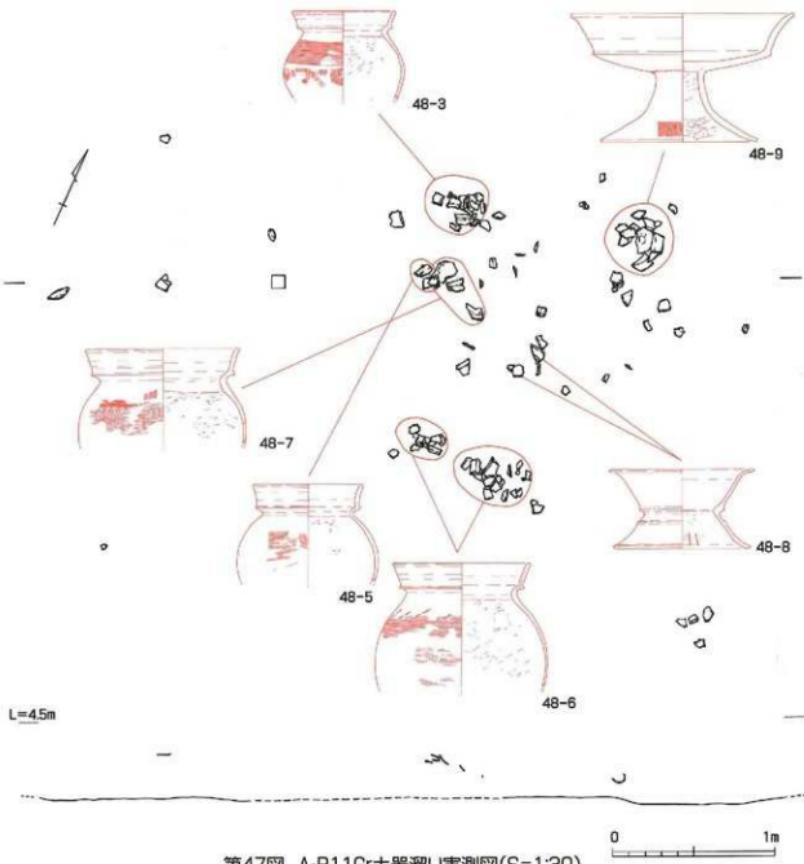


第45図 C11Gr土器溜り出土遺物実測図3(S=1:3)

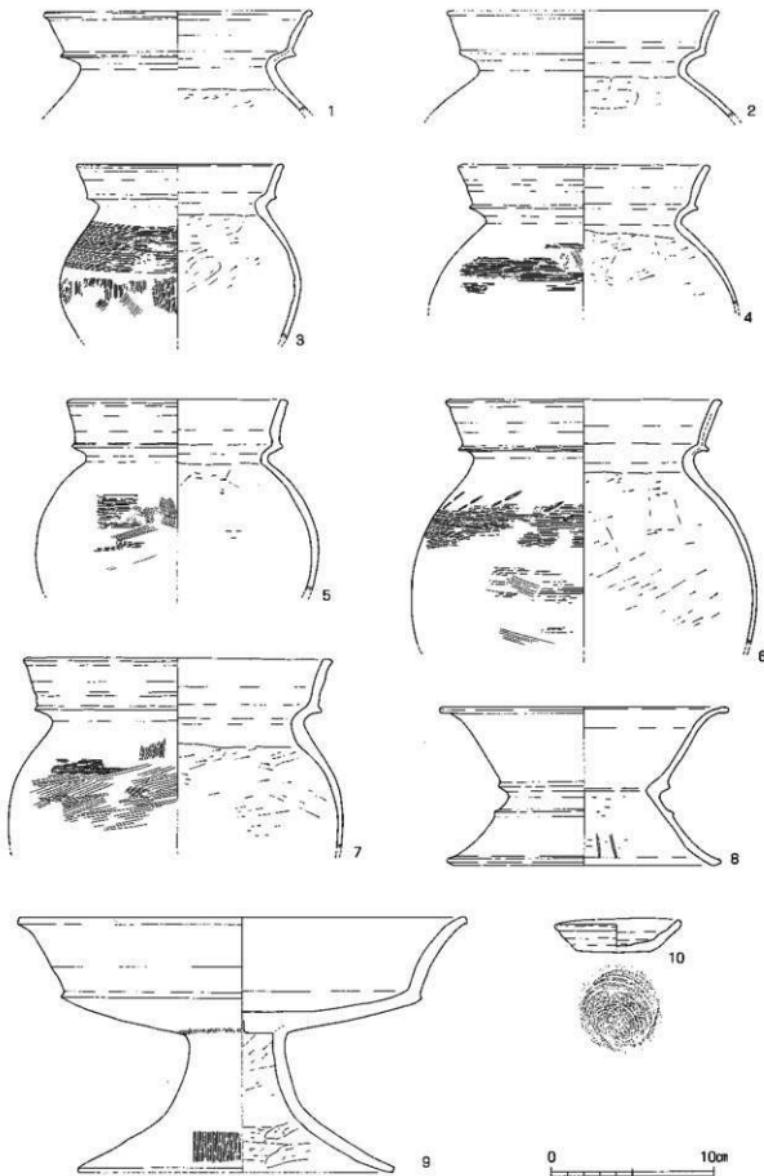


第46図 C11Gr土器溜り出土遺物実測図4(S=1:3)

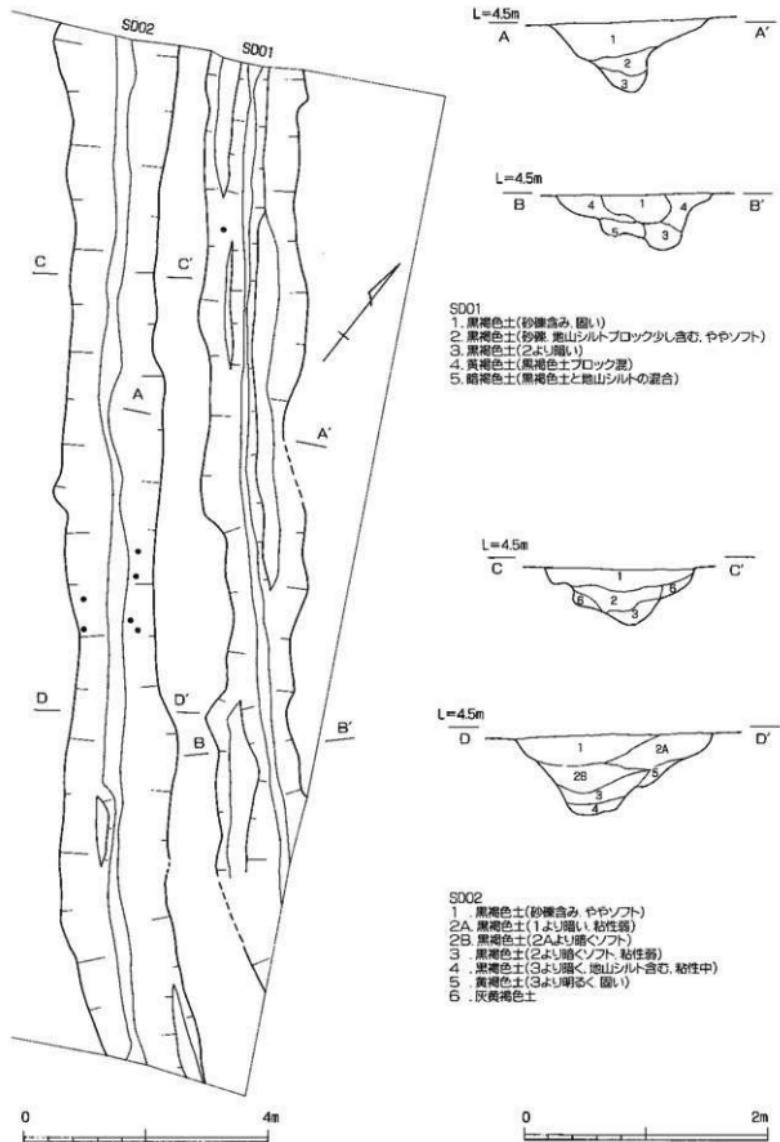
田6新～7期（小谷2期）の遺物が集中しており、この落ち込みがSD03の最終段階の溝と考えられる。1. 2層はその上層に当たるが、上層が後世に削平されていることを考えると、本来の溝の中では中層に位置するものと思われる。IIはIの西側に掘られており、そのうちで何回かの掘り直しが行われたことが土層から窺える。埋土からの出土はまばらで、遺物は弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての遺物がほとんどであるため、Iとの時期差はあまりないものと考えられる。III・IVの段階で弥生時代後期前葉の遺物を含むが、Vは弥生時代後期前葉の遺物を主に含み、弥生時代中期後葉の土器片が数点見られるところから、最初の溝は弥生時代中期後葉に掘削され、後期前葉に埋没したものと考えられる。古段階の構Vはその完掘状況を見るとゆるやかな「S」字状になっており、当初は溝幅も細く、環濠といえる規模ではなかった可能性も考えられる。その後、時期をおかずしてIII・IVと掘り直される過程で大溝化したものと考えられる。



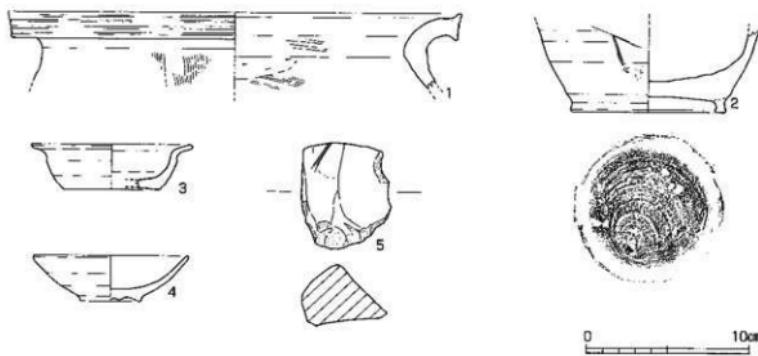
第47図 A-B11Gr土器溜り実測図 (S=1:30)



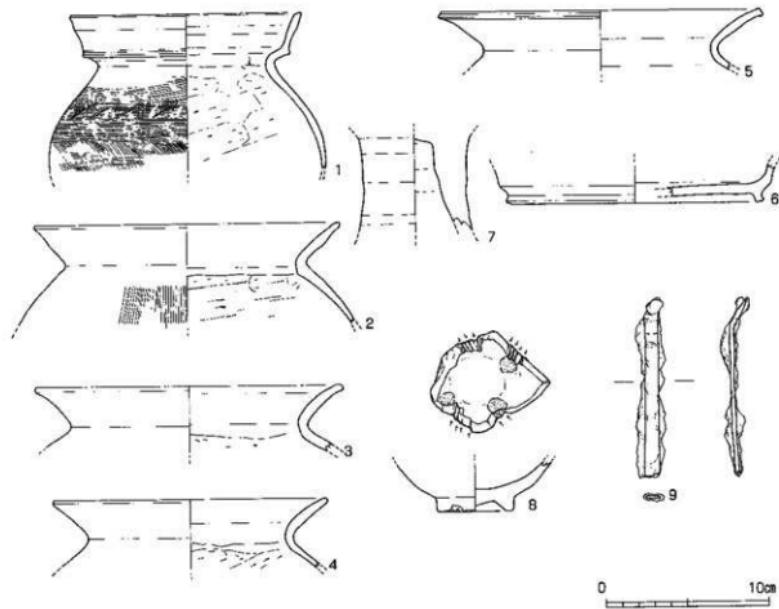
第48図 A-B11Gr土器溜り出土遺物実測図(S=1:3)



第49図 SD01-02実測図(遺構 S=1:80 )(土層 S=1:40)



第50図 SD01実測出土遺物図(S=1:3)



第51図 SD02実測出土遺物図(S=1:3)

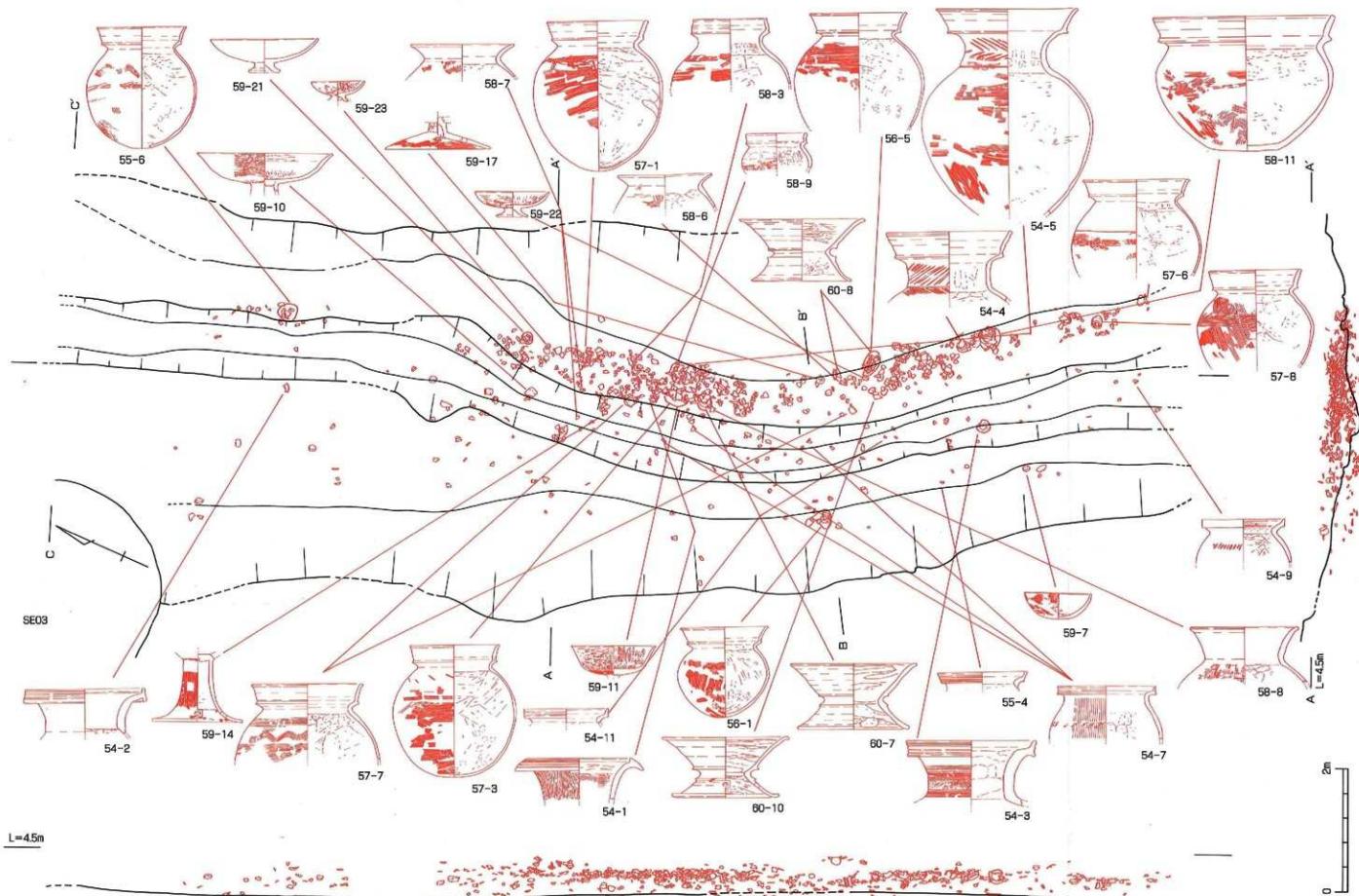
### S D O 3 出土遺物（第54～60図）

第54図1は広口壺の口縁部である。口縁に5条の凹線が施され、内外とも刷毛目調整である。下層より出土しており、弥生時代中期後葉の壺と考えられる。2・3は弥生時代後期前葉の壺で、橙色を呈す。拡張した口縁に4条の櫛描き凹線を施し、3の頸部には擬凹線文に区画された中に、細かな波状文が巡る。草田1期に相当する。4・5は複合口縁細頸壺である。頸部に板状工具の刺突による羽状文が施される。4は間に沈線が1条入って有軸となる。刺突文は上段が長く刺突される。頸部内面には指のなでつけ痕が見られる。5は底部を欠いた状態で、33.6cmの器高を測る。これらの壺は小谷2期に相当する。6は直口壺の口縁部である。7・8は弥生時代中期後葉の甕である。7はタテ刷毛目調整された胴部に、板状工具の木口による刺突列点文が巡る。8は口縁を欠くが、7と同様タテ刷毛目の上に、小豆状の刺突列点文が巡る。内面胴部下半は削り、上半部には刷毛目と指圧痕が残る。

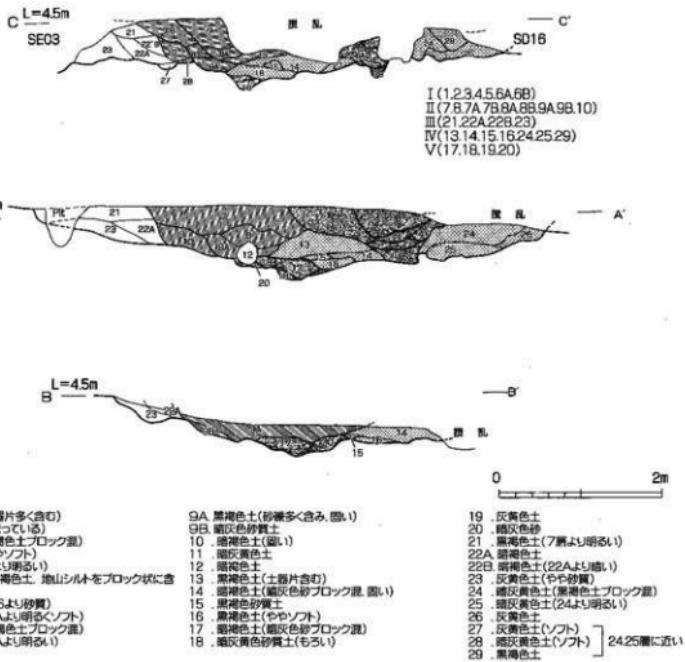
第54図9～11、第55図1～4は弥生時代後期前葉の甕である。54～9の肩部には木口による刺突列点文が施される。55～2の口縁はややダレて拡張し、擬凹線も不明瞭である。胴部に小さな刺突列点文が施される。3・4は口縁の形状から草田1期に相当しよう。5は拡張した口縁に貝殻複縁による沈線が施される。草田3期に相当する。

第55図6～10、第56図1～7、第57図1～8、第58図1～2は複合口縁の甕である。55～6～8は全体に器壁が薄く、口縁端部は外側につまみ出す。6の肩部には櫛状工具による波状文が施され、底部は痕跡の平底になると思われる。これらの甕は草田6期に相当する。9の胴下半部は荒いヨコ刷毛目調整され、肩部には板状工具による刺突列点文が施される。10は長胴の体部で、上半部は細かなヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目で調整され、内面の調整もそれに対応するように上半部が横方向の削り、下半部は削りの後指ナデの指圧痕が残る。口縁端部外側にも面を作る。9・10は小谷1期に相当しよう。

第56図1～5の甕の口縁はいずれも端部を外側に引き出して面を作るものである。1は口径13.6cm、器高14.6cmを測る小型の甕で、やや尖り気味の丸底を呈す。肩部外面にはヨコ刷毛目の後細かな波状文が巡り、タテ刷毛目調整された胴下半にはススが付着している。内面下半部には指のナデ上げ痕が残る。また、底部近くには小さな穿孔があり、廃棄時に穿たれたものと思われる。小谷1期に相当するものと考えられる。この甕は列状に出土した土器群からやや西にはずれた位置で、ほぼ完形の状態で出土しており、最終的に埋まった溝Iの前段階の溝の遺物と考えられる。2は口径17.8cmに対して器高19.1cmを測る扁平な甕である。類似の土器は「古志本郷遺跡」や鹿島町の「南構武草田遺跡」からも出土している。底部は薄く幅広の平底をなす。胴上半部外面はヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目が施されるが、底部に向かって消えていく。胴中央部はススにより黒変している。内面は胴上半部がヨコ削り、下半部がタテ方向の削りに指頭痕が見られ、底にかけて指でナデ上げられる。底には焦げ付きの痕が残る。3・4は18～19cmの口径を測る甕で、体部は球形をなすが、3はやや張った胴部を持つ。いずれも胴上半部は外面がヨコ刷毛目、内面はヨコまたは斜め方向の削り、下半部は外面タテ刷毛目、内面はタテ方向の削りに指圧痕が残る。6・7は口縁が肥厚し、端部外側に面を作る。ともに上半部はヨコ刷毛目調整され、肩部に浅い刺突列点文が巡る。6の底部内面には指圧痕が顕著に見られる。「姫原西遺跡SK17」から類似の甕が出土している。



第52図 SD03実測図(S=1:60)



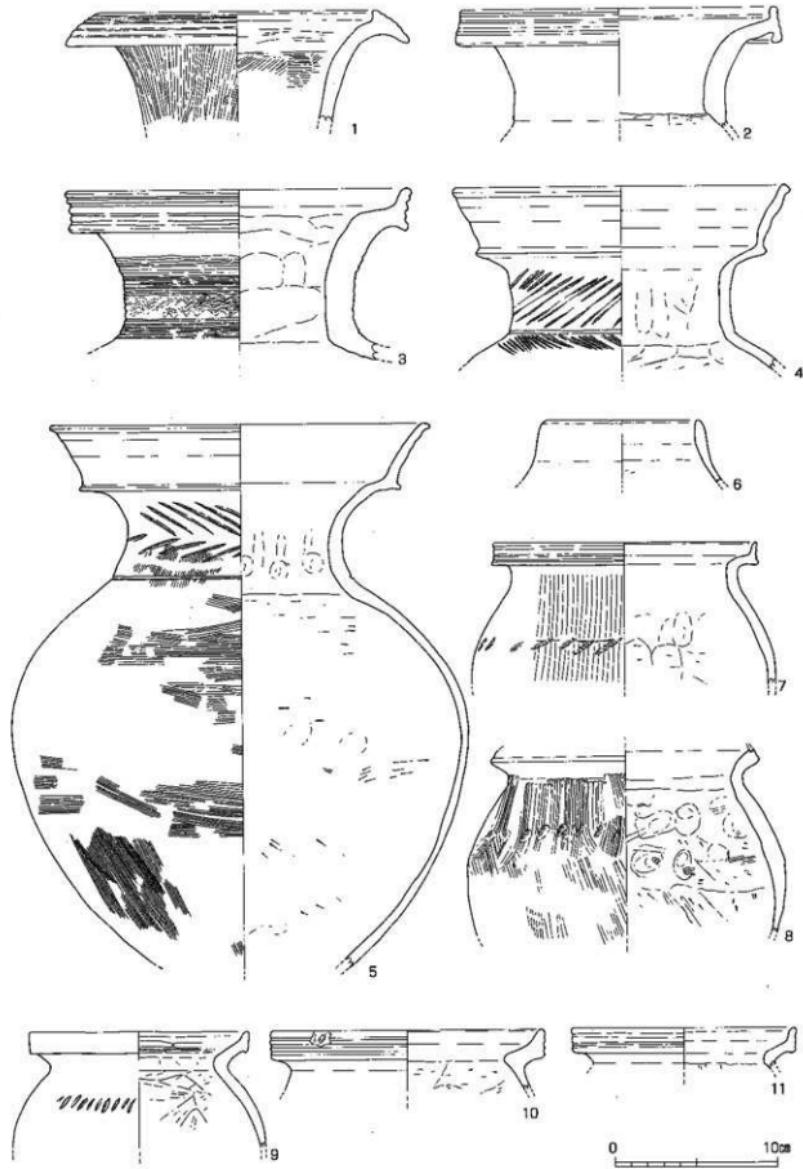
第53図 SD03土層図(S=1:60)

これらの甕は概ね小谷2期に相当するものと考えられる。

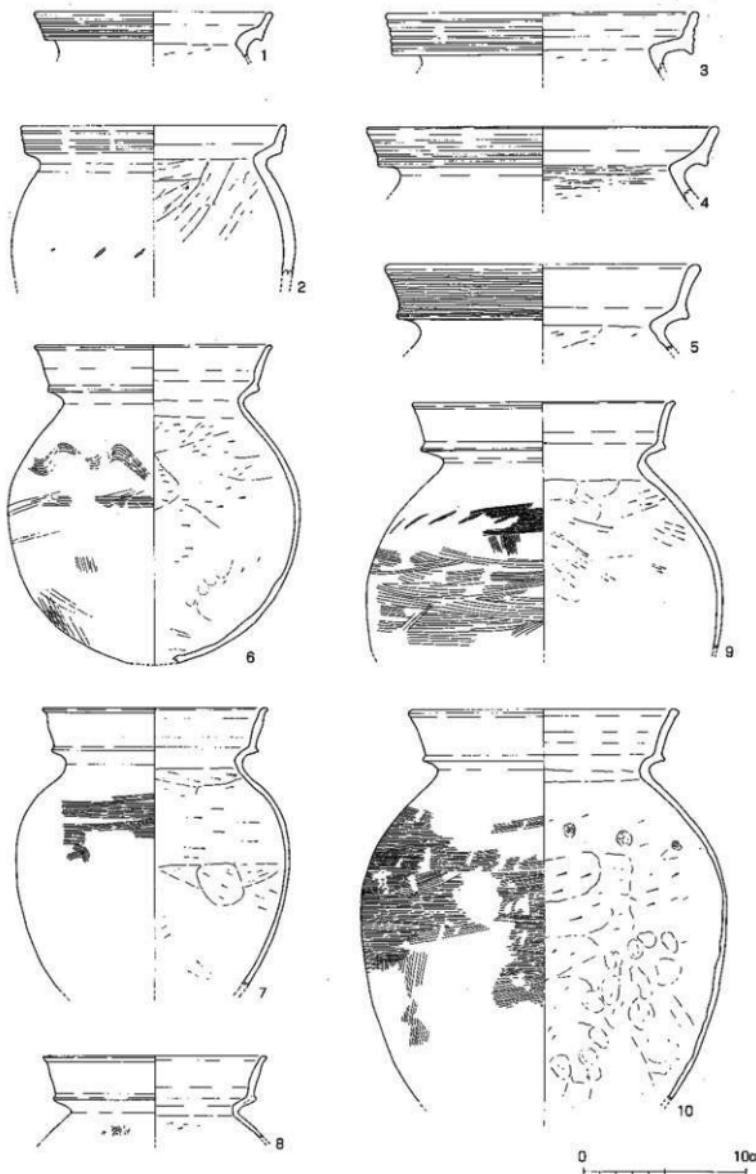
第57図1は肥厚した口縁端部に平坦面を持つ。体部は倒卵形を呈し、丸底をなす。外面の調整はヨコまたは斜め方向の刷毛目で、下半部ははっきりしない。肩部には帯状に施された刷毛目の上に板状工具による刺突列点文が巡る。底部内面には指のナデ上げ痕が見られ、焦げ痕が残る。2は肩部に弱いタテ刷毛目の後、長さ1cmほどの刺突文を施す。3・4は口径13~14cmを測り、肥厚した口縁が先細りになる端部に面を作る。体部は球形を呈し、肩部には板状工具による刺突文が簡略的に施される。外面の調整は底部までヨコ刷毛目が施され、内面下半部には指圧痕とナデつけ痕が見られる。5~7は口径16~18cmを測る甕である。複合口縁の稜は甘い作りで、端部は外側に肥厚して面を持つ。5は板状工具による刺突列点文が、6はヘラ描きの沈線が、7は櫛状工具による波状文がそれぞれ肩部に巡る。内面頸部直下の削りが始まる部分に指圧痕が見られる。5には肩部にも指圧痕とナデつけの痕が見られ、それは外面の刺突文に対応しているようである。8は短く肥厚する口縁で、タテ刷毛目の後につけられたヨコ刷毛目の上に、長さ1.4cmの刺突文が施されるが周巡しない。

これらの甕は概ね小谷2期に相当するものであるが、8は小谷3期に入る可能性がある。

第58図1は小谷2~3期に入ると思われる甕で、器壁が厚く、ダレた稜の作りである。頸部内面に指圧痕が見られ、外面には刺突列点文を施す。2は口径22cmを測る中型の甕で、小谷2期に相当する。



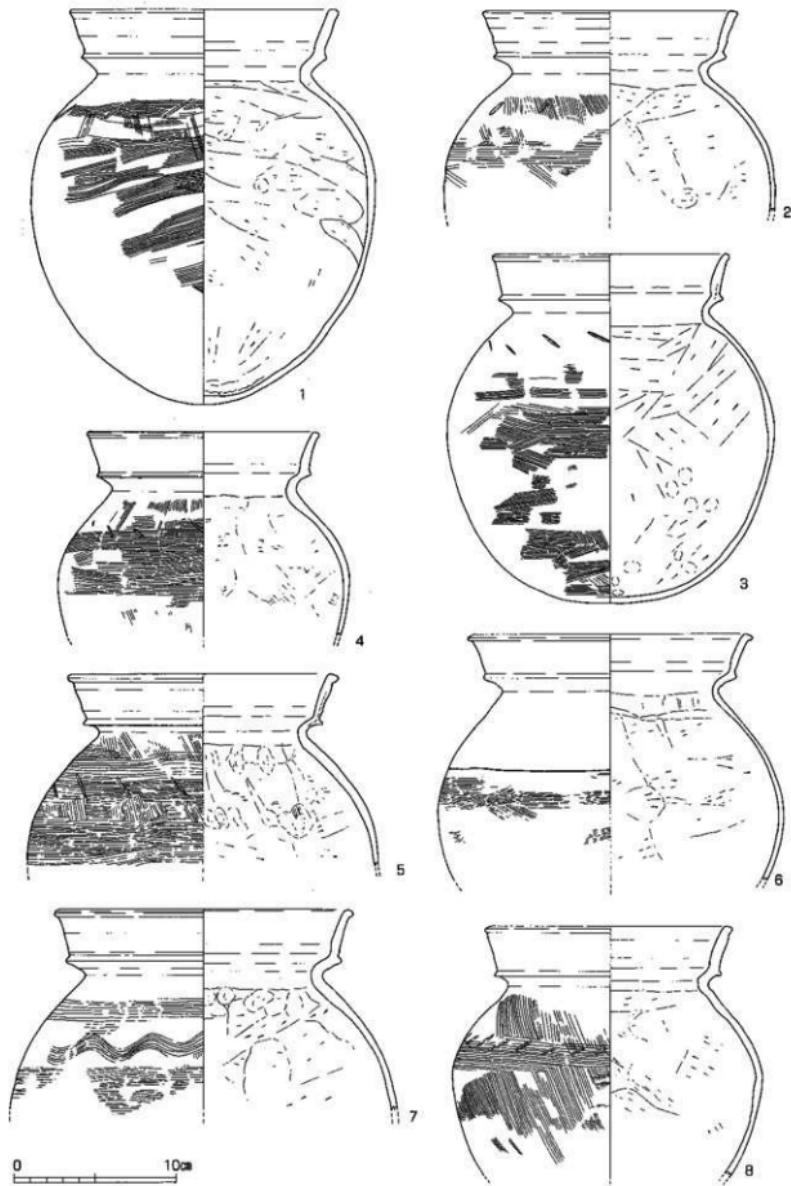
第54図 SD03出土遺物実測図1(S=1:3)



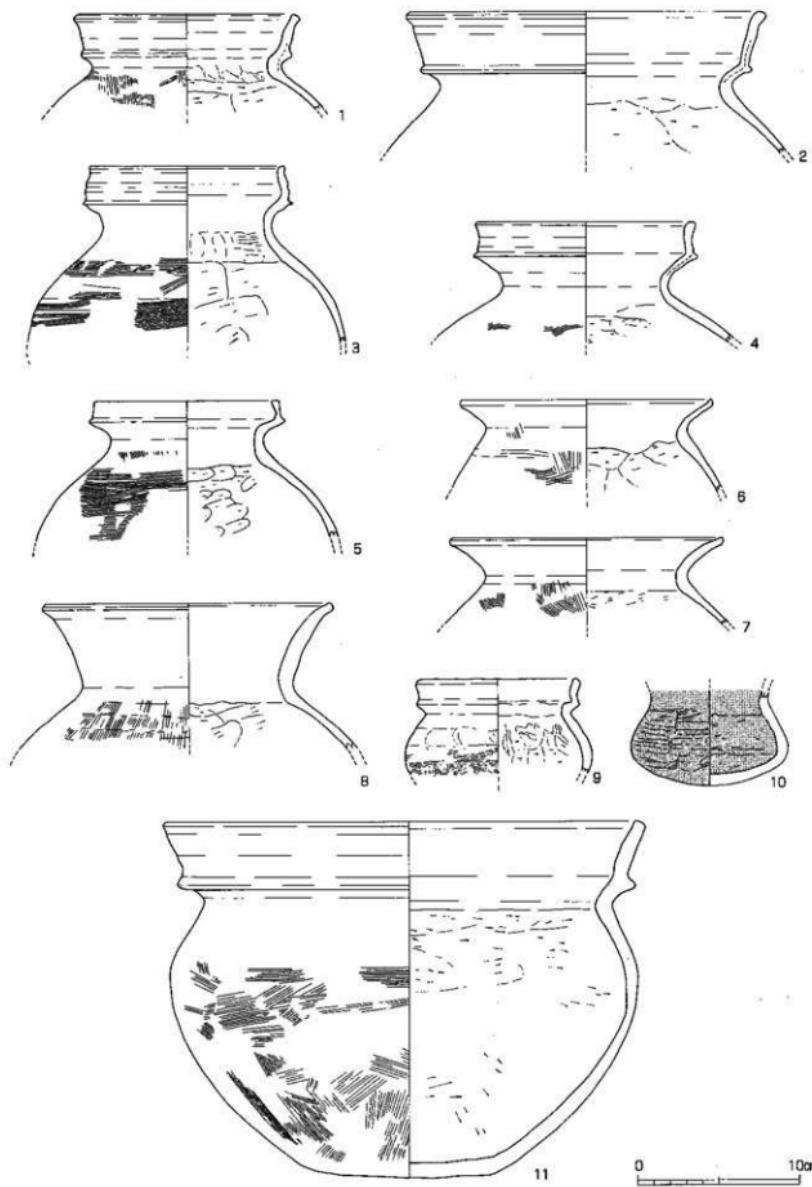
第55図 SD03出土遺物図実測2(S=1/3)



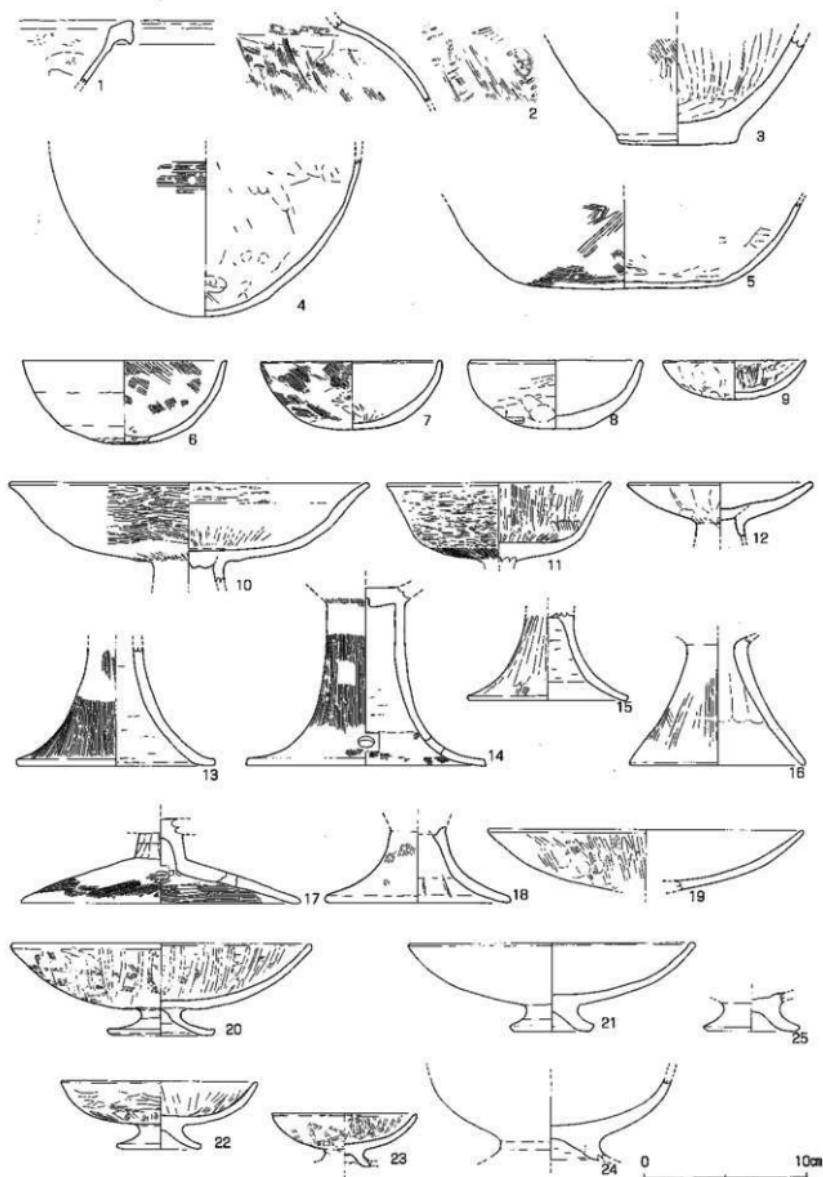
第56図 SD03出土遺物実測図3(S=1:3)



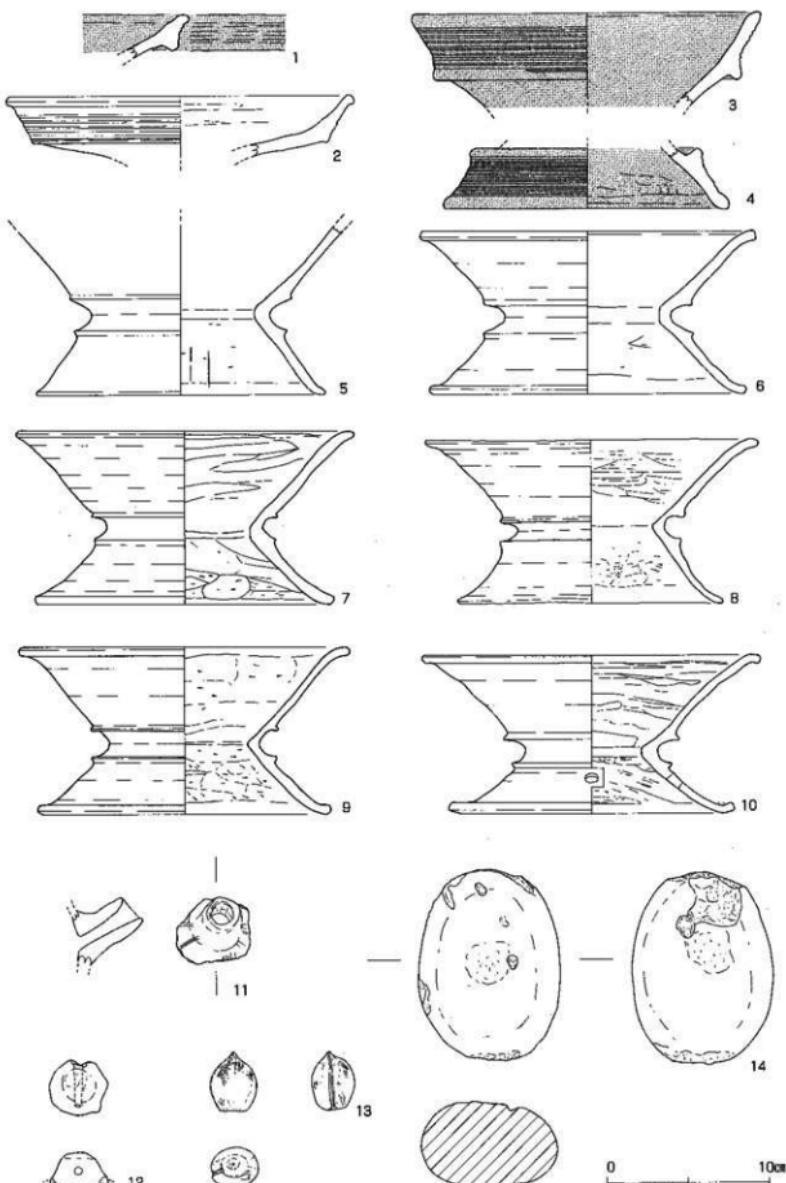
第57図 SD03出土遺物実測図4(S=1:3)



第58図 SD03出土遺物実測図5(S=1:3)



第59図 SD03出土遺物実測図6(S=1:3)



第60図 SD03出土遺物実測図7(S=1:3)

3～5は内傾する複合口縁の甕である。いずれも口縁端部に面を作る。3の肩部には、ヨコ刷毛目の上に木口による刺突列点文が施される。6点のみで、周巡しないものと思われる。4の肩部には、風化のため不鮮明であるが、波状文の痕跡が残る。いずれも球形の体部を呈するものと考えられ、小谷2期に相当しよう。6、7は布留式甕系の単純口縁をなすもので、6は端部を薄く上方に引き上げ、7は「逆ハ」の字状に外反する。8は長く外反して立ち上がる口縁の甕で、外面はタテ刷毛目の後ヨコなでられる。布留1期併行のものと思われる。9はミニチュアの甕である。内面は肩部を強くヘラ削りされ、その外面には指圧痕が見られる。手づくね成形のような雑な作りで、祭祀用の土器と考えられる。10は小型丸底甕と思われる。口縁部を欠損する。体部はそろばん状に振り、底部はやや尖り気味の丸底である。精製された土器で、外面には横方向の丁寧なヘラミガキが施され、内外とも赤色塗彩される。11は口径約30cm、器高22cmを測る大型の鉢で、口径に比して器高が低い。器壁が厚く、口縁は肥厚して端部に面を作る。径9cmを測る平底の底部外面は刷毛目調整される。胴部中央部はヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目が施される。内面は胴上半部は横方向の削りで、下半部はタテ方向の削りであるが不明瞭になる。胎土はやや脆く、浅黄橙色を呈す。小谷2期に相当するものと思われる。

第59図1は鉢と思われる口縁の破片である。口縁端部が肥厚して拡張する。内面は削り後ナデ調整され、外面は漆塗りされる。弥生時代後期前葉のものと思われる。SD03の旧溝下層より出土している。2は土師器の肩部破片である。内外面とも刷毛目調整であるが、外面にはタタキの痕跡が見られる。庄内系の甕であろうか。3は底径7.4cmを測る底部で、内面にミガキが施される。4、5は胴下半部で、4は丸底、5は扁平な平底になる。器壁は薄く、指圧痕が認められる。5は56-2のような甕の底部と考えられる。6～9は土師器の坏である。6は口径13cm弱で、薄い器壁の体部は内湾して立ち上がる。内面の調整は細かな刷毛目で、見込み中心が壅み薄くなっている。坏の中心に穴を開け脚を接合する制作途中のものであろうか。7、8は口径10～11cm、器高4cmを測る同型状の坏で、体部は内湾して立ち上がる。外面は、7が刷毛目の後ナデ、8はミガキの後ナデ調整される。底部は削り後ナデ。9は器高2.4cmと浅い小型の坏で、外面は刷毛目と指圧痕が見られ、内面はヘラミガキ調整される。精製された白っぽい胎土で、畿内系の影響が窺える。10～12は高坏の坏部、13～18は脚部である。10は口径22cmを測り、外反する口縁の内外面は細かいヨコミガキ、体部内面はタテミガキが施される。脚との接合は円盤充填法である。11の体部は直線的に立ち上がり、外面は細かな横方向のミガキ、内面は綫方向のミガキが施される。脚との接合部は刷毛目調整される。12の坏部は浅く直線的に開き、内外面ともミガキの後ナデ調整される。脚との接合は円盤充填によるものと思われる。胎土は荒く砂粒を多く含み、畿内系の高坏と考えられる。13・14の脚部はラッパ状に開き外面には細かい刷毛目が見られる。14の裾部には、径1cmの円形透かしが3～4方に施される。坏との接合部には刺突痕αが見られる。15はやや小型の脚で、外面を磨き調整する。16は「ハ」の字状に開き外面は刷毛目、内面はナデ調整する。「古志本郷遺跡I」に類似する高坏があり、畿内系の高坏と考えられる。17は裾部が低く開くもので、円形の透かしが穿たれる。内外とも刷毛目調整され短い脚の上には、椀状の小型坏が乗るものと思われる。精製された胎土は赤い色調で、坏との接合法も在地のものとは異なることから、他地域からの搬入品と考えられる。18の内面には、2条の平行する沈線が線刻される。同様の線刻は、第3次調査区SD23出土の低脚坏脚部「小山遺跡第3地点第3次調査報告書」(31-

7) や本調査区 A・B 1 1 G r 土器溜り出土の鼓形器台脚部 (48-8) にも確認され、いずれも脚部の内面に施されている。19~21は口径17.6~19.3cmを測る低脚坏で、坏部は緩やかに内湾しながら浅く開く。21は風化が著しく調整が不明であるが、19は縦方向のミガキが、20は内外ともヨコ刷毛目の後タテミガキが施される。22・23は小型の低脚坏である。内湾して立ち上がる体部はミガキ調整される。24は口縁部と脚端部を欠いているが、その形状は、「第3次調査区 S E 0 1」出土の低脚坏 (11-2) に類似する。25は低脚坏の脚部である。

これらの土器は概ね小谷2期の範疇に入るものと思われる。そのうち、16、23は最終段階の溝Vの下層より出土している。

第60図1・2は器台の受部で、1の口縁には4条の凹線が施され、全体に赤色塗彩される。2の内面はヘラミガキ調整される。溝の下層から出土し、松本V-2様式に相当する。3、4は鼓形器台の受部と脚部である。内外面に赤色塗彩の痕跡が見られる。草田2期に相当する。5~10は筒部の狭まつた鼓形器台である。いずれも、受部径20cm前後、器高10cm前後の大きさで、縮まった器形になる。器壁が厚く、8、9の筒部は鋭角に屈曲する。脚部内面はいずれも削り調整である。受部内面にはミガキが施される(7、8、10)が、削りの後ナデ調整するもの(9)もある。5の脚部内面には先述の2本の平行する線刻が見られる。また、10の脚部には円形の透かしが穿孔される。これらの器台はいずれも小谷2期に相当するものと考えられる。11は短めの注口である。12は種別不明の土製品としたが、半球状に成形した凸部に径4~7mmの穴が穿たれる。片面には削りのような面があり、蓋または鉢の取っ手ではないかと思われる。13は種のような形をした土製品で、上層から出土している。長さ3.6cm、幅2.8cm、高さ2.6cmの大きさで、片方の側面には溝が作られ、底部には丸い小さな凹みがある。非常に写実的に作られており、一見桃の実のような形をしている。種とすれば実物大になると考えられる。桃の種は井戸などの水に関わる祭祀においてよく用いられるものであるが、この土製品が桃の種を模したものかどうかは分からぬ。このような土製品は他に類例が知られず、判別しがたい。14は敲き石である。表裏とも中央部に打痕が見られる。両端に敲き痕があり、側面をミガキに使用したのか擦痕がわずかに見られる。

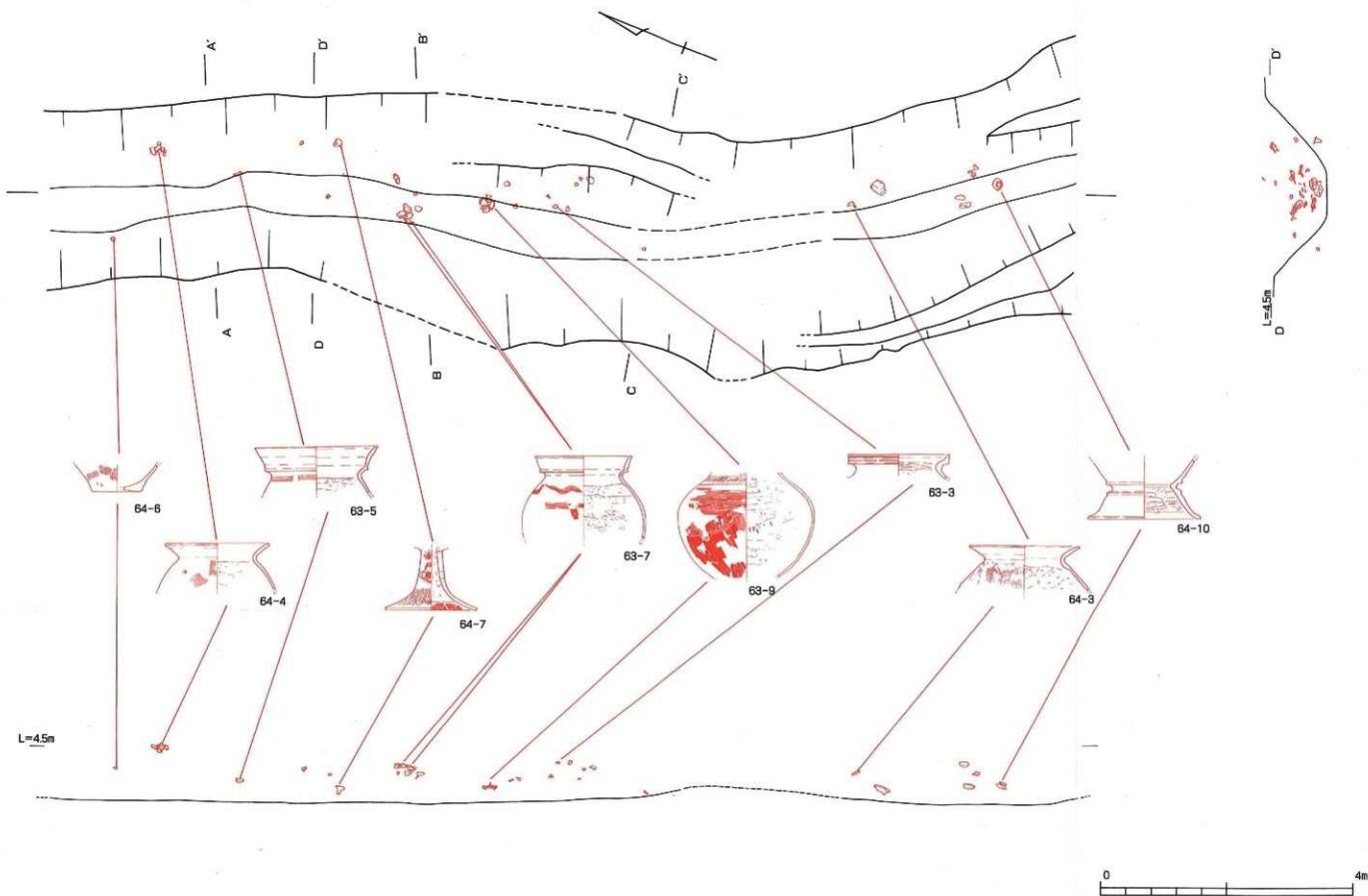
#### SD 0 4 (第61図)

調査区の東端で検出した溝状遺構で、中世の溝であるSD 0 1. 0 2に遺構の一部を切られている。巾2.8~3.5m、深さ80cmを測り、逆台形の断面を呈す。

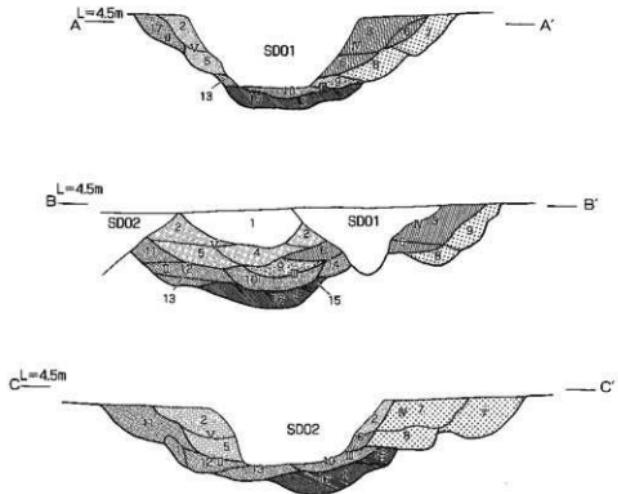
覆土からは、弥生時代終末から古墳時代前期前葉の土器が、中層から下層にかけて出土しているが、その出方はSD 0 3のように密ではなく、まばらに点在する状況である。弥生時代中期後葉から弥生時代後期前葉にかけての土器も出土している。

SD 0 1. 0 2に切られるため埋土の堆積状況が不明な部分があるが、土層の観察から最低4回の堀直しが行われたことが窺われる。Iが最初に掘削され、その後、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけてのII→III→IVと掘り直され、最終的にVの段階で埋まつたものと考えられる。

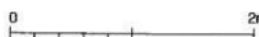
大溝のSD 0 3から約15m東に位置し、SD 0 3に併行するように、緩やかな「S」字状を呈し、やや東に向かいながら南北に走っている。道路を挟んだ20m程北にある、先に調査された四絡30号



第61図 SD04実測図(S=1:60)



1. 黒褐色土(砂礫多く含む)  
 2. 黒褐色土(より明るい)  
 3. 黑褐色土(砂礫少しあり、黄褐色土ブロック混)  
 4. 黑褐色土(3より明るく、黄褐色土ブロック多い)  
 5. 黑褐色土(小の砂化構造多く含む)  
 6. 黑褐色土(黒褐色土ブロック混)  
 7. 黑褐色土(5より明るく、砂礫少ない)  
 8. 反対褐色土(黒褐色土と地山シルトの混合)  
 9. 暗灰褐色土(砂礫含み、黒褐色土ブロック混)  
 10. 黒褐色土(砂粒、黒褐色土ブロック含む、粘性土)  
 11. 黑褐色土(地山ブロック混、しまっている)  
 12. 黑褐色土(11より、明るく、砂礫多く含む)  
 13. 暗黄褐色粉質土(ザラザラ)  
 14. 黒色土  
 15. 暗黄色砂質土(ザザラ)  
 16. 暗灰褐色砂質土(暗灰色土ブロック混、砂粒多い)  
 17. 黄褐色土(しまっている)

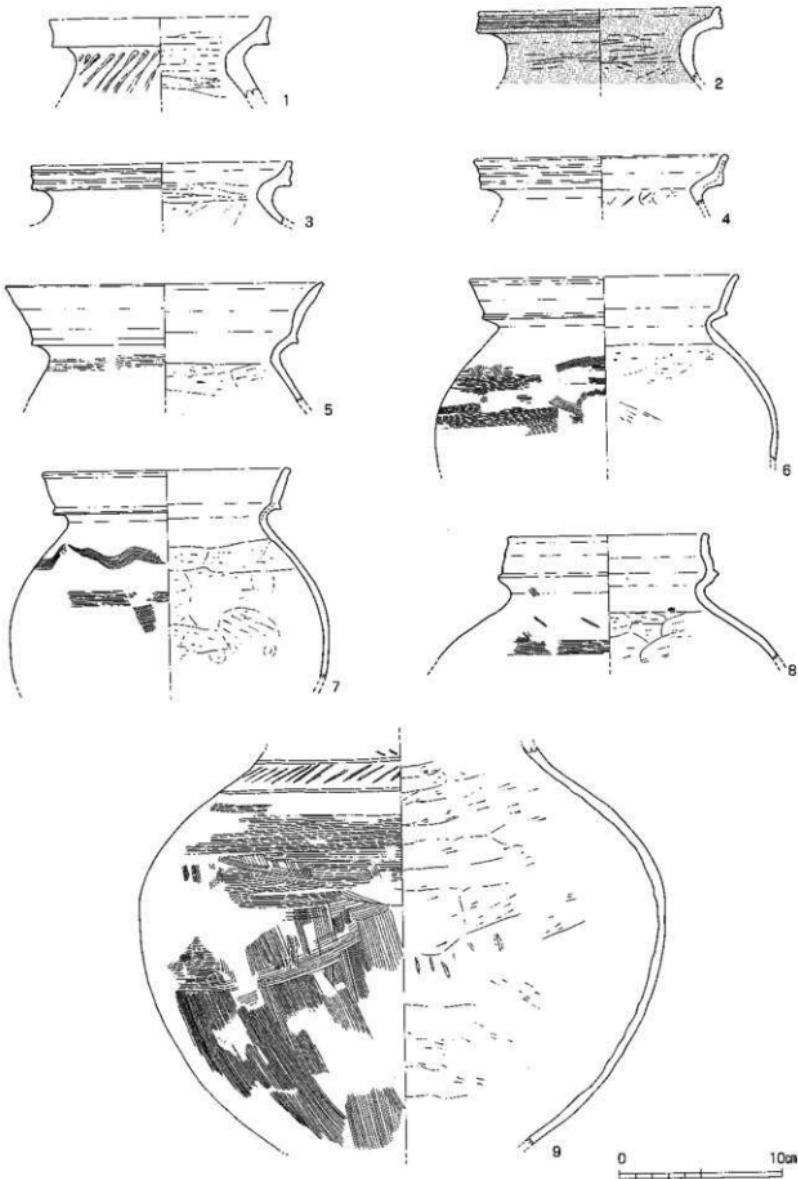


第62図 SD04土層図(S=1:40)

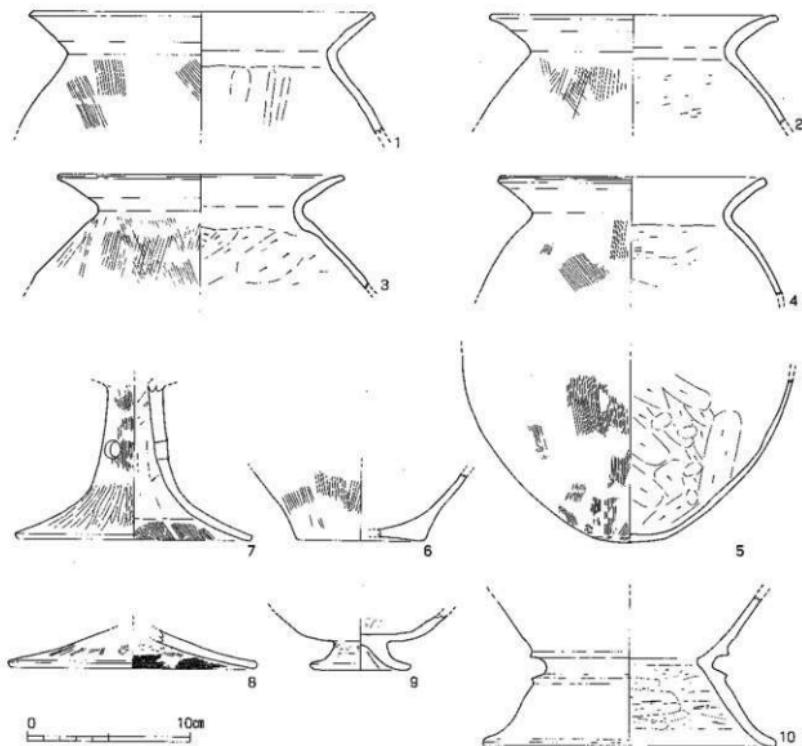
外1線道路改良工事に伴う発掘調査（第3次調査）区で規模・形態の類似する溝状遺構SD23を検出した。SD23はやや北西方向に傾いて走っており、SD04はSD23につながるものと考えられる。この大溝を「環濠」と考える根拠ともなっている。

#### SD04出土遺物（第63・64図）

第63図 1は弥生中期後葉の甕である。頸部にハケ原体による刺突文が巡る。頸部内面はヨコミガキである。2は松本V-1様式に比定される甕で、内外面に赤色塗彩が施される。3～7は複合口縁甕で、3、4は口縁に2、3条の凹線が巡る後期前葉の甕である。5は細く外反する口縁で草田5期に相当する。5、6は口縁幅がやや狭くなり、端部に平坦面を持つ甕である。外面調整はヨコ刷毛目



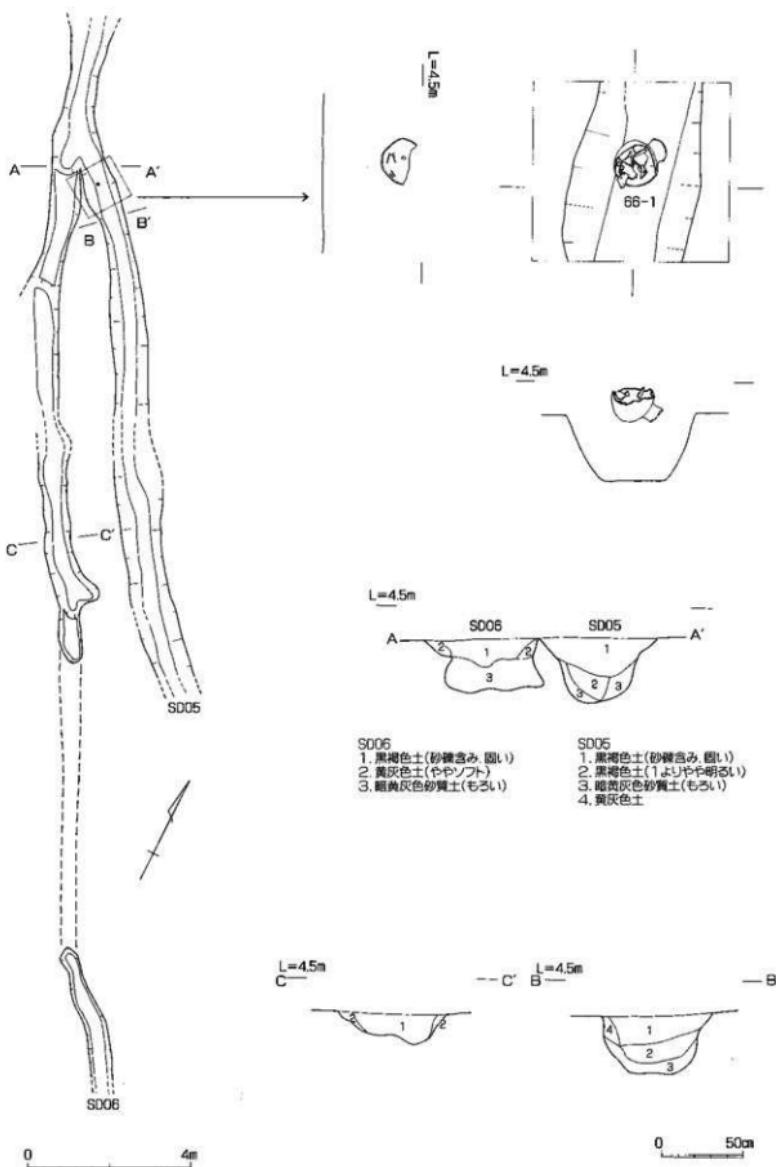
第63図 SD04出土遺物実測図1(S=1:3)



第64図 SD04出土遺物実測図2(S=1:3)

で、7の肩部には幅8mmの弱い波状文が施される。6、7とも内面の削りはやや下がった位置から始まる。8は内傾する口縁を持つ壺で、肩部に刺突列点文が施される。これらのうち、6～8は小谷1～2期に相当しよう。9は大型の壺の胴部で、頸部以上と底部を欠く複合口縁の細頸壺である。胴部最大径32.2cmを測る。頸部から肩部にかけて2条の沈線に区画された中に刺突文が巡る。外面の調整は胴上半部が横方向、下半部が縱方向の刷毛目で、内面は横方向の削りが施される。

第64図 1～4は布留式甕系の単純口縁甕である。2の口縁は大きく外反し、1、3、4の端部には面を作る。外面に荒い刷毛目が施され、色調は浅い黄橙色を呈す。5は甕の下半部で、丸底に近いが平底の痕跡が残る。内面には削りと指圧痕が認められる。弥生時代終末に相当しよう。6は弥生時代後期前葉と考えられる甕の底部で、器壁がやや薄い。7、8は高脚の脚部である。7の外面にはミガキが施され、径1.2cmの透かしが3方に穿たれ、8にも円形穿孔の痕跡が見られる。9は低脚壺で、壺部上半部を欠く。脚部内面にヘラ描きの沈線が1条施されている。10は鼓形器台で、底径18.0cmを測る。受部端部を欠くが、器高は低いものと思われる。5、6を除いて小谷1～2期に相当するものと考えられる。



第65図 SD05・06実測図(遺構 S=1:120 拡大図・土層図 S=1:30)

これらの遺物のうち、63-1. 5.  
7. は溝の下層から出土している。

#### SD05・06 (第65図)

SD04の西で検出した南北に走る細い溝状遺構である。約16m分を調査した。北壁近くで合流する形になる。SD05は巾0.6~0.9m、深さ40cmの規模で、底レベルは標高3.90m前後になり、南北ほとんど変わらない。SD06は南側になると一部擾乱によって消失するが、南壁近くでわずかに底面が検出された。巾0.5~0.7m、深さは30cm程度と浅く、「U」字状の断面を呈す。底のレベルは標高3.95m前後と、南北ほとんど変わらない。南側の上層は擾乱により削平され、底面の一部が残る。

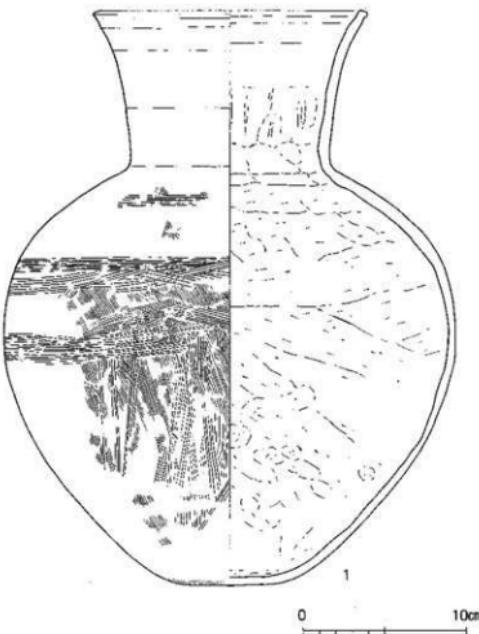
SD05が2又に分かれる東側の溝の上層からは古式土師器の壺が1個体出土している。口縁をやや下に

向けた状態で出土した。胴部が破損しているが、破片は体内に残っており、完形品の上部が押しつぶされたものと思われる。全体のプロポーションは神原神社古墳上器埋納坑出土の壺に類似している。

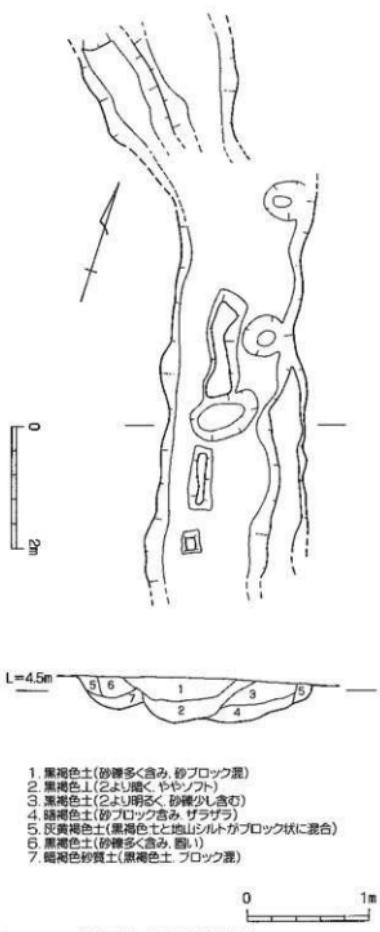
**出土遺物 (第66図)** 1の古式土師器の壺は、口径16.0cm、器高35.4cmを測る。直口の口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部に平坦面を持つが、神原神社古墳出土の壺程には張り出さない。体部は倒卵形を呈し、最大胴部径はやや上方に位置し、27.8cmを測る。径6.0cmを測る平底を成すが、正立はない。底面には刷毛目が残る。底部外面にはススが付着し黒変している。胎土は精緻な粘土を使用し、浅黄色を呈す。外面の調整は胴部上半が横方向、同下半は縦方向の刷毛目が施される。内面は頸部以下横方向の削り、底部に指頭痕が多く残る。また、胴部下半には指でなでつけたような痕が見られ、肩部内面の一部に指頭痕が認められる。調整法は外面と内面で対応しているようである。小谷2期に相当するものと考えられる。

#### SD07 (第67図)

SD03の西側で検出した幅広の浅い溝状遺構で、北に向かうと擾乱により消失する。約9m程の長さを検出し、南の調査区外へ続くものと思われる。北側の擾乱で消失する手前で、2筋になってやや西に屈曲する。巾2.0~2.5m、深さ20~40cmを測り、北の底レベルは標高4.4m、南の底レベルは



第66図 SD05出土遺物実測図(S=1:3)



第67図 SD07実測図  
 (遺構 S=1:80 土層 S=1:40)

#### SD10 (第69図)

調査区の中央部から南から北に向けて「く」の字に屈曲して走る溝状遺構である。SD08, 09を切って東西方向に走り、A4GrのSK05の北で方向を北西に向かって走る。巾0.8~1.2m、深さ約30cmを測り、「U」字状の断面を呈す。上面は後世にかなり削平されており実際はもっと深かつたと考えられる。南北方向はSD01, 02, SD08, 09, 14と同軸になる。底レベルは標高4.25m前後で南北変わりない。

古墳時代初頭の土器片が数点見られるが、いずれも混入と思われる。上層から須恵器の小型壺(71

4.2mと北から南へわずかに下っている。覆土には土師器の破片が少量含まれるのみで、時期は不明である。SA02のピットが掘り込まれている。

方向としては、N-15°-Wに走っており、これはSB04, SI01の軸に一致している。しかし、本調査区では同方向の溝状遺構は他に検出されていない。

#### SD08・09 (第68図)

調査区の中央で南北に並行して走る浅い溝状遺構である。

SD08は巾は0.8~1.6m、深さ10~40cmを測り、SD08, 09とも北側は後世の削平により細く浅くなる。北側の底レベルは4.35m、南側の底レベルは標高4.13mと、北から南へ向かって下る。

SD09は巾0.4~1.2m、深さ20~30cmを測る。底レベルは標高4.3m前後である。SD08から須恵器の壺底部(71-5)が出土している。底径8.8cmを測り、回転糸切り後無調整である。奈良・平安時代の溝状遺構と考えられる。

しかし、SD09からは上師器の破片がわずかに見られるのみで、時期を決定する資料に乏しい。SD01, 02と同軸方向に走る。SD08, 09の東にはSE04が掘られ、西にはSE05が掘られている。SE05の西、SA01の南側にあるSK07, 09も同時期の遺構と推察される。SD10の南北方向と同軸になるが、南側でSD10に切られる。

-1) と高台付き壺 (71-2) が、重なって出土している。7世紀後半から8世紀にかけてのものと思われる。奈良時代の区画的な溝と考えられる。このSD10で閉まれた内側には多数のピットを検出したが、再現できた建物はSB04のみであった。また、井戸と思われるSE05やSK07, 09があるが、これらはSD10よりやや時代が下るようである。

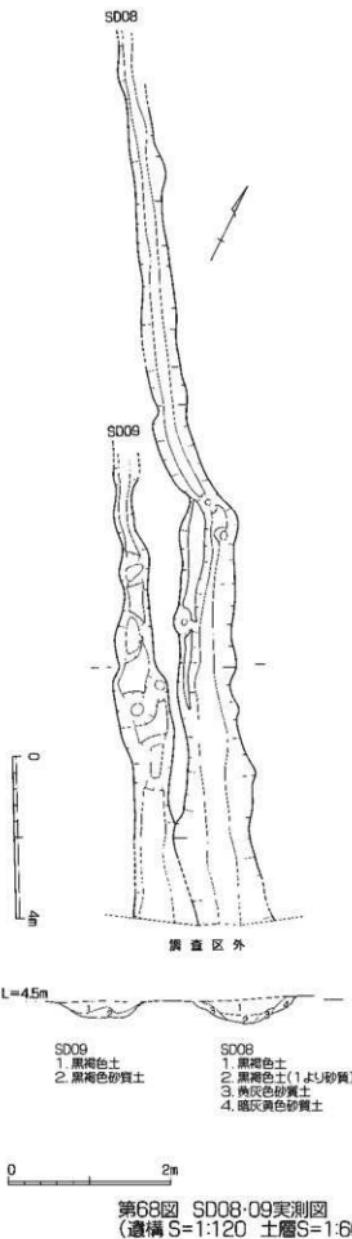
遺物は須恵器と土師器が出土している。71-1は須恵器の小型壺である。器壁の厚い体部は内湾して立ち上がり、口縁に至って薄くなる。底部はヘラ切り離し後、板状工具によってナデ調整される。71-2は高台付の須恵器壺で、体部はやや内湾気味に逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部は回転糸切り離し後、無調整。1は出雲6期、2は出雲7期に相当する。71-3はミニチュアの鼓形器台の脚部である。小谷2期に相当するものと思われ、径1cmの円形透かしが穿たれる。胎土は精製されたものであるが、在地産と考えられる。内面に赤色塗彩の痕跡が見られる。71-4は複合口縁の甕で、口縁端部は肥厚して面を作る。小谷2期に相当しよう。

#### SD11・12 (第70図)

11グリッドの地山がやや落ち込んでいる範囲で検出した細い溝状遺構、「C11G r 土器溜り」。「A, B11G r 土器溜り」をはさむ形で南北に走る。遺物はほとんどなく時期を断定しがたいが、SD12から砥石 (71-6) が1点出土している。SD05, 06と形態・方向が類似しているため、同時期の遺構の可能性が考えられる。層序から土器溜りより新しいものと考えられる。

SD12は巾0.6~1.3m、深さ30cm前後の規模で、断面は「U」字状を呈す。底レベルは、標高4.10mの北から3.90mの南に向かって下る。

SD11は巾0.7m、深さ30cmを測り、底レベル



第68図 SD08・09実測図  
(遺構 S=1:120 土層S=1:60)

の標高は3.78mで、南と北で高低差はない。SB01のピットに掘り込まれる。

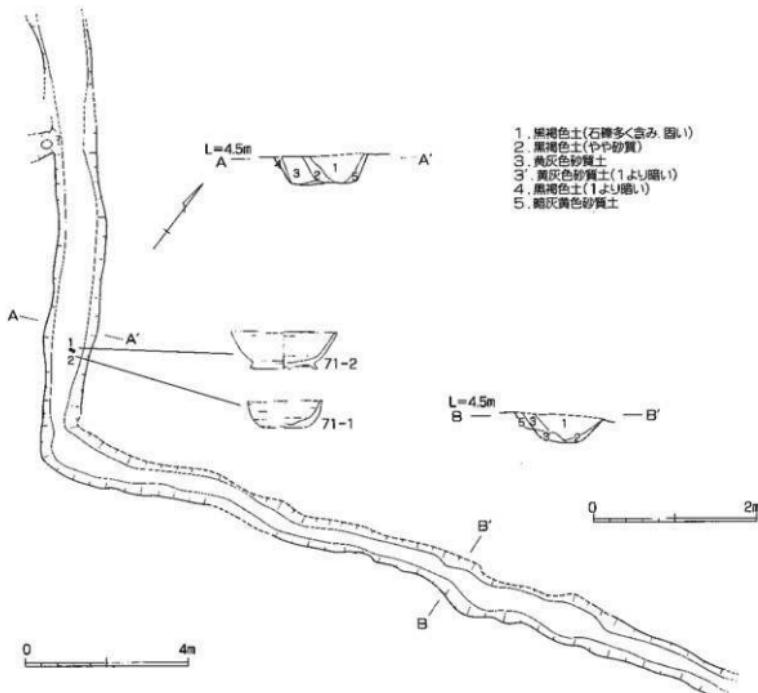
2つの構とも南側を擾乱により上面が削平され、底面のみが検出できた。

### SD13 (第72図)

C4. 5グリッドで検出した浅い遺構で、巾2.0m・深さ30cmを測る。断面は浅い皿状を呈す。東側は後世の削平により消失し、西側はSD10・SK10により切られている。南側の壁も一部擾乱により壊されているため、全体の規模・性格を把握しかねる。上坑とも考えられるが、東西方向に長く延びており、溝状遺構とした。

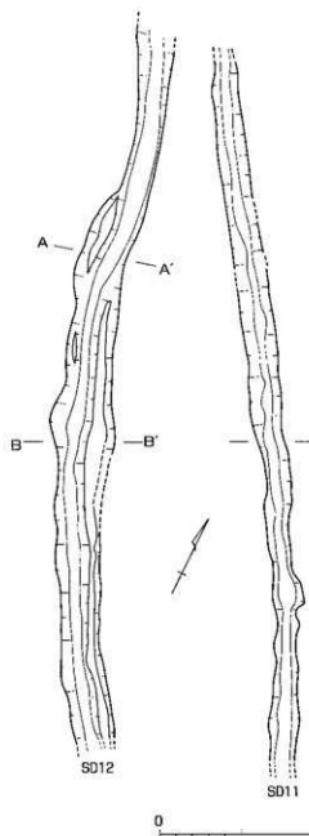
構の中央部で土師器の破片がやまとまって出土している。弥生時代終末から古墳時代前期前葉の土器で、その中には当地では出土例の少ない<sup>⑧</sup>ワイングラス状土器(73-5)も含まれている。出土遺物から、SD13は古墳時代前期前葉に埋没したものと考えられる。

SD03からは約17m西に位置している。この間に弥生時代の遺構は無く、同時期の遺構としては、SK03がSD13の南で検出されるのみである。



第69図 SD10実測図(遺構S=1:120 土層S=1:60)

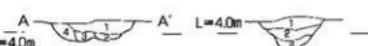
**出土遺物（第73図）** 1～3は複合口縁の壺で、1の口縁端部は外方へ弱く引き出し、2・3は引き出した端部に面を作るものである。いずれも草田7期に相当する。4は頸部から胴部にかけての土師器壺の破片で、外面はタテ刷毛目の後ヨコ方向の刷毛目調整が施される。5はワイングラス型の高環壺部である。内湾して立ち上がる体部は口縁に向かって器壁は薄くなり、端部に面を作る。口縁径11.3cmを測り、しっかりした作りである。外面の調整は下半部に横方向の細かなミガキ、中央部まではヨコミガキの後タテ方向のミガキが施される。内面は細かなヨコ刷毛目調整である。脚部を欠いているが、円盤充填法による刺突痕aが見られ、在地の土器と考えられる。形状としては丹後系の高壺に類似する。西谷4号墓出土のグラス型土器に似ているが時期が異なり、直接の関係は見いだせない。このほかに遺構外からやや小型のワイングラス型の土器（76-13）が1点出土している。6は鼓形器台の脚部片で、底径23.6cmを測る。7は高壺の脚部で、裾括がりに開くものである。精製された胎土で、畿内系高壺の流れを汲むものと考えられる。8は低脚壺の脚部である。9は扁平な円錐で、四方を打ち欠いて凹みを付けた痕があり、右鍤として使われたものと思われる。



#### SD14（第74図）

調査区の西端で検出した、浅い溝状遺構である。 $L=4.0m$  幅0.7m、深さ10cmを測る。南北方向に走り、その方向はSD08.09.10と同軸になる。部分的に擾乱を受けており、肩が不明なところがある。南側は擾乱を受けて消失する。

遺物は土師器片がわずかに見られ、製塙土器片（74-1）が出土している。口径12.4cmを測り、口



SD11  
1 黒褐色土(石礫含み、固い)  
2 緑褐色土(ややソフト)  
3 黒褐色粘質土(ややソフト)



SD12  
1 黒褐色土(ややソフト、粘性弱)  
2 緑褐色土(ソフト、粘性中)  
3 緑褐色土(ややソフト)  
4 反覆色土(ややソフト)

第74図 SD11・12実測図

(遺構 S=1:120 土層 S=1:60)

\*① 古志木郷遺跡・勝負遺跡などで出土している。山陰東部・北陸地方によく見られるカップ状土器の流れを汲むものか。

縁端部上面に櫛状の刻み目が見られる。奈良・平安時代の遺構と考えられるが、1点のみの遺物で、時期を決定する資料にはなり得ない。

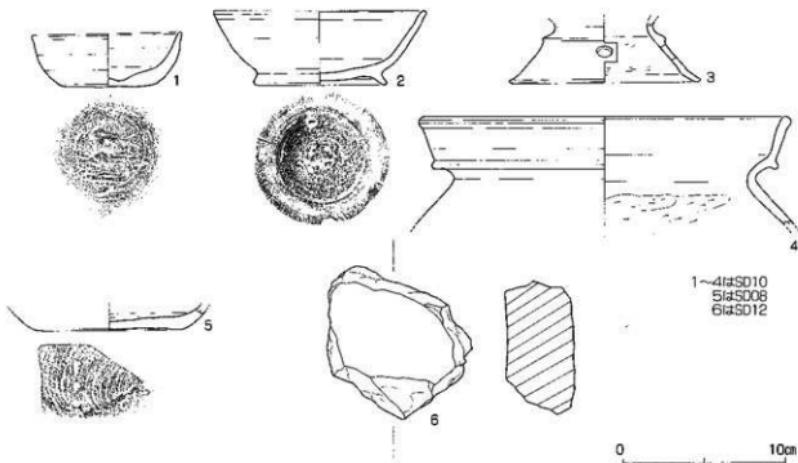
### SD16 (第75図)

SD03の東で検出。巾1.2~2.0m、深さ30cmと浅い溝状遺構である。断面は皿状を呈す。南側は攪乱により消失している。時期は土師器破片がわずかに出土するのみで断定できないが、北壁土層の鍵窓により、SD03の25・29層を振り込む形であるため、SD03の古段階より新しいと考えられる。新段階との切り合いは攪乱により不明なため、SD03の最終段階と同時期に存在していた可能性がある。その上には全5層が堆積しており、層序から考えるとSD03と同じ弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての溝と思われる。

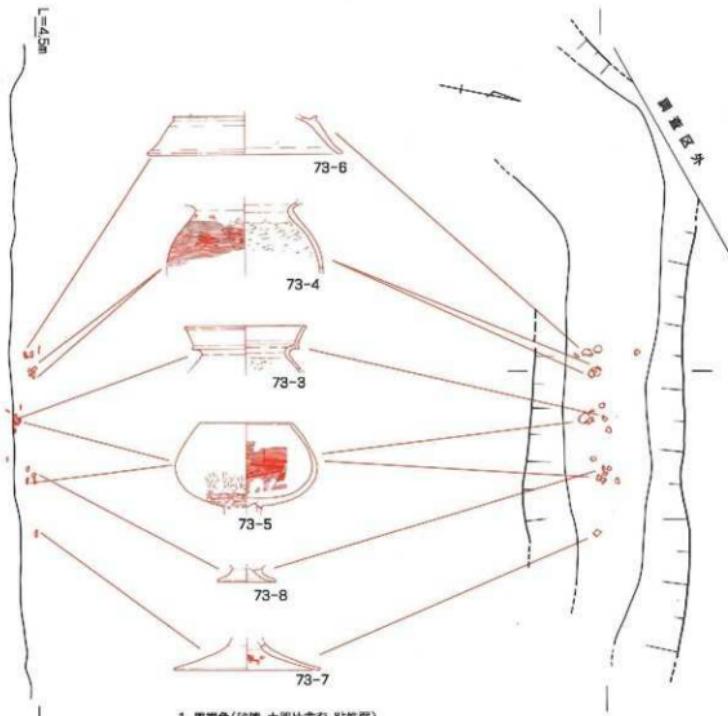
### 遺構外出土遺物 (第76~78図)

第76図1は塙町系の甕である。やや赤い黄褐色を呈し、在地産と考えられる。爪痕状の刺突文が、頸部と凹線で区画された肩部に施される。一部刺突文をナデ消した痕跡が見られる。口縁内面はヘラミガキ調整である。やや拡張した口縁には3条の弱い沈線が巡る。口縁の形状は松本IV-2様式に相応するが、内面の削りが頸部直下まで上がっていることから、中期後葉から後期前葉にかけてのものと考えられる。

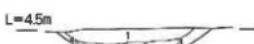
第76図2~6は複合口縁の甕である。2の口縁端部は外方に引き出した上面に平坦面を作る。腹は甘く、外面はヨコ刷毛目が施される。内面はヨコ削りの後で上げた痕が一部見られる。草田6期新段階に相当するものと考えられる。3の口縁端部は外方にやや丸みを持って屈曲する。器壁は厚く、体部は球形になるものと考えられる。胴部が最大になる外面には荒いヨコ刷毛目が、その上には細か



第71図 SD08-10-12出土遺物実測図(S=1:3)

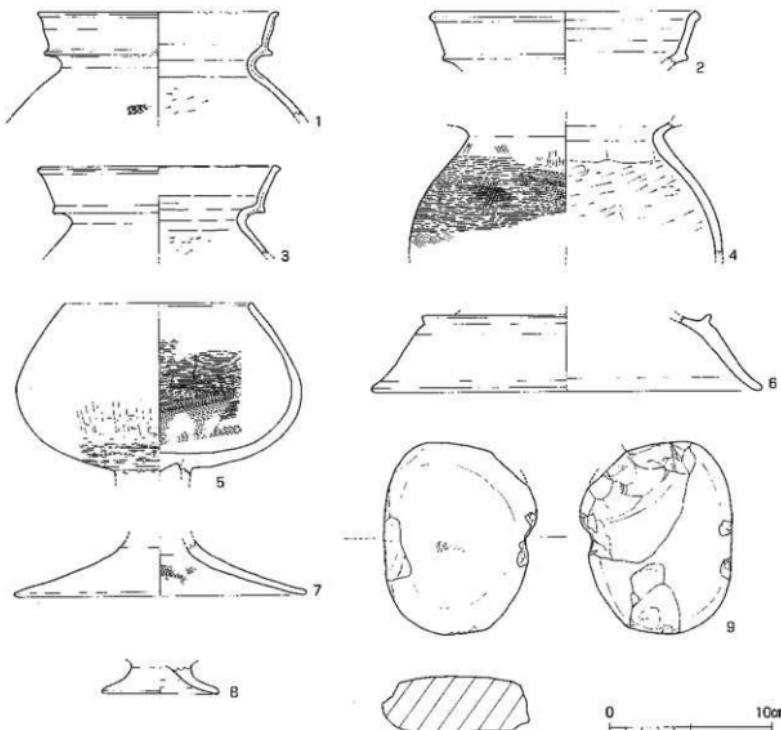


0 2m



第72図 SD13実測図(S=1:60)

なヨコ刷毛目が施される。4の口縁は棱の作りが甘く、強いヨコナデ痕が見られる。肩部に細かなヨコ刷毛目の上に櫛状工具による細い波状文が緩やかに巡る。内面の削りはやや下がった位置から始まり、肩部に指圧痕が認められる。この指圧痕は外面の波状文の位置に合致している。2、3は草田7期（小谷2期）に相当しよう。5は短く内傾する口縁の端部外側に面を持つものである。6は直立する口縁で、端部は5と同様外側に面を作る。肩部外面にはタテ方向の後ヨコ方向の刷毛目が施される。7は単純口縁の甕で、「く」の字状に開く口縁端部に面を持つ。布留1期段階のものと考えられる。8は底径3cmを測る、小型の甕または甕の底部である。外面にススが付着している。9は土師器の底部で、鉄鉢状の尖底を呈する。D11グリッドの5層が落ち込んだ包含層から出土しており、「C11G r 土器溜り」に近い。器壁は厚く、精製された明るい胎土で、硬質に焼成されている。内面には指圧痕が見られる。ナデ調整された外面に、半月状の細い線刻が描かれている。半月の一端は線が交差している。何らかの記号であろうか。このような土器は、出雲平野においては他に類例が無く、3、4世紀の韓式土器に類似した底部を見ることが出来る。10は外反して開く、直口甕の口縁部である。11は頸部から胴下半部までのもので、頸部の屈曲部に沈線が巡る。内外ともタテ方向の刷毛目調整で肩部内

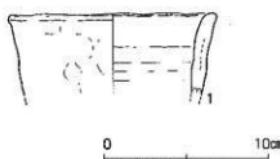
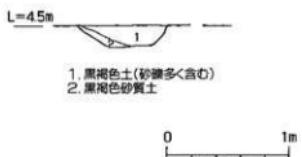
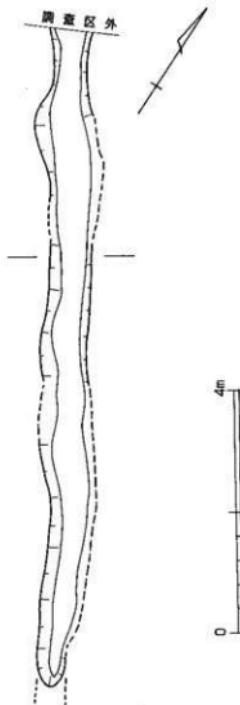


第73図 SD13出土遺物実測図(S=1:3)

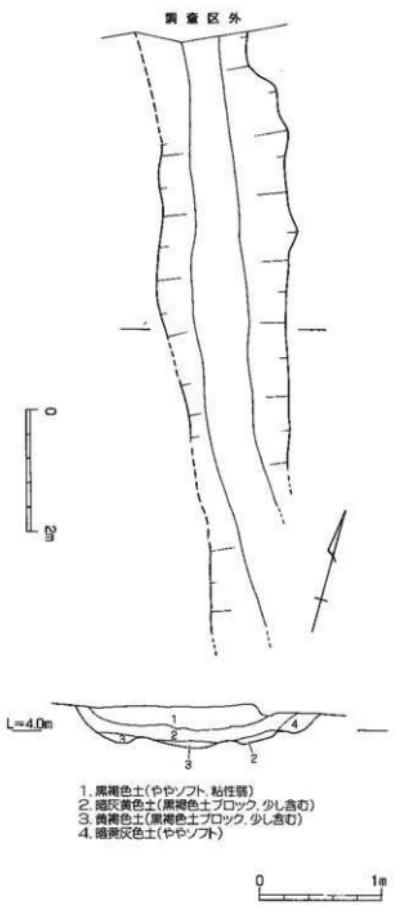
面には指圧痕が残る。弥生時代中期後葉の壺と思われる。12は丸く胴が張った小型の甕で、口縁部と底部を欠く。底部には接合痕があり、脚または台が付くものと考えられる。外面の調整は全体に細かなヘラミガキがかけられ、中心部に斜め方向の刷毛目が施される。一部ススが付着している。内面は削りに指圧痕が見られる。13はワイングラス型土器である。器壁は薄く口縁端部はやや上方に屈曲する。内外面とも風化が著しく、調整がはっきりしないが、内面上半部にはナデによる指圧痕が残る。底部を欠くが、脚が付く可能性が考えられる。類似する土器は、「山持川川岸遺跡土器群3」、「古志本郷遺跡C区SD16.17」、東出雲町の「勝負遺跡S105」、鹿島町の「南翠武草田遺跡」からも出土しており、本調査区においても、これよりやや大型のワイングラス型土器がSD13から出土している(73-5)。

第77図1は上部器の高杯である。杯部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は玉縁状に屈曲する。脚部外面にはタテ方向のミガキが施され、杯との接合は円盤充填法による。2~6は鼓形器台である。2は縦長の受部である。内外面ミガキ調整され、3は口縁端部を欠くが、開き気味の受部で、一部に赤色塗彩の痕が残る。口縁と筒部に擬回線文が巡る。2.3は松本V-2様式に相当する。4~6は古墳時代前期前葉に入るもので、5は厚い器壁で、胎土も赤いことから、搬入品の可能性がある。6は器高10cm未満の低い器台で、脚部に円形の透かしが四方に穿たれる。受部の内外面にはヘラミガキが施される。7は瓶型土器の突帯部分と思われる破片である。外面はヨコ刷毛目、内面は削りの後ナデが施される。突体部分にはナデの痕がよく残っている。8は壺または甕の取っ手である。ヘラ等で成形し、ナデつけられる。全体に赤色塗彩の痕が見られる。

第77図9~17は須恵器である。9~13は蓋で、9.10は擬宝珠状、11~13は輪状の摘みが付く。9は高広IV-B期に比定される。11は7世紀末から8世紀初めにかけてのものと思われ、他は概ね8世紀後半から9世紀前半の範疇に入るものと考えられる。14は口径11.5cmの返りを持つ小型の杯で、底部はヘラ切り離しである。15は内湾して立ち上



第74図 SD14実測図  
(遺構 S=1:80 遺物 S=1:3)

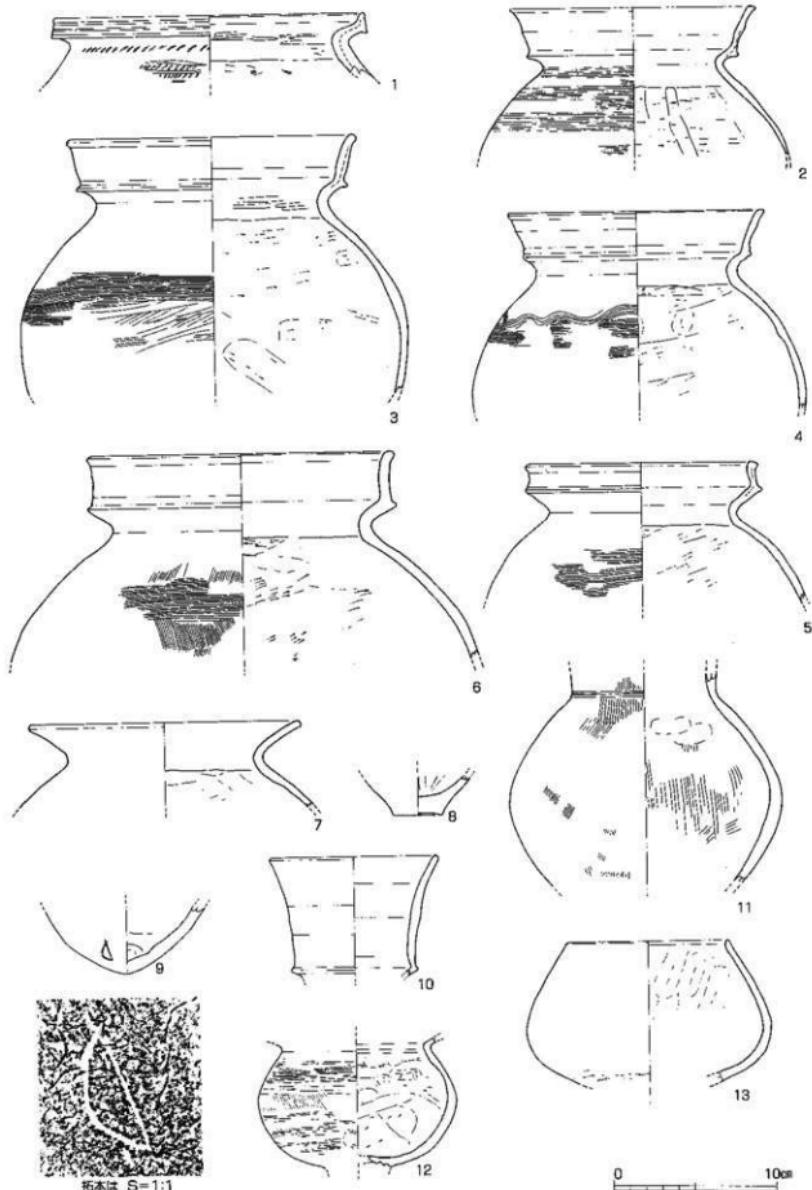


第75図 SD16実測図  
(遺構 S=1:80 土層 S=1:40)

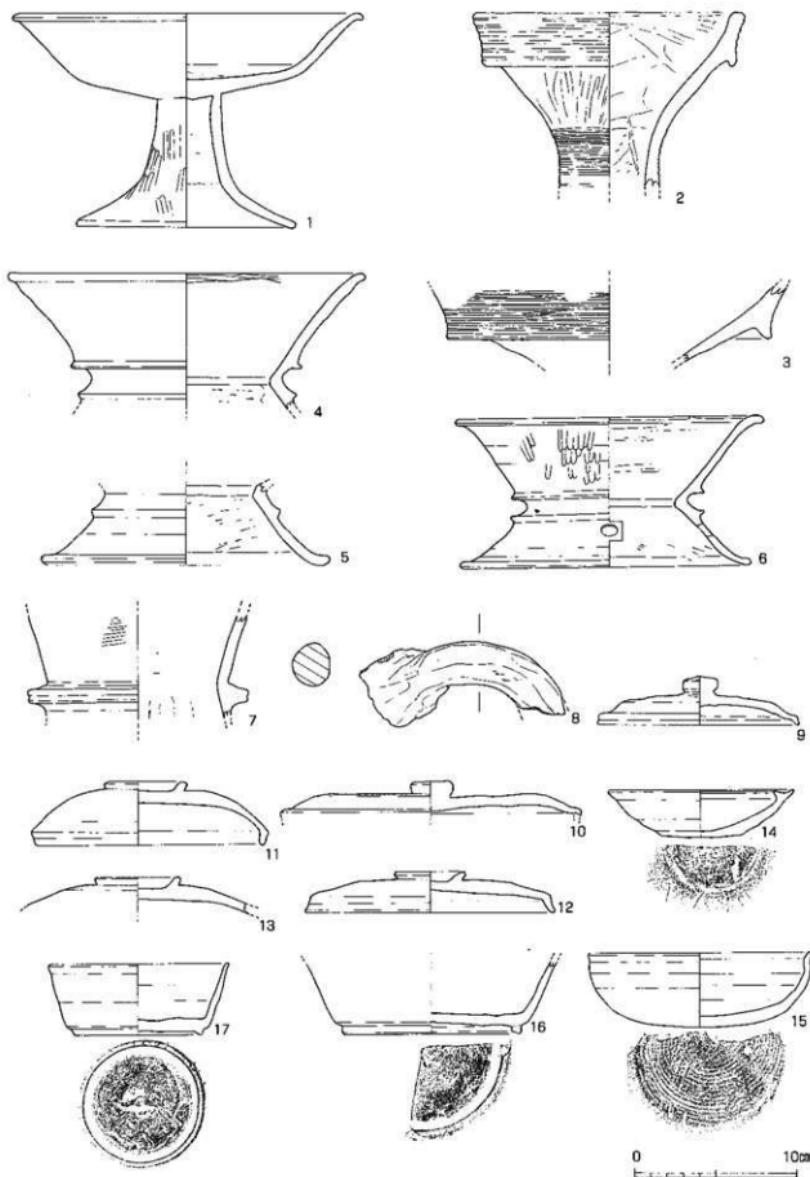
14は輪の羽口破片である。推定で径7.5cmになる。15は長さ7.1cm、幅2.6cmの鉄製品である。平釘の折れたものであろうか。16~18は砥石である。17は5面を使用している。きめ細かな材質で、仕上げ用の砥石と思われる。18は硬質な堆積岩を用いている。

がる体部で、口縁は小さく屈曲する。底部は回転糸切りである。14は7世紀中葉、15は8世紀中葉に相当しよう。16、17は高台の付く壺で、底部は回転糸切り離してある。9世紀前半に相当するものと考えられるが、16は石見系の所産と思われる。

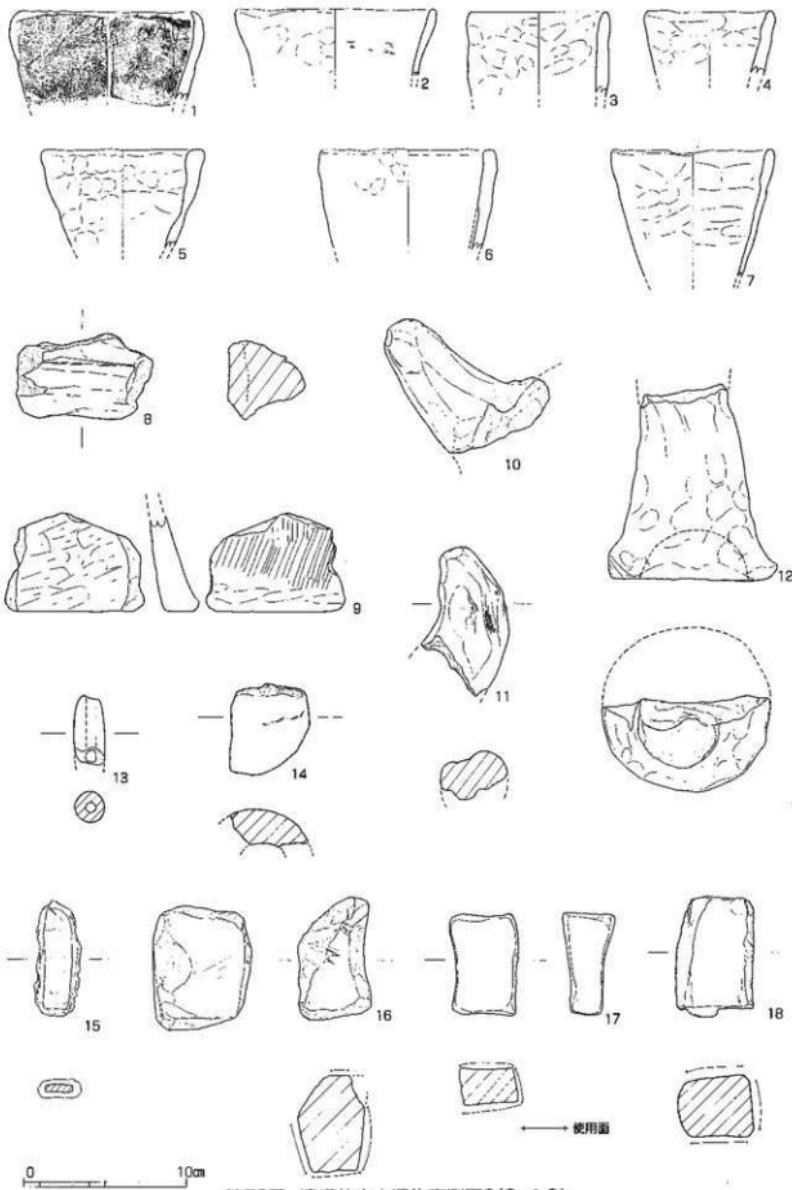
第78図1~7は製塩土器である。主に調査区の西側で出土している。破片のみで、ビニール袋(26cm×38cm)1袋分になる。1は口径11.5cmを測り、口縁端部は尖り気味に内湾する。外面には指圧痕が、内面には布目痕が残る。布目はきめ細かく、絹布を使用したものと思われる<sup>16</sup>。2は薄い器壁で、口縁端部を丸くおさめる。内面には指圧痕が見られず、布目をナデ消した可能性がある。3、4は口縁円端部を丸くおさめ、内外面ともナデ痕が顕著に見られる。3は胎土に小豆色の粒子を多く含む。5、6は口径10cm強を測り、口縁端部に平坦面を作る。7はやや尖り気味の口縁端部で、器壁が薄く、緻密な精製土を用いている。これらの製塩土器はいずれも底部を欠損しているが、砲弾状を呈する焼塩土器と考えられる。同様の製塩土器は第1~3次調査区においても検出している。8は厚さ5cm弱の土器破片である。断面は三角形を呈し、1面には削りが施される。移動式竈の底部分と思われる。9は破片であるが、移動式竈の底部と考えられる。外面にタテ刷毛目、内面は荒い削りが施される。10、11は土製支脚の受部、12は脚部で、底部は半円形に削り込んで成形される。13は径2cm弱を測る土錐である。



第76図 遺構外出土遺物実測図1(S=1:3)



第77図 遺構外出土遺物実測図2(S=1:3)



第78図 遺構外出土遺物実測図3(S=1/3)

## 第4章 まとめ

まず、遺跡の変遷を通して各時期の様相について、これまで調査された第1～3次調査区と併せて述べる。

### 弥生時代～古墳時代前期前葉（第79図）

この時期を遺物から見ると、松本IV-2様式の弥生時代中期後葉から松本V-1様式の後期初頭、草田1・2・3期の後期前葉から中葉、草田6・7期の終末から古墳時代前期前葉に大別される。草田5期の後期後葉はわずかに見られたが、草田4期の遺物は検出しなかった。また、中期後葉を過る遺物は検出しなかった。

遺構としては、中期後葉から後期前葉にかけて掘削された溝状遺構SD03・04がある。本調査区出土の中期後葉の遺物のほとんどはこの溝の下層で検出している。SD03と04はその後何回か掘り直されながら継続して機能し、いずれも古墳時代前期前葉に埋没している。特に、SD03は最終段階の古墳時代前期前葉の溝内中央に土器が一括廃棄され、その様相は古志本郷遺跡や天神遺跡の「環濠」と考えられる溝状遺構の出土状況に類似している。SD03の東側で同方向に走る浅い溝のSD16は擾乱に破壊された部分が多いが、SD03の掘り直し時に掘られ、埋まった跡ではないかと思われる。C11G r土器溜り、A・B11G r土器溜りは、古い遺物を含まず、ほとんどが小谷1・2期の遺物（3期に入るものも若干ある）ことから、SD03・04の最終段階と同時期と考えられる。位置的にはSD03と04の間であるが、上器の出土密度が低いSD03の北側であるDG rでは土器溜りはないことなどから、SD03に集中廃棄された遺物が流れ崩れて地山の落ち込んだ部分に溜まったとも考えられる。

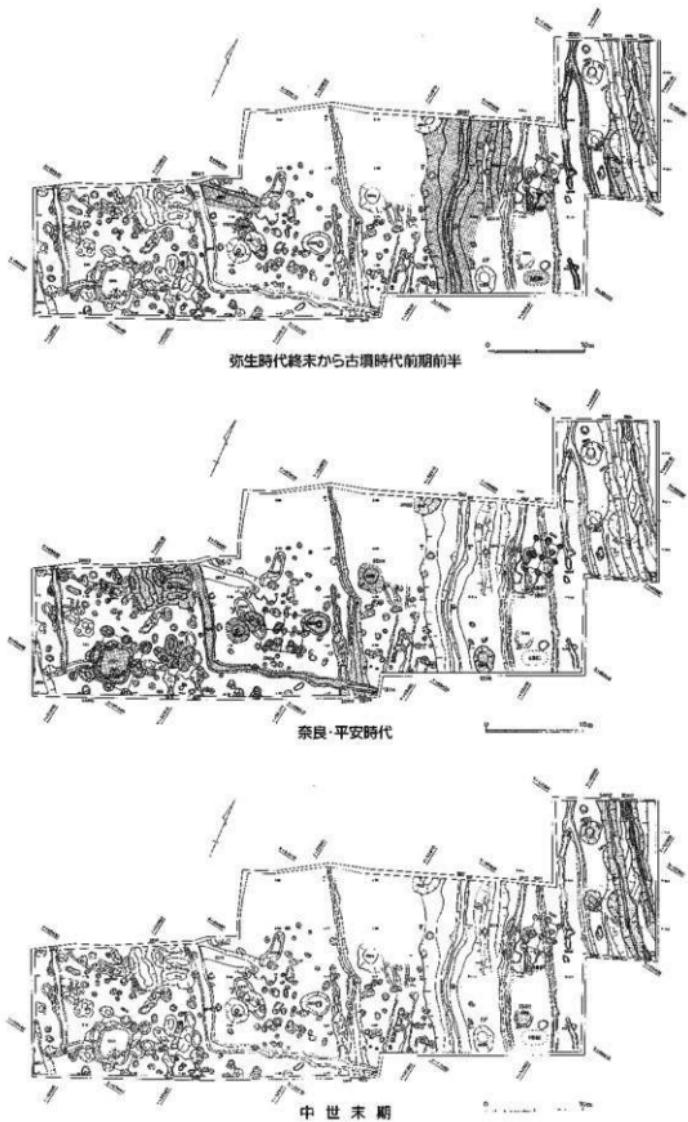
SD03と04の間には方向を同じくするSD05・06の細い溝が掘られている。SD05からは神原神社古墳土器埋納坑出土の壺に類似した土器（66-1）が出土しており、やはり前述の遺構同様古墳時代前期前葉にあたると考えられる。

調査区の西側で確認できた遺構はSK03（土坑）とSD13（溝状）のみである。いずれもほぼSD03・04の最終埋没時と同じ古墳時代前期前葉と考えられる。SK03からは後期前葉の土器（31-1）が完形で出土しており、上坑墓の可能性が考えられるが、古い遺構が掘り返されたものと思われる。他に当該期の遺構はなく、SD03より西は集落の外になる印象が強い。

### 奈良・平安時代（第79図）

古墳時代前期後半から後期の遺構は検出されず、第3次調査区で古墳時代後期の土坑SK18を検出したのみで、出雲平野の他の遺跡同様に集落の断絶が見られる。

SD10からは終末期の壺（71-1）が出土しているが、遺構としては奈良・平安時代に入るものである。溝は他にSD08・09があり、いずれも農業用水目的の溝と考えられる。この時期になつて本遺跡は再び盛隆期を迎えたと言え、第1～3次調査区同様遺物・遺構とも検出数が多くなる。



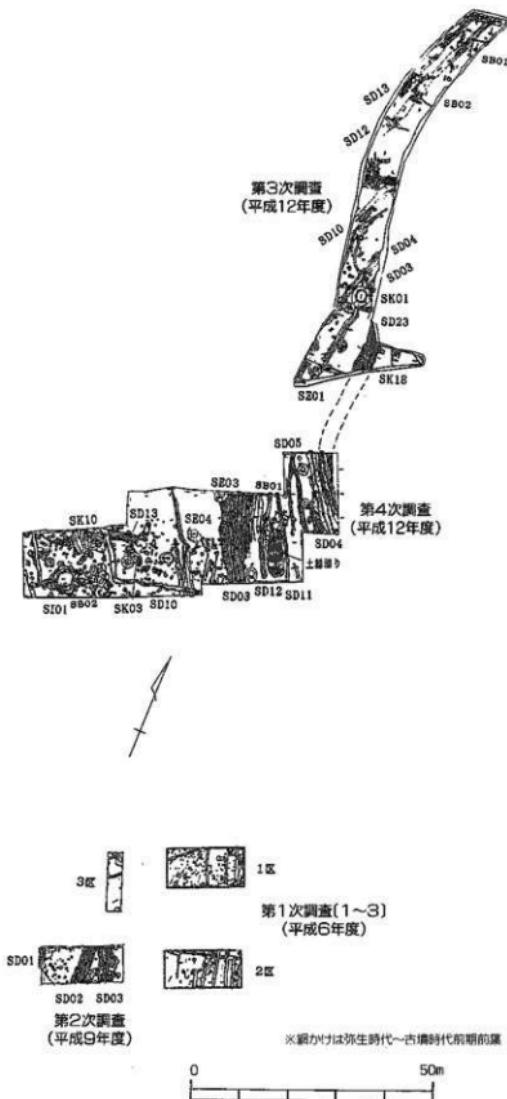
第79図 小山遺跡遺構変遷図(S=1:500)

調査区の中央部で井戸4基と3つの土坑を検出した。奈良時代にSE04, 05, 06が作られ、SK07が掘られている。その後、平安時代にかけてSE03とSK10が掘られている。廃棄坑と考えられるSK10からは、須恵器の皿や赤色塗彩された土師器の壺・皿、製塩土器などがまとめて出土しており、生活の豊裕さを感じさせる。

また、本調査区では4棟の掘立柱建物を検出したが、それらはすべてこの時期のものである。小型の柱穴のSB01とやや大型の柱穴を成すSB02は倉庫跡と考えられ、SK10と共存していたものと思われる。SI01はSB02との切り合いから、それよりやや下ってSB04と同時期にあたる。墨書き土器を出土する柱穴を持つSB03は、SK10より前に建てられたものと思われるがその時期差は少なく9世紀代と考えられる。その他建物にはなり得なかつたが、検出したほとんどのピットは概ね当該期に掘られたものと思われる。

#### 中世末（第79図）

10世紀以降、14世紀まで遺物・遺構とも検出されず、本遺跡では集落の衰退期であったのであろうか。藤小路西遺跡では朝山氏の居館跡に比定される遺物・遺構が確認されており、中心は他所へ移動した可能性も考えられる。



第80図 小山第3地点遺跡遺構配置図(S=1:1000)

15・16世紀代になって、生活の痕跡であるSE01, 02と素堀の井戸と考えられるSK02が現れる。これらの井戸は第3次調査区で検出した中世末の井戸と同じ地下水脈に沿って掘られている。SE02の後SD01, 02の並行する溝が掘られるが、いずれも農業用水用の溝と考えられる。当該期の建物跡は検出しなかったが、土坑墓ではないかと思われる不明遺構SX01がある。また、第3次調査区では区画溝が何本も掘られており、耕作地・居住区とも計画的な土地利用がなされていたと思われる。16世紀後半（近世）以降、明確な遺構はなく、埋土の様相から耕作地の状態が続いたものと考えられる。

### 小山遺跡第3地点遺構配置図（80図）

これまでの調査によって中心部の南北約200m間の様相が明らかになってきた。本遺跡におけるもつとも繁栄した時期は遺物・遺構の数から奈良・平安時代であるといえる。遺跡全域に展開しており、墨書き土器（第1・3・4次調査）やヘラ描き土器（第1次調査）などを出土することから官衙施設の存在を窺わせる。第4次調査区は遺構・遺物の検出密度の高さから、当該期の位置的中心にあたると考えられる。しかし、官衙に比定される明確な資料はなく、集落の範囲内にとどまるものと思われる。ただし、調査区の西側へ遺跡が展開することが推察され、その存在を考慮する必要がある。

本遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての環濠と思われる溝状遺構を合計6条検出している。その検出状況を表1に表した。

表1

溝状遺構	調査区	幅(m)	深さ(cm)	底標高(m)	時期
SD01	第2次	1.20以上	60~70	3.76	弥生時代後期前葉
SD02	第2次	2.40~3.00	70	3.84	弥生時代後期前葉
SD03	第2次	3.00	60	3.92	弥生時代中期後葉~後期前葉
SD23	第3次	3.30	80	3.74(日) 3.72(新)	弥生時代後期前葉 弥生時代終末~古墳時代前期前葉
SD03 (土器廃棄)	第4次	6.00	80~90	3.70(IR) 3.85(新)	弥生時代中期後葉~後期前葉 弥生時代終末~古墳時代前期前葉
SD04	第4次	2.70~3.50	75~80	3.60	弥生時代中期後葉~後期前葉 弥生時代終末~古墳時代前期前葉

これらの溝は、幅が第4次のSD03を除いて、幅・深さ・底レベルも同程度である（SD01は調査区隅での検出幅）。断面も逆台形で、環濠の様相を呈している。これらの溝のうちSD23（第3次）とSD04（第4次）は、規模・方向・時期ともに符合し、同じ溝と考えられる。SD23とSD04をつなげた溝とSD03（第4次）は平行して右にやや弧を描くように走っており、弧の内側になる第4次調査区の東側の微高地上に集落の中心が展開していたものと考えられる。

SD23（第3次）、SD03、04（第4次）とも、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて掘削されていることから、第2次調査区の溝と同時期に存在していたと考えられる。その後、第2次調査区のSD01, 02, 03は埋没したが、SD23（第3次）、SD03, 04（第4次）は、弥生時代終末から古墳時代初頭まで継続し、古墳時代前期前葉に廃棄されたものと思われる。あるいは、また、第3・4次調査区の溝（SD23・03・04）は旧溝段階では第2次調査区の溝とつながって

おり、後の掘り直しにより経路が変わった可能性も考えられる。

このように遺跡の形成の早い段階で数条の溝が掘削され、そのうちの何本かが掘り直され継続して使用され、しかも、古墳時代初頭ほぼ同時期に一樣に溝が廃棄され、終息していくという様相が、古志本郷遺跡・下古志遺跡・天神遺跡など、出雲平野の遺跡では共通して見られる。その理由については未だ不明であるが、そこには何らかの政治的・社会的原因が関わっているものと考えられる。

本遺跡より直線距離で約0.5km南に位置する蕨小路西遺跡では、旧自然河道から弥生時代前期の土器が出土しており、その初現は本遺跡よりかなり早い段階である。第3次調査区において古墳時代後期の土坑（SK18）の混入遺物としてではあるが、松本III-1様式の壺破片を1点検出しており、区域によっては中期中葉に遡る可能性もある。

四絡遺跡群の形成と発展は矢野遺跡を拠点として形作られたものであるが、初段階では点的に拡散し、密接に関わり合いながらもその発展には少なからず差異を持つと思われる。今後とも四絡遺跡群の形成については多方面からの調査が必要と思われる。

#### 参考文献一覧

- 田中義昭 「山雲市小山遺跡第1地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』 1992  
田中義昭他 「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書』 1989  
寺井 誠 「近畿地方の三韓系土器」『研究紀要』第4号 大阪市文化財協会 2001  
「古墳出現前後の縄半島系土器」『3・4世紀日韓土器の諸問題』茶山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会 2001  
近藤義郎編 「日本土器製造研究」 1994  
島根県教育委員会 「勝負遺跡・床堂古墳」『一般国道9号安来道路建設予定地内発掘調査報告書西区10』 1998  
島根県教育委員会 「古志本郷遺跡I」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI」 1999  
島根県教育委員会 「古志本郷遺跡II」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X1」 2001  
四絡郷土誌編集委員会 「四絡郷土誌」 1986  
山雲高校社会部 「発掘レポート紫苑」7号 1968  
出雲市教育委員会『市道四絡30号外1線道路改良工事に伴う小山遺跡第3地点発掘調査報告書(第3次発掘調査)』 2002  
  
註  
(1) 出雲考古学研究会 『古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡II』 1986  
(2) 出雲市教育委員会 『島根県立看護短大教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書』 1999  
(3) 出雲市教育委員会 『小山遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第6集』 1996  
(4) 島根県教育委員会 『藤原路西遺跡』『一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1999  
(5) 平石 充氏に解説していただいた。  
(6) 古墳時代前期前葉の編年は、松山智弘「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根古学会誌』 第17集 2000による。  
(7) 次山 浩「初期布留式土器群の西方展開—中国地方の事例から—」『古代』第103号 1997による。  
(8) 弥生時代中期後葉から後期前葉の編年は松本岩雄「出雲・隅岐地域」『弥生土器の様式と編年』 1992による。  
(9) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書—和田団地造成工事に伴う発掘調査—』 1984による。  
(10) 壱・甕の口縁形態と底部の調査については、上述(6)の文献を参考とし、その位置づけについては松山智弘氏よりご教示頂いた。  
(11) 弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての編年は、鹿島町教育委員会「南講武草出遺跡」『講武地区草出塚整備事業発掘調査報告書5』 1992と、中川 寿「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会』第13集 1996を参考とした。  
(12) 島根県教育委員会「三田谷I遺跡(Vol.2)」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』 2000  
(13) 出雲市教育委員会「大井谷II遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』 2001  
(14) 内田律雄氏のご教示による。  
(15) 羽木伸幸氏のご教示による。

出土遺物觀察表（土器）

浮団 番号	国版	出土地点	種別	器 体	寸法(単位:cm)			形態・器類の特徴	色 滅	新 上	備 考
					口徑	底径	脚高				
7-1	23	SI01	須恵器	坪	10.6	8.2	2.7	回転系切り 回転ナデ	灰色		
7-2	23	SI01	須恵器	坪	12.0	8.8	4.6	回転系切り後、ナデ 回転ナデ	灰色		
7-3	23	SI01	須恵器 (底部)	坪	16.2	8.3		回転ナデ	灰色	微砂粒含む	高台村
7-4	23	SI01	土師器	坪	11.8	7.3	3.6	回転ナデ	外／褐色 内／明赤褐色	密	赤色迷彩
7-5	23	SI01	土師器	坪			33.2	外／灰褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む		葉部にスス
7-6	23	SI01	土師器	坪	28.7			外／灰褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む		
7-8	23	SI01	弥生土器 (底部)	坪	22.0			口縁に4条の輪凹線	にぶい黄褐色	微砂粒若干含む	赤色迷彩
11-1	24	SB02-P2	須恵器	坪	13.2			回転ナデ	青灰色	密	
11-2	24	SB01-P1	土師器	坪	12.1			回転ナデ	明赤褐色	密	赤色迷彩
13-1	37	SB02-P2	+鉢器 (底部)	坪		8.2		条切り後、ナデ	外／褐色 内／明赤褐色	密	赤色迷彩 墨書き
13-2		SB02	土師器	脚轍上器				削平痕、ナデ	青灰色	密、1mm以下の 砂粒を少し含む	
16-1	23	P0422	土師器 (底部)	坪		11.3		ナデ 辺込みに擦撻状の胸巻き繪文	褐色	密	赤色迷彩 墨文
17-1	23	P0202	土師器	壺							
17-2	24	P0514	土師器	壺	26.5			ナデ 内／刷毛目	外／黄褐色 内／褐色	砂粒含む	
17-3	24	P0225	+鉢器	坪	11.8		3.2	回転ナデ	褐色	密、	赤色迷彩
18-1	24	SE01	+鉢器	皿	15.5			回転ナデ	外／明赤褐色 内／にぶい茶褐色	密	高台村
20-1	24	SE02	土師器	甕	13.0			外／刷毛目、肩部に瘤突文 内／削り	外／にぶい黄褐色 内／浅黄褐色	微砂粒多く含む	
20-2	24	SE02	土師器	甕	16.1			ナデ 内／削り	外／にぶい褐色 内／にぶい黄褐色	半斜口縁	
20-3	24	SE02	土師器	甕	15.7			ナデ 内／削り	にぶい黄褐色	微砂粒含む	單純口縁 布留式系
23-1	24	SH04	須恵器	壺	17.4		2.3	回転ナデ	灰色	密	微砂粒少含む
23-2	24	SH04	土師器	甕	22.6			外／刷毛目 内／削り	にぶい褐色	微砂粒含む	
23-3	24	SH04	+鉢器 (底部)	甕				ナデ	外／にぶい黄褐色 内／褐色	微砂粒含む	
25-1		SH06	須恵器	壺 (破片)				平坦な口縁で、小さな返りが付 く	灰色	密	
25-2	24	SH06	+鉢器	皿		5.9		回転系切り	深褐色	微砂粒含む。	
27-1	25	SX01	+鉢器	小皿	10.9	5.8	2.5	回転系切り 輪廓成形ナデ	茶褐色	新製上	
27-2	25	SX01	+鉢器	小皿	7.6	4.4	2.1	回転系切り 輪廓成形ナデ	淡褐色	新製上	
27-3	25	SX01	+鉢器	小皿	7.5	4.2	1.9	回転系切り 輪廓成形ナデ	淡褐色	新製土	
27-4	25	SX01	土師器	小皿	7.8	4.3	2.1	回転系切り 輪廓成形ナデ	淡褐色	新製土	
31-1	25	SK03	弥生土器	坪	9.6	5.6	9.5	口縁に2条の環凹線。 外／ヘラミガキ、2条の沈線の 間に刻美刃点文が造る 内／脚部以下削り	黑色	微砂粒含む	松本V-1 脚部に穿孔
31-2	25	SK03	弥生土器 (底部)	坪		5.5		外／刷毛目 内／削り	外／灰褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む	
31-3	25	SK03	土師器	甕	15.7			ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒少含む	
31-4	25	SK03	土師器	甕	23.3			外／刷毛目 内／削り	外／褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む	布留式系
35-1	26	SK07	弥生土器	甕	13.8			口縁に3条の輪凹線 外／刷毛目 内／ヘラ削り	にぶい黄褐色	微砂粒少含む	

探査番号	開拓	山土地点	種別	器種	法蓋(単位:cm)			形態・調査の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	高さ				
35-2	26	SK07	弥生土器	壺	12.0			口縁に3条の鋸凹線	よい黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石・重丹)	スス付着
35-3	26	SK07	弥生土器	壺	19.8			口縁に3条の鋸凹線 内へラ削り	よい黄褐色	微砂粒多く含む	
35-4	26	SK07	弥生土器	壺	20.0			口縁に4条の鋸凹線 内へラ削り	淡黄褐色	微砂粒含む	スス付着
35-5	26	SK07	土師器	环(底部)	12.5			ナデ・粗圧痕	外・褐色 内・よい褐色	密	赤色塗彩
35-6	26	SK07	土師器	环(底部)	13.4			糸切り砸し後、へら等でナデ	外・よい暗褐色 内・褐色	密	赤色塗彩
38-1	25	SK09	須恵器	壺(口縁破片)	14.5			刮削ナデ	灰色	密	一部自然釉
38-2	25	SK09	須恵器	环	9.0			刮削糸切り 刮削ナデ	灰色	密	スス付着
40-1	26	SK10	須恵器	壺	17.0			天井部刮削剥り 刮削ナデ	灰色	密	
40-2	26	SK10 落ち込み4	須恵器	壺	13.4			刮削ナデ	灰色	密 微砂粒若干含む	
40-3	27	SK10	須恵器	环	16.2	11.3	6.1	刮削糸切り 刮削ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付 底部に「x」印の 種別
40-4	27	SK10	須恵器	环	18.5	14.6	3.0	自転糸切り砸し後、ナデ 刮削ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付
40-5	27	SK10	須恵器	环(底部)	17.8	13.2	3.1	刮削糸切り後ナデ 刮削ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付
40-6	26	SK10	須恵器	壺	20.5			刮削糸切り 刮削ナデ	灰色	密	高台付
40-7	26	SK10	須恵器	壺	20.5			外・敲き 内・円形当て具 口縁落・刮削ナデ	褐色	密 微砂粒若干含む	
40-8	26	SK10	須恵器	环(底部)				外・平行削き後、削りカキメ 内・円形当て具	灰色	密	
40-9	28	SK10 落ち込み2	土師器	环	11.6	7.0	3.6	刮削ナデ 輪轉成形	褐色	密	赤色塗彩
40-10	28	SK10	土師器	环	12.0	9.3	3.6	刮削ナデ・輪轉成形 底面に板状工具によるナデ	淡褐色	密	赤色塗彩
40-11	27	SK10 落ち込み3	土師器	环	13.9	9.4	3.3	刮削ナデ・輪轉成形 刮削糸切り後ナデ	褐色	密	赤色塗彩
40-12	28	SK10	土師器	环	10.7	8.2	3.6	刮削ナデ・輪轉成形 底面に板状工具によるナデ	褐色	密	赤色塗彩
40-13	27	SK10	土師器	环	12.6	8.0	3.6	刮削糸切り後ナデ・捺压痕 輪轉成形	明赤褐色	密 微砂粒少し含む	赤色塗彩
40-14	27	SK10 落ち込み3	土師器	环	12.2	9.0	3.4	刮削糸切り後ナデ 内・擦り削毛目	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-15	27	SK10	土師器	环	12.0	7.5	3.6	刮削ナデ 底面に捺压痕	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-16	27	SK10 落ち込み1	土師器	环	12.0	8.2	3.6	刮削糸切り後ナデ 底面に板状工具によるナデ	褐色	密	赤色塗彩
40-17	28	SK10	土師器	环	12.3	8.5	3.7	刮削糸切り後ナデ 輪轉成形	明赤褐色	密 微砂粒若干含む	赤色塗彩
40-18	27	SK10	土師器	环	12.8	8.6	3.5	刮削糸切り後ナデ・捺压痕 輪轉成形	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-19	27	SK10 落ち込み1	土師器	环	12.2	8.4	3.3	刮削ナデ・輪轉成形 底面なでつけ	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-20	28	SK10	土師器	环(破片)			3.8	刮削ナデ	橙褐色	密	高台付 赤色塗彩
40-21	28	SK10 落ち込み1	土師器	壺	13.6	10.6	2.4	刮削ナデ	褐色	密	赤色塗彩
40-22	28	SK10 落ち込み1	土師器	壺	13.1	10.0	2.1	刮削ナデ	褐色	密	赤色塗彩
40-23	27	SK10	土師器	壺	13.4	10.3	2.0	刮削ナデ 底面に板状工具によるナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-24	28	SK10	土師器	壺	13.6	9.6	2.4	刮削ナデ	橙褐色	密	赤色塗彩
40-25	28	SK10	土師器	壺	17.6	13.0	2.7	刮削ナデ	淡橙褐色	密	貼付高台付 赤色塗彩
41-1	28	SK10	土師器	壺	33.0			外・斜め削毛目 内・横削り	褐色	やや粗 微砂粒多く含む	

押出番号	図版	出土地点	種別	形質	法數(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	施土	備考
					上径	底径	高さ				
41-2	28	SK10	土師器	甕	19.7			外／荒い刷毛目 内／横刷り	外／にぶい褐色 内／浅黄色	微砂粒多く含む (黄母・灰石)	
41-3	28	SK10	土師器	製塙土器	11.4			外／指圧痕 内／横ナデ, 帽目?	淡黄褐色 一部銀色	精製土	口縁端部尖る
41-4	28	SK10	土師器	製塙土器	11.3			外／指圧痕 内／横ナデ	外／褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む	口縁端部丸み
41-5	28	SK10	土師器	製塙土器	13.3			外／指圧痕, ひび割れ 内／張・横ナデ	にぶい褐色	精製土	口縁端部に面
41-6	28	SK10	土師器	製塙土器	11.2			外／ナデ, ひび割れ 内／横ナデ	にぶい褐色	精製土 微砂粒者含む	口縁端部に面
41-7	28	SK10	土師器	製塙土器	15.6			外／指圧痕 内／横ナデ	にぶい褐色	精製土 小豆色粒子含む	口縁端部に面 41-8と同
41-8	28	SK10	土師器	製塙土器	13.5			ナデ	外／にぶい褐色 内／浅黄色	精製土 小豆色粒子含む	口縁端部に面 41-7と同一
41-9	28	SK10	土師器	製塙土器	10.0			外／横ナデ 内／ナデ	外／灰黄色 内／にぶい褐色	精製土 微砂粒少し含む	口縁端部丸み
43-1	29	C11Gr 土器裏	土師器	複合口縁 組合せ	23.0			口縁端部は外方に引き出す。内 面に角ナデ痕、内面上半部は横 刷り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	腹部に有輪羽状 文
43-2	29	C11Gr 土器裏	土師器	複合口縁 組合せ	23.8			口縁端部は玉筋状、隔壁厚い 外／横刷り、指圧痕	外／浅黄色 内／黄褐色	微砂粒多く含む (石英・灰石・骨 母)	腹部に有輪羽状 文
43-3	29	C11Gr 土器裏	土師器	複合口縁 組合せ	25.0			口縁端部は玉筋状、隔壁内面に 指ナデ痕、内／横刷り	外／浅黃褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒含む (石英・灰石・骨 母)	腹部に有輪羽状 文 肩部に刻文
43-4	29	C11Gr 土器裏	土師器	複合口縁 組合せ	23.3			口縁端部は外方に剥落、隔壁内 面に指ナデ痕、 外／横刷り後剥落毛目	外／にぶい黃褐色 内／灰白色	微砂粒多く含む (石英・灰石・骨 母)	腹部に有輪羽状 文
43-5	30	C11Gr 土器裏	土師器	複合口縁 組合せ	18.3			口縁端部は外方に剥落、隔壁内 面に指ナデ痕、隔壁厚い	にぶい黃褐色	微砂粒若干含む	
44-1	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	16.3			口縁端部に隔壁面、ヨコナデ、 内／横刷り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石英・灰石)	
44-2	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.9			口縁端部に平削面、隔壁厚い 内／横刷り	外／にぶい黃褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む	スス付着
44-3	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	13.4			口縁端部に平削面 内／横刷り	外／浅黃褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む	肩部に波状文、 剝失点文
44-4	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.0			口縁端部に平削面、隔壁厚い 内／横刷り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石英・灰石)	肩部に剥失点文
44-5	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	15.0			口縁端部に平削面、隔壁厚い 外／ノコ半削痕毛目、下半は刷 毛目	外／浅黃褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	肩部に剝失点文
44-6	29	C11Gr 土器裏	土師器	甕	15.6			口縁端部に平削面、 内／無い削り	浅黃褐色	微砂粒含む	スス付着
44-7	29	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.4			口縁端部に平削面、隔壁厚い 内／削り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	
44-8	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.8			外／横刷り毛目削痕毛目 内／横刷り	浅黃褐色	微砂粒多く含む	スス付着
44-9	29	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.0			外／横刷毛目 内／横刷り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	
44-10	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	13.4			外／横刷毛目 内／削り	外／にぶい褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	スス付着
44-11	29	C11Gr 土器裏	土師器	甕	15.0			口縁端部は外に引き出す 内／横刷り、隔壁厚い	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	
45-1	29	C11Gr 土器裏	土師器	甕	18.0			外／横刷毛目 内／横刷り	外／褐色 内／浅黃褐色	微砂粒多く含む	
45-2	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	19.3			外／横刷毛目 内／横刷り	にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	
45-3	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	17.5			外／上半は横、下半は刷毛 目 内／横刷り、指圧痕	浅黃褐色	微砂粒多く含む	スス付着
45-4	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	17.2			外／底部縱刷毛目、底部横刷毛 目 内／横刷り、指ナデ痕	にぶい褐色	微砂粒多く含む	スス付着
45-5	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	23.2			外／刷毛目 内／削り、隔壁厚い	外／にぶい褐色 内／灰黄色	微砂粒多く含む (石英・灰石)	
45-6	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕	14.5			器底が少しだけ凹様 内／横刷り	浅黃褐色	微砂粒多く含む (石英・灰石)	
45-7	30	C11Gr 土器裏	土師器	甕	13.2			口縁が強いナデ、隔壁厚い 外／横・横刷毛目、 内／削り、指圧痕	外／浅黃褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒多く含む	肩部に未拉削 突文
45-8	31	C11Gr 土器裏	土師器	甕or鉢 (底部)		10.0		外／刷毛目、器壁薄い 内／削り、指圧痕	浅黃褐色	微砂粒含む	

種 番 号	固版	山上地点	標 別	高 度	法量(単位:cm)			形態・調査の特徴	色 調	崩 七	備 考
					上径	芯径	高さ				
46-1	30	C11Gr 土壌腐り	土師器	深	16.0			口縫端部を上方に引き上げる 内/横割り、ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む	布留美系 スス付着
46-2	30	C11Gr 土壌腐り	土師器	奥	16.5			口縫端部は平坦面 外/縦毛目	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む	布留美系
46-3	31	C11Gr 土壌腐り	土師器	奥	16.5			口縫端部は平坦面 外/縦毛目	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	布留美系 スス付着
46-4	31	C11Gr 土壌腐り	土師器	底口象	10.8			外/縦ミガキ 内/ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
46-5	30	C11Gr 土壌腐り	土師器	高坪	20.0			内/縦ミガキ 脚外/縦ミガキ	外/黄褐色	微砂粒含む	刺突風
46-6	31	C11Gr 土壌腐り	土師器	高坪 (坪面)	22.6			外/タテ縞毛目、ミガキ 内/ミガキ	灰黃褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	刺突風
46-7	31	C11Gr 土壌腐り	七郎器	高坪		13.4		坪部/ミガキ 脚部外/縦毛目 内/削り、ハケ	外/にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	
46-8	30	C11Gr 土壌腐り	土師器	高坪 (底部)				外/ナデ、朝毛山 内/粗圧痕	外/暗褐色 内/淡黃褐色	微砂粒多く含む	4方に円形窪か し
46-9	31	C11Gr 土壌腐り	土師器	低脚耳	19.4	7.6	5.4	ナデ	外/にぶい黄褐色 内/淡黃褐色	微砂粒多く含む	
46-10	32	C11Gr 土壌腐り	土師器	袋型臺	20.4	18.2	13.1	ナデ、溝縫厚い 脚内/削り	暗色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
46-11	32	C11Gr 土壌腐り	土師器	袋型臺	19.2	15.0	9.7	ナデ、溝縫厚い 脚内/削り	にぶい暗色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
48-1	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	16.5			口縫端部は不規則状 内/横割り、泥混厚い	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田6新
48-2	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	16.7			口縫端部は直線状 内/横割り、泥混薄い	にぶい暗色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田6新
48-3		A.B11Gr 土壌腐り	土師器	小型泡	12.8			口縫は直/ダレ気味、指圧痕 外/上半は横、下半は縦の刷毛 目	にぶい暗色	微砂粒多く含む (石英・長石、黒 豆)	
48-4	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	15.2			外/横割毛目 内/横割り	暗黃褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	小谷1
48-5	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	13.0			口縫は肥厚し、外側に歯を均 つ、内面側に指圧痕、泥混厚い	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	小谷2
48-6	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	16.8			外/横割毛目、泥混厚い 内/横割り、ナデ	暗黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	糸井列立文 (周邊付)
48-7	32	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	泡	15.5			外/横割毛目、泥混厚い 内/横割り	暗黃褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
48-8	33	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	袋型臺	17.8	16.8	9.8	外/受部 内/ナデ 脚内/削り	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	脚内に2条のヘ ラ彫り
48-9	33	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	大盤高坪	27.4	19.3	15.8	坪部ナデ、低く開く/脚外側は堅 毛目、内面は削り、泥混厚い	明黃褐色	微砂粒含む	刺突風 有段
48-10	33	A.B11Gr 土壌腐り	土師器	小皿	7.8	4.5	2.1	凹輪糸切り 微彫成形	淡黃褐色	精製土	S X 0 1からの 混入
50-1	51	SD01	赤生土器	泡	27.7			外/堅毛目 内/ヘラ彫り	暗色	微砂粒多く含む	山腰に4条の輪 凹線、スス
50-2	51	SD01	須彌器	坪		9.6		凹輪糸切り 凹輪ナデ	灰色	密	高台付 外輪ラフ記号
50-3	51	SD01	須彌器	灯明皿	10.0	6.0	2.8	凹輪糸切り後ナデ 凹輪ナデ	黄褐色	密	
50-4	51	SD01	粉青沙器	皿	9.5	3.7	2.8	見込みに4ヶ所の体留め やや破れた仕上げ	暗青褐色	密	李氏 粉青系薄い
51-1	51	SD02	七郎器	盤	14.2			外/上半は横、下下は縦の刷毛 目 内/削り、一部指圧痕	外/にぶい黄褐色 内/淡黃色	微砂粒多く含む	肩部に刺突列点 文
51-2	51	SD02	土師器	盤	18.4			外/縱縫毛目 内/横削り	外/黃褐色 内/にぶい黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)	布留美系
51-3	51	SD02	七郎器	盤	18.9			外/ナデ 内/横削り	外/にぶい黄褐色 内/淡黃褐色	微砂粒多く含む	布留美系
51-4	51	SD02	七郎器	盤	20.0			口縫端部は平坦面	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	布留美系
51-5		SD02	土師器	床	16.9			外/ナデ 内/横削り	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	布留美系
51-6	51	SD02	土師器	皿 (底部)		15.2		凹輪糸切り後ナデ 凹輪ナデ	暗色	密	高台付
51-7	51	SD02	須彌器	椎合部				凹輪ナデ	灰色	密	

標記番号	開拓	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・病害の特徴	色調	形状	備考
					口径	底径	體高				
51-8	51	SD02	白磁	碗 (底部)		14.6		断面と高台に周目、刃物状の 研ぎ削	灰白色	窄	李明 鉄石に使用
54-1	34	SD03	男生土器	壺	15.8			ラッパ状に開く口部に5条の 凹縫 内外ノ縫合目	灰黄色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	松本IV-2
54-2	34	SD03	男生土器	壺	19.4			口縫に4条の腰凹縫 内ノ縫合部下割り	褐色	微砂粒含む	松本V-1
54-3	33	SD03	男生土器	壺	21.2			口縫に4条の腰凹縫 内ノ縫合部下割り	褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	松本V-1
54-4	33	SD03	土器部	発合口器 鉢底部	10.6			口縫端部に環、腹部内面にな でつけ痕	灰白色	微砂粒含む (石灰-長石)	腹部に輪羽状 文
54-5	33	SD03	土器部	複合口器 鉢底部	22.9			外ノ上平は横、下平は腹の斜毛 目 内ノ削り後一部ナゲ、颈部に指 付痕	浅黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石-剪 跡)	腹部に刻状文 下に虎躍
54-6	34	SD03	土器部	(口底部)	9.2			無縫、内圓下部削り、休部は要 るか、ナゲ	にぶい褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	
54-7	34	SD03	男生土器	壺	16.2			外ノ鋸削毛目 内ノ上平部削損、下平部削り	浅褐色	微砂粒少し含む	柳井判美文 松本IV-2
54-8	34	SD03	男生土器	壺				外ノ鋸削毛目 内ノ上平部削損、下平部削り	にぶい黄褐色	微砂粒含む	柳井判美文 松本IV-2
54-9	34	SD03	男生土器	壺	13.4			外ノナゲ、 内ノ削り口縫ミガキ	明褐色	微砂粒少し含む (石灰-長石)	柳井判美文 松本V-1
54-10	34	SD03	男生土器	壺	16.7			口縫に3条の腰凹縫 内ノ削り	外ノにぶい褐色 内ノにぶい褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	スス村賣 草田I
54-11	34	SD03	男生土器	壺	13.6			口縫に3条の腰凹縫	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	スス村賣 草田I
55-1	34	SD03	弥生土器	壺	14.4			口縫に腰凹縫	外ノにぶい褐色 内ノ褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	草田I
55-2	34	SD03	弥生土器	壺	16.2			外ノナゲ、口縫に甘い腰凹縫 内削り	浅黃褐色	微砂粒少し含む	松本V-1
55-3	34	SD03	弥生土器	壺	19.0			口縫に真鍮復縫による5条の 腰凹縫	外ノ浅黃褐色 内ノにぶい褐色	微砂粒含む	松本V-1
55-4	34	SD03	弥生土器	壺	21.4			口縫に真鍮復縫による腰凹縫	明赤褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	草田I
55-5	34	SDX03	弥生土器	壺	10.5			抜削した口縫に1段復縫によ る腰凹縫	外ノ浅黃褐色 内ノにぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	草田3 スス村賣
55-6	37	SDX03	土器部	壺	14.6			外ノ削部は横、下平は腹の斜毛 目 内ノ削り、下部に指付痕	外ノ浅黃褐色 内ノにぶい褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	腹部に刻状文 草田6
55-7	37	SDX03	土器部	壺	13.8			外ノ上下部横削毛目、 内ノ削り、腰溝溝	灰黄色	微砂粒含む (石灰-長石)	草田6
55-8	36	SD03	土器部	壺	13.8			口縫端部に圓 腰溝溝	浅黃褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	草田6
55-9	35	SD03	上部器	瓶	16.0			外ノ荒い横削毛目、 内ノ削り、腰溝溝	外ノ灰白色 内ノ浅黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	明井判美文 草田6新
55-10	35	SD03	上部器	瓶	16.5			外ノ上平は横、下平は腹の斜毛 目 内ノ削り、口と下平部に指は痕	外ノ浅黃褐色 内ノにぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	草田6新
56-1	35	SD03	土器部	壺	13.6	14.7		外ノ削下部は腰溝毛目、 内ノ削り、下平部になで上げ痕	浅黃褐色	微砂粒少少含む (石灰-長石)	腹部に刻状文 側下方に空孔
56-2	35	SD03	土器部	(平底)	17.8	8.0	19.1	外ノ上半は横、下半は斜め削毛 目 内ノ削り、下平部になで上げ痕	浅黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	扁平な底
56-3	35	SDX03	土器部	壺	19.0			外ノ横削毛目 内ノ削り、下平に指付痕、ナゲ	外ノ明褐色 内ノ浅黃褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	網部張る
56-4	37	SD03	土器部	壺	18.0			外ノ横削毛目 内ノ削り、下平部に指付痕	外ノ灰白色 内ノ浅黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	
56-5	35	SD03	上部器	甕	15.4			外ノ上平は横、下半は腹の斜毛 目 内ノ削り、下平に指付痕	外ノにぶい黃褐色 内ノ灰白色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	網部に1m長い 剣突点文
56-6	36	SD03	上部器	甕	14.6			外ノ上平は横、下半は腹の斜毛 目 内ノ削り、下平部に指付痕	にぶい黃褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	
56-7	36	SD03	上部器	甕	17.2			外ノ横削毛目 内ノ削り、一部ナゲ、指付痕	にぶい黃褐色	微砂粒含む (石灰-長石)	網部に深い剣突 文、スス
57-1	36	SD03	上部器	甕	14.6	24.0		外ノ横削毛目 内ノ削り、ナゲ、指付痕	外ノにぶい黃褐色 内ノ褐色	微砂粒含む	部部に2cm長い 剣突点文
57-2	36	SD03	上部器	甕	15.6			外ノ底部は底、底部は横の斜毛 目 内ノ削り	外ノ灰白色 内ノにぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石灰-長石)	底部に1cm長い 剣突点文

標示番号	河川	出土地点	種別	器種	法規(単位:m)			形態・測定の特徴	色調	施上	備考
					上所	底床	側面				
57-3	36	SD03	土師器	壺	14.6		21.5	外／肩部は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、ナダ上げ、指圧痕、 外／肩部は縦、底部は横の刷毛目 内／削り、一部ナダ	外／浅黄色 内／に似る黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	肩部に刻まれ点文。
57-4	36	SD03	土師器	壺	13.7			外／肩部は縦、底部は横の刷毛目 内／削り、ナダ付け、指圧痕、 外／肩部は縦、底部は横の刷毛目 内／削り、一部ナダ	浅黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	肩部に刻まれ点文。
57-5	36	SD03	土師器	甕	16.6			外／縫接部の刷毛目 内／焼硝之後、ナダ付け、指圧痕 外／縫接部は外側に押圧	に似る黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刻まれ点文。 スヌ
57-6	36	SD03	土師器	甕	17.4			外／肩部は縦刷毛目 内／削り、指圧痕	浅黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に1条の削 抹き紋様
57-7	36	SD03	土師器	甕	18.2			外／肩部は縦刷毛目 内／削り、瓶底等に指圧痕	に似る黄褐色	織砂粒合む	肩部に波状文 スヌ
57-8	40	SD03	土師器	甕	14.2			外／肩部は縦刷毛目 内／削り、瓶底等に指圧痕	外／浅黄褐色 内／に似る黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刻まれ点文。
58-1	37	SD03	土師器	甕	13.8			外／肩部は縦、下部は縦の削り直し 内／張り合ひ縫合	に似る黄褐色	織砂粒少し含む (石英・長石)	肩部下に列点 小谷に～3
58-2	37	SD03	土師器	甕	22.0			外／風化のため不明 内／横削り、口縫合部	外／灰白色 内／に似る黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	
58-3		SD03	土師器	内縫口縫合	11.4			外／横刷毛目 内／削り、瓶底部にナダとミガキ	浅黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	肩部に6点の刻 まれ点文。
58-4	37	SD03	土師器	内縫口縫合	13.2			外／風化のため不明、 内／横削り	灰白色	織砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に波状文？
58-5	37	SD03	土師器	内縫口縫合	11.4			外／横刷毛目 内／横削り	に似る黄褐色	織砂粒少し含む (石英・長石)	
58-6	37	SD03	土師器	甕	15.4			外／横刷毛目、 内／横削り、口縫合部を引き上げ	浅黄褐色	織砂粒合む	右側裏系
58-7	37	SD03	土師器	甕	16.8			外／肩部は縦 内／横削り、小切端部に縫合部	外／浅黄褐色 内／灰白色	織砂粒少し含む (石英・長石)	右側裏系
58-8	37	SD03	土師器	甕	17.4			外／肩部は縦目後、隣ナダ 内／横削り	浅黄褐色	織砂粒合む	單純口縫 布置併存
58-9	38	SD03	土師器	ミニチュア 甕	10.0			外／肩+横刷毛目、指圧痕 内／削りとナダ付け	外／浅黄褐色 内／に似る黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	手捏
58-10	38	SD03	土師器	小型甕				外／肩ミガキ 内／削り	外／棕色 内／灰白色	織砂粒少し含む	赤色旋彩
58-11	39	SD03	土師器	大型甕	29.8	9.7	22.0	外／肩部は横、下部は縦の刷毛目 内／上半は横、下半は縦の削り下底／刷毛目	浅黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石) や やもろい	
59-1	37	SD03	土師器	甕				外／ナダ 内／倒り表ナダ	外／灰褐色 内／褐色	織砂粒多く含む	溝地り
59-2	37	SD03	土師器	甕 (門型断片)				外／刷毛目、敵き痕有り 内／肩部は縦	外／浅黄褐色 内／褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	庄内裏系
59-3	38	SD03	赤土土器	甕 (断片)				外／縫接刷毛目 内／縫合	外／に似る黄褐色 内／に似る黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	
59-4	38	SD03	土師器	甕 (断片)				外／上部に横刷毛目 内／削り、指圧痕、黒燒け有り	外／褐色 内／に似る黄褐色	織砂粒少し含む	スヌ付葉
59-5	38	SD03	土師器	甕 (断片)				外／底+横刷毛目 内／削り、指圧痕、墨塗装有り	外／灰白色 内／浅黄褐色	織砂粒多く含む (石英・長石)	平底
59-6	39	SD03	土師器	甕	12.6	2.3	5.1	外／肩部は横、底面は削り 内／削り、底面は削り、指圧痕、黒燒け有り	浅黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	制作途中か
59-7	39	SD03	土師器	甕	11.6	2.4	4.2	外／肩刷毛目、底面は削り後ナダ 内／ナダ、底面は削り後ナダ	外／に似る黄褐色 内／浅黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	
59-8	39	SD03	土師器	甕	10.5	2.3	4.2	外／ミガキ後ナダ 内／ミガキ、底面は削り後ナダ	に似る黄褐色	織砂粒合む	
59-9	39	SD03	土師器	甕	8.8		2.4	外／肩刷毛目、指圧痕 内／ミガキ	外／灰白色 内／浅黄褐色	織砂粒合む	儀内系？
59-10	39	SD03	土師器	肩部 (断片)				外／上部はミガキ、下部は肩部 内／ミガキ	外／浅黄褐色 内／に似る黄褐色	織砂粒少し含む (石英・長石)	円盤充填
59-11	39	SD03	土師器	肩部 (断片)				外／細かなミガキと横刷毛目 内／細かなミガキ	に似る黄褐色	織砂粒合む (白色)	円盤充填
59-12	39	SD03	土師器	肩部 (断片)				外／ミガキ後ナダ 内／ミガキ、ナダ	灰白色	織砂粒多く含む (石英・長石)	円盤充填 儀内系
59-13	40	SD03	土師器	肩部 (断片)				外／肩刷毛目 内／削り	浅黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	
59-14	40	SD03	土師器	肩部 (断片)				外／肩刷毛目 内／削り、肩部は肩刷毛目	に似る黄褐色	織砂粒合む (石英・長石)	円錐透かし 円盤充填

層区 番号	層版	出土地点	種別	蓄 種	寸法(単位:cm)		形態・観察の特徴	色 調	胎 土	備 考	
					口径	底径					
59-15	40	SD03	土師器	壺 (腹部)		9.8	外／縁ミガキ 内／削り	浅黄褐色	微砂粒含む		
59-16	40	SD03	土師器	壺 (脚部)		10.6	外／縫目有 内／削り、ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒含む	腹内系	
59-17	40	SD03	土師器	壺 (脚部)		17.2	外／縫目有 内／削り、長い	明褐色	微砂粒石子含む	脚内系	
59-18	40	SD03	土師器	壺 (脚部)		11.4	外／脚毛口 内／削り足ナデ、長い	浅黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	内面に2条のヘ リ記号	
59-19	41	SD03	土師器	壺脚付 (腹部)	19.3		外／細なミガキ 内／ナデ、底に葉く	外／浅黄褐色 内／灰褐色	微砂粒含む (石英・長石)	一部スス付着	
59-20	41	SD03	土師器	壺脚付 (腹部)	18.4	6.7	5.7	外／脚毛口 内／削り口下、縫ミガキ 脚内／削り	にぶい黄褐色	微砂粒含む石 英・長石	
59-21	41	SD03	土師器	壺脚付	17.6	4.7	5.4	外／ナデ 内／脚毛口ナデ 内／ナデ	外／浅黄褐色 内／粉白	微砂粒含む (石英・長石)	一部スス付着
59-22	41	SD03	土師器	小壺延脚付	12.0	4.6	4.2	外／脚毛口後、ミガキ 内／ミガキ	浅黄褐色	微砂粒少し 含む	
59-23	41	SD03	土師器	小型瓦脚付	8.8		外／ナデ、縫のミガキ 内／脚毛口前、縫ミガキ	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	布留・符印	
59-24	41	SD03	土師器	低脚付			外／内／ナデ 内側有する体部	浅黄褐色	微砂粒多く含む		
59-25	41	SD03	土師器	低脚付 (腹部)		5.9	外／内／ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む		
60-1	38	SD03	弥生土器	器台 (受容盤片)			外／ナデ、口縁に小糸の縫合線 内／ナデ	外／浅黄褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む 赤鉄鉻 板本V-1		
60-2	38	SD03	弥生土器	器台	21.0		外／ナデ、口縁に縫合線 内／ミガキ	浅黄褐色	微砂粒多く含む 赤鉄鉻 板本V-2		
60-3	38	SD03	弥生土器	袋形器台 (腹部)		21.4	外／ナデ、口縁に縫合線 内／ナデ	浅黄色	微砂粒少し含む 赤鉄鉻 板本V-2		
60-4	38	SD03	弥生土器	袋形器台 (腹部)		17.4	外／口縁に斜口縫 内／削り、ナデ	浅黄褐色	微砂粒少し含む 赤鉄鉻 板本V-2		
60-5	38	SD03	土師器	鉢形器台		17.8	外／受容はナデ、脚部は削り	浅黄褐色	微砂粒含む	脚内面に2条の ヘリ出字	
60-6	41	SD03	土師器	鉢形器台	19.4	10.0	10.8	外／内／横ナデ 内／脚部に山	浅黄褐色	微砂粒含む	
60-7	42	SD03	土師器	鉢形器台	22.0	18.0	10.8	外／横ナデ 内／受容山根ミガキ、脚部は削 り	浅黄褐色	微砂粒含む	
60-8	42	SD03	土師器	鉢形器台	20.5	16.2	10.1	外／横ナデ 内／受容山根ミガキ、脚部は削 り	浅黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
60-9	42	SD03	土師器	鉢形器台	20.3	18.0	10.3	外／横ナデ 内／受容は削り脚ナデ、脚部は削 り、脚部は外側に屈曲	外／浅黄褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む (石英・長石)	
60-10	42	SD03	土師器	鉢形器台	20.8	17.5	9.8	外／横ナデ 内／受容は横ミガキ、脚部は削 り	にぶい黄褐色	微砂粒含む (石英・長石)	脚部に円形窪か し
60-11	42	SD03	土師器	山口上器 (山口部)		1.9		脚毛口 ナデ	灰褐色	微砂粒多く含む	
63-1	43	SD04	弥生土器	器		12.8	外／ナデ 内／横ミガキ	外／にぶい黄褐色 内／にぶい黄褐色	微砂粒含む	肩部に刻印列直 文	
63-2	43	SD04	弥生土器	器		14.8	外／ミガキ、口縁に3条の縫合 綫 内／底部はミガキ、以下削り	暗褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	赤色地紋 板本V-1	
63-3	43	SD04	弥生土器	器		15.6	外／ナデ、口縁に2条の縫合綫 内／削り	外／灰褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む (石英・長石)	板本V-1	
63-4	43	SD04	弥生土器	器		15.4	口縁に2条の縫合綫 内／削り	絶色	微砂粒少し含む	板本V-1	
63-5	43	SD04	弥生土器	器		19.6	外／縫目有 内／削り、口縁は長く外反	外／灰褐色 内／灰褐色	微砂粒含む (石英・長石)	草田山	
63-6	44	SD04	土師器	器		16.6	外／横脚有 内／削り	外／浅黄褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)		
63-7		SD04	土師器	器		15.2	外／横脚有 内／削り、脚部に削り痕	外／浅黄褐色 内／灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刻印列直 文	
63-8	44	SD04	土師器	内輪口器		12.4	外／横脚有 内／削り	にぶい黄褐色	微砂粒少し含む		
63-9	44	SD04	土師器	器 (脚部)			外／上半は削り、下半は底の脚毛 口 内／上半は削り、下半は底の削り	浅黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に有輪羽状 文	
64-1	43	SD04	土師器	器		20.8	外／脚毛口 内／削り、ナデ	外／浅黄褐色 内／灰褐色	微砂粒含む	布留塗系	

地図 番号	面積	出土地点	種別	品種	法量(単位:cm)			形態・隔壁の特徴	色調	施 七	備 考	
					上径	底径	高さ					
64-2		SD04	土師器	壺	17.9			外／縦縫毛目 内／横削り	淡黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留美系	
64-3	43	SD04	土師器	壺	17.5			外／縦縫毛目 内／上上がりの削り	外／淡黄褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留美系	
64-4		SD04	土師器	壺	16.1			外／縦縫毛目 内／横削り	外／褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留美系	
64-5	44	SD04	土師器	壺 (削部)				外／縦縫毛目 内／削り、直庄底	外／にぶい黃褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む	側斜的平底	
64-6	43	SD04	陶土器	壺 (底部)			7.8	外／縦縫毛目 内／ナデ	外／にぶい黃褐色 内／灰白色	微砂粒含む (石英・長石)		
64-7	45	SD04	土師器	高杯 (削部)			14.8	外／上部は削毛目、底部はミガキ 内／上部は削り、底部は削毛目	灰黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	3方に円切透かし	
64-8	43	SD04	土師器	高杯 (削部)			15.0	外／削毛目 内／削毛目	淡黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)	円形透かし	
64-9	43	SD04	土師器	低脚杯 (削部)			6.2	外／ナデ 内／ミガキ	外／淡黄褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)	側面にヘラ跡	
64-10	45	SD04	土師器	波形台座			18.0	外／ナデ 内／受部はナデ、脚部は削り	淡褐色	灰	微砂粒含む	
66-1	香須 4 46	SD05	土師器	壺	16.0	6.0	35.4	外／口縫毛目ナデ、肩～脚部は削 内／下半部は削毛目、底部は 削毛目 内／「V」底部にナデ付け痕、肩～脚部は削り、下半部は削りの跡 にナデの跡、直庄、底部	外／浅黄色 内／にぶい黄色	微砂粒少し含む (石英・長石)	ほぼ完形 小谷2	
71-1	45	SD10	須直器	小壺环	8.1	5.0	3.4	ヘア切り後ナデ 凹凸ナデ	灰色	灰	出雲6	
71-2	45	SD10	須直器	壺	13.0	8.0	4.6	凹凸ナデ 凹凸削ナデ	青灰色	灰	吉田村 出雲7	
71-3	45	SD10	土師器	小型盤形器 (削部)			11.4	外／横ナデ 内／削り	にぶい褐色	青 微砂粒少し含む	径1cmの円形透 かし	
71-4	45	SD10	土師器	壺			22.2	外／横ナデ 内／横削り	にぶい黃褐色	青 微砂粒含む (石英・長石)		
71-5	45	SD10	須直器	环 (芯部)			8.8	凹凸名取り無蓋 ナデ	灰褐色	青		
73-1	46	SD13	土師器	壺	14.7			外／横縫毛目 内／横削り	外／にぶい黃褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む (石英・長石)		
73-2	46	SD13	土師器	壺 (口縫部)	16.0			外／ナデ 内／ナデ	にぶい黃褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)		
73-3	46	SD13	土師器	壺	14.2			外／ナデ 内／削り	外／にぶい黃褐色 内／淡黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)		
73-4	46	SD13	土師器	壺 (削部)				外／深後縫切毛口 内／横削り	中黃褐色	青 微砂粒少し含む		
73-5	46	SD13	土師器	高环 (片部)	11.3			外／上半部はナデ、下半部は組ミガキ 内／横縫毛目	外／にぶい黃褐色 内／淡黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	ワイングラス 型、円形容器	
73-6	46	SD13	土師器	波形台 (受部)			23.6	外／横ナデ 内／ナデ	淡褐褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)		
73-7	46	SD13	土師器	高环 (削部)	17.8			外／ナデ 内／横毛口	淡黃褐色	青	龍内系	
73-8	46	SD13	土師器	低脚杯 (削部)	7.0			外／内／ナデ	外／灰白色 内／淡黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)		
74-1	45	SD14	土師器	輪裏土器	12.4			外／横縫直、ひび割れ 内／横ナデ	橙色	初期土		
76-1	48	造模外	陶土器	壺	18.8			外／縫に3条の解剖線、芯端 と底形の剥壳矢印点	赤褐色	微砂粒含む (石英・長石)	坂町外	
76-2		造模外	土師器	壺	14.0			外／横縫毛目 内／横削り、ナデ付け	外／にぶい黃褐色 内／淡黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)		
76-3	47	造模外	土師器	壺	17.2			外／横・直縫切毛目 内／削り、肩部に指压痕	灰白色	微砂粒含む (石英・長石)		
76-4	47	造模外	土師器	壺	15.2			外／横縫毛目 内／削り	淡黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)	翼部に波状文	
76-5	47	造模外 C10Gr	土師器	内側口縫突	13.5			外／横縫毛目 内／横削り	淡黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)		
76-6	47	造模外 E11Gr	土師器	内側口縫突	18.1			外／縫・横縫毛目 内／削り	外／淡黃褐色 内／にぶい黃褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)		
76-7	47	造模外 E11Gr	土師器	壺	16.4			外／ナデ 内／削り	黃褐色	微砂粒含む (石英・長石)	布留美系	
76-8	50	造模外	土師器	ミニチュア (削部)			3.0	外／ナデ 内／削り	外／にぶい黃褐色 内／褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	スヌビ雀	

押出番号	固版	出土地点	種別	器種	寸法(単位:cm)			形態・構造の特徴	色調	所上	備考
					口径	底径	高さ				
76-9	48	遺構外 D11Gr	土師器	瓶(底部) (底部)				外/ナデ 内/指痕	淡黄褐色	青 微砂粒少し含む	平底状の鋸刺
76-10	47	遺構外 D9Gr	土師器	直口壺 (口部)	10.0			外/灰白色 内/指痕	外/灰白色 内/淡黄褐色	微砂粒含む (石英・長石)	
76-11	48	遺構外	赤生土器 (頭・側部)	壺				外/開口口, 瓶部に沈線 内/頭部も口, 上半に塑山痕 後は純い	外/にぶい黄褐色 内/灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-12	48	遺構外	弥生土器 脚付小平壺	壺				外/底部に崩毛口, 他は供えガキ 内/削り、ナギ、指痕	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-13	47	遺構外 F12Gr	土師器	壺	15.0			外/ナデ 内/ナデ, 上半に指印痕	外/淡黄褐色 内/にぶい褐色	微砂粒含む	ワイングラス型
77-1	48	遺構外 D11Gr	土師器	直壺	21.5	13.4	13.1	外/外部は可凹, 周縁は板ミガキ 内/环部はガキ, 脚部は削り	淡黄褐色	微砂粒多く含む	
77-2	48	遺構外	赤生土器 (底部)	壺	16.6			外/複数ガキ, 瓶部に難波の沈線 内/ミガキ, 瓶部は直り後ナデ	外/複数 内/にぶい褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	松本V-2
77-3	48	遺構外 D10Gr	弥生土器 (底部)	壺				外/内/ナデ 内/壁に難波文	外/にぶい褐色 内/にぶい長穂色	微砂粒含む	赤生遺物 松本V-2
77-4	49	遺構外 D11Gr	土師器	鉢形器(底部)	21.8			外/ナデ 内/ナデ	淡黄褐色	微砂粒含む	
77-5	49	遺構外, D11Gr	土師器	鉢形器(底部)		15.8		外/ナデ 内/削り	褐色	やや荒い砂粒多 く含む	赤生地
77-6	48	遺構外 D11Gr	土師器	鉢形器	18.9	17.9	9.7	外/ナデ, 硬ミガキ 内/削りは素ミガキ, 脚部は削り	外/淡黄褐色 内/淡黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	四方に円形透かし
77-7	50	遺構外 A3Gr	土師器	瓶型土器?				外/横割毛口, ナデ 内/削り	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
77-8	48	遺構外 D10Gr	土師器	吹っ手				削り, 剥毛口, ナデ 一部に若泥痕	灰褐色	微砂粒含む	
77-9	49	遺構外 B9Gr	須恵器	壺		12.2	3.0	天井部は削り後ナデ	灰色	青	擬宝珠状渦み 高尾IV-B
77-10	49	遺構外	須恵器	壺		18.3		天井部は削り後ナデ 自転ナデ	灰色	青	擬宝珠状渦み
77-11	49	遺構外 A4Gr	須恵器	壺		14.1	3.9	天井部は削り 回転ナデ	灰色	青 微砂粒多く含む	輪状渦み
77-12	49	遺構外	須恵器	壺		15.2	2.6	天井部は削り後ナデ 回転ナデ	灰褐色	青	輪状渦み
77-13	49	遺構外	須恵器	壺				天井部は削り 四輪ナデ	灰色	青	輪状渦み
77-14	49	遺構外 H.C3.4Gr	須恵器	小叩壺	11.4		2.9	底部は4つ切り 四輪ナデ	灰色	青	
77-15	49	遺構外 A3Gr	須恵器	壺	13.9		4.6	四輪水切り 回転ナデ, 1段縁部を屈曲	外/にぶい褐色 内/にぶい赤褐色	青 微砂粒含む	
77-16	49	遺構外	須恵器	壺		10.8		回転水切り 回転ナデ	灰褐色	青 微砂粒少し含む	胎生立村 石見系
77-17	49	遺構外	須恵器	壺	10.8	7.8	4.4	四輪水切り 回転ナデ	灰白色	青	
78-1	50	遺構外 B7Gr	土師器	製塙七器	11.5			外/指痕 内/細かな布痕痕, 器壁薄い	淡黄褐色	青褐色上 微砂粒含む	口縁端部尖る
78-2	50	遺構外	土師器	脚附上器	12.4			外/脚附, 沈庄痕 内/ナデ, 器壁薄い	にぶい褐色	青褐色上 口縁端部丸い	
78-3	50	遺構外 I2Gr	土師器	製塙七器	8.4			外/指痕 内/指痕, 器壁薄い	淡黄褐色	青褐色 (赤褐色鉱混)	口縁端部丸い
78-4	50	遺構外	土師器	脚附上器	8.0			外/指痕, りび削れ 内/指痕ナデ痕, 器壁薄い	淡黄褐色	青褐色上 指痕上	口縁端部上に削 み目
78-5	50	遺構外	土師器	脚附上器	10.0			外/指痕, 器壁薄い 内/指痕ナデ痕	外/にぶい褐色 内/にぶい黃褐色	青褐色上 指痕上	口縁端部平坦
78-6	50	遺構外	土師器	製塙土器	10.8			外/指痕, 器壁薄い 内/ナデ	外/灰褐色 内/淡黄褐色	青褐色 (赤褐色鉱混)	口縁端部半坦
78-7	50	遺構外 I3Gr	土師器	製塙土器	10.0			外/指痕, 器壁薄い 内/指痕ナデ痕	淡黄褐色 一部褐色	青褐色 (赤褐色鉱混)	口縁端部尖り弧 状
78-8	50	遺構外 I3Gr	土師器	壺 (底部破片)				外/ナデ 内/削り	にぶい黄褐色	青砂粒多く含む (石英・長石)	
78-9	50	遺構外 A3Gr	土師器	壺 (底部破片)				外/荒い剥毛口, ナデ痕 内/荒い削り	褐色	青砂粒含む	

### 出土遺物観察表（土製品）

番号	図版	出土地点	種別	法規(単位:cm.g)					色調	胎土	備考
				長	巾	高	底径	孔径			
7.7	23	SX01	土製支脚 (脚部)			1.1			にぶい黄褐色	鐵砂混合土	崩り後、ナデ
16-2	23	PO422	土製支脚 (受部)			1.1			にぶい黄褐色	鐵砂混合土	スス付芯
41-10	28	SK10	土軸	2.5 (残存)			2.1	0.07	褐色		
60-12	42	SD03	丸手(?)				2.2	0.04			轟所の実施部を転用? 中央に穿孔
60-13	番号4 42	SD03	不明	2.8	3.6			28	褐色	鐵製土	鏡に17mmの開口 鏡の裏、または各の壁か?
78-10	50	遺構外	土製支脚 (受部)	8			5.1		にぶい黃褐色	粘土土	全体に擦痕斑
78-11	50	遺構外	土製支脚 (受部)	6.7			4.2		にぶい黃褐色	粘土土	全体に擦痕斑
78-12	50	漆器外	土製支脚 (脚部)		11	9.8			外:灰黃褐色 内:にぶい黃褐色	漆製土	全体に擦痕斑 手球状に擦痕がある
78-13	50	遺構外 (A2Gr)	土軸	4.2 (残存)			1.9	0.06	にぶい褐色		
78-14	50	遺構外 (A2Gr)	手球				7.5	(測定)	褐色		

### 出土遺物観察表（石器）

番号	図版	出土地点	種別	材質	法規(単位:cm.g)					備考
					最大長	最大幅	最大厚	外径	孔径	
35-7	25	SX07	焼乳片刃付 斧	流紋岩	8.5	8.6	3			189 鋸齿の荒形 SK03からの中入とを考えられる
35-8	26	SK07	砾石	麻叔岩	3.8	10.4	6.6			383
46-12	30	C11Gr 土加壓9	砾石	さめ細かな 砂岩	6	5.6	2.8			SD01の砾石と接合 削れた後、磨削されたと思われる。
50-5	51	SD01	砾石	さめ細かな 砂岩	6.6	5.2	3.5			141 C11Gr上蓋取りの砾石と接合、SD04からの混入の可能性
60-14	42	SD03	砾石	安山岩質 斑岩	11.7	8.6	5.1			810
71-6	41	SD12	砾石	流紋岩	9	7.8	4.2			487
73-9	41	SD13	石縫	流紋岩	11.8	9.4	3.5			623
78-16	50	遺構外	砾石	砂岩	7.6	6	4.2			235
78-17	50	遺構外	砾石	砂岩	6.1	4.1	2.9			100
78-18	50	遺構外	砾石	泥岩?	7.4	4.7	3.8			242

### 出土遺物観察表（鉄製品・古銭・その他）

番号	図版	出土地点	種別	材質	法規(単位:cm.g)					備考
					無人長	無人幅	無人厚	重複		
27-5	46 51	SX01	古鏡	銅	2.1	2.5				1枚が束ねられた状態で出土。 年代不明
38-3	25 51	SK09	平刃刀鍔	銅	6.7	2.1	1.2	20		
51-9	51	SD02	刀子?	銅	11.2	1.7	1	18		
78-15	51	遺構外	不明	銅	7.1	2.6	1.6	35		

# 図版



調査前状況(東側)南から

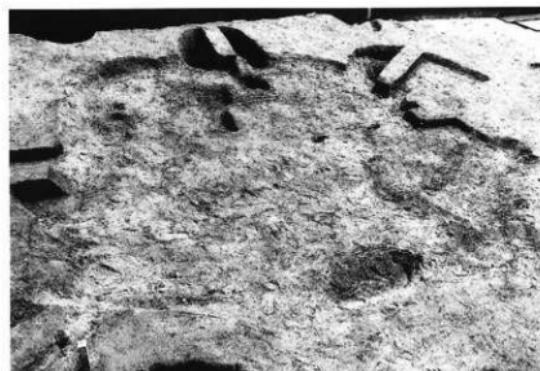


調査状況(第3次調査区から第4次調査区を望む)

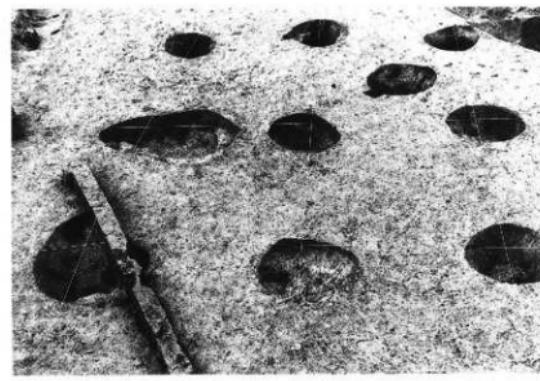
図版2



SI01 調査状況(東から)



SI01(北から)



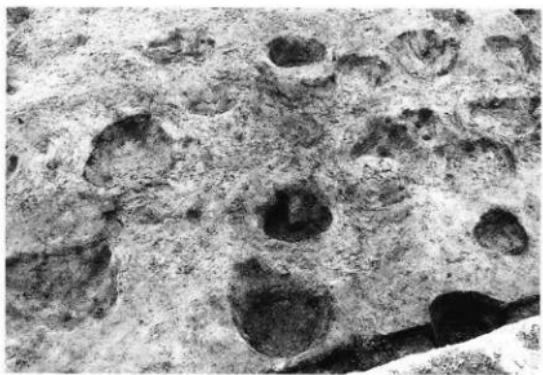
SB01(南から)



SB02検出状況(南から)



SB02ピット土層断面



SB02(南から)